長塚節全集

第參卷

長塚節著

長塚節歌集

東京
春陽堂版

長塚節略年譜

明治十二年　一　歳

四月三日、茨城縣下總國結城郡岡田村國生に生る。長塚源次郎の長子。父源次郎二十二歳、母たか子二十歳。

明治十三年　二　歳

七月、弟順次郎生る。

明治十四年　三　歳

「百人一首」を諳誦し、「いろは歌」を確實に讀む。當時より一生を通じて記憶力甚だ強し。

明治十五年　四　歳

四月、妹とし子生る。

明治十六年　五　歳

四月、學齡に達せざれども國生小學校に入學す。七月、弟整四郎生る。

明治十八年　七　歳

一月、妹はな子生る。

明治二十二年　十一歳

三月、國生小學校尋常科卒業、四月下妻尋常高等小學校に入學。

明治二十六年　十五歳

三月、下妻高等小學校卒業。四月、縣立水戶中學校に入學。

明治二十八年　十七歳

夏、下野國鹽原溫泉に赴き療養す。

明治二十九年　十八歳

腦神經衰弱のため水戶中學校を退く。この頃より和歌を作る。夏、鹽原溫泉に

療養す。秋、再び鹽原に遊ぶ。

明治三十年　十九歳

春、病氣療養のため上京。山田鐵藏氏の山田病院に入院す。夏、上野國草津溫泉に療養、滯留十一週日。

明治三十一年　二十歳

是年二月より五月に亙りて、竹の里人正岡子規「歌よみに與ふる書」「人々に答ふ」「百中十首」等を新聞「日本」に連載す。節、後に當時の事を自ら記して曰く「歌よみに與ふる書といふのは十回にわたつたのであつたが、自分にはいかにも愉快でたまらないので、丁寧に切り拔いておいて頻りに人にも見せびらかした………百中十首が出ると初めは變なものだと思つたが段々面白く感じて來てたうとう眞似て見るやうになつた………」

明治三十二年　二十一歳

徴兵檢査を受く。不合格

明治三十三年　二十二歳

三月、二十八日初めて東京根岸に正岡子規を訪ふ。三十日再び子規を訪ふ。席上「竹の里人をおとなひて」十首を作り、「日本」に掲載せらる。以後年數回上京して時に月餘滯在、其間殆ど隔日に子規を訪ふ。四月一日、根岸庵の歌會に列し、左千夫、麓、秀眞、格堂其他在京の諸同人と相識る。七月、伊藤左千夫と日光に遊ぶ。「日本」の募集課題瀧の歌を作らんがためなり。

明治三十四年　二十三歳

萬葉集及記紀の歌を研究し、多く長歌を作る。作歌は「日本」に發表す。

明治三十五年　二十四歳

四月より「心の花」に「うみ苧集」を連載す。五月、「四月の末には京に上らむと云云」九首を「日本」に掲載。九月、十九日正岡子規逝く。當時伊藤左千夫は子規

と節との氣魂流通の狀を「理想的愛子」と云へり。

明治三十六年　二十五歳

一月、「狂體十首」を「日本」に發表す。三月、妹とし子嫁ぐ。六月より根岸短歌會にて雜誌「馬醉木」を發行す。伊藤左千夫、香取秀眞、結城素明、岡麓、平子鐸嶺、蕨眞、安江秋水、森田義郎等と共に編輯員たり。「馬醉木」創刊號に「萬葉卷の十四」を發表す。七月より八月に亙り、京都、奈良、伊勢、紀伊より三河、伊豆に遊ぶ。八月より「馬醉木」に「東歌餘談」を連載す。十一月、「西遊歌」を「馬醉木」に發表す。十二月、「馬醉木」に寫生文「月見の夕」及び「竹の里人」を發表す。この頃多く「桜芽」の號を用ゐる。

明治三十七年　二十六歳

二月、「萬葉口舌」及寫生文「土浦の河口」を、四月、寫生文「利根川の一夜」、短歌「榛の木の花」を、五月、「萬葉口舌」を、七月、「歌の季に就て」を、八月、「夏季

雜詠」「竹の里人選歌に就て」を、何れも「馬醉木」に發表す。五月、弟整四郎陸軍士官學校を卒業す。「竹の里人選歌」根岸短歌會より出版せらる。

明治三十八年　二十七歳

一月、「馬醉木」に「寫生の歌に就て」「秋冬雜詠」を發表す。二月、「馬醉木」に「萬葉口舌」及「俳句三十二章」を發表す。四月、「馬醉木」に「枯桑漫筆」を發表す。弟整四郎歩兵少尉として出征す。五月、「馬醉木」に「才丸行き」「春季雜詠」「歌譚抄を讀て」を發表す。五月二十二日、發程房州を一周し、六月五日歸郷、途中、清澄山八瀬尾の谷に炭燒を見一週日を送る、この頃より改良炭燒を研究し庭前に炭竈を築き醋酸石灰の製造を試む。七月、「馬醉木」に「房州行」及「炭燒くひま」を發表す。八月、十八日發程。房州より甲斐。諏訪、木曾、美濃、近江湖畔、京都、丹波、丹後、攝津、伊勢に遊び、九月十三日歸郷。諏訪にて志都兒、勘内、柿乃村人と共に霧ケ峰に登る。九月、「馬醉木」に「枯桑漫筆」を、十一月、

「馬醉木」に「羇旅雜詠」を發表す。

明治三十九年　二十八歳

一月、「馬醉木」に、長詩「鬼怒沼の歌」を、二月、「氷塊一片」を、三月、寫生文「痍のあと」及び「亂礁飛沫」を發表す。六月より七月に亙りて、常陸平潟港に療養す。七月、「馬醉木」に青果の號を以て寫生文「炭燒の娘」を發表す。八月より九月、松島、金華山より出羽最上に出で、大沼の浮島を見、米澤より檜原峠を越えて會津に入り、新潟に至り佐渡に航す、還りて彌彥山に登り、中津川の上流秋山の鄕を探り、信越の國境苗場山を越えて上州沼田に出づ、此行程四十日。十月、「馬醉木」に「青草集」及び寫生文「須磨明石」を發表す。

明治四十年　二十九歳

三月、「馬醉木」に寫生文「鉛筆日抄」「濱の冬」を、五月、「馬醉木」に長詩「雲雀の歌」及び「早春の歌」を發表す。十月、陸中平泉より羽後象潟地方に遊ぶ。十

一月、「ホトトギス」に寫生文「佐渡が島」を發表す。

明治四十一年　三十歲

一月、「馬醉木」に長詩「獨」及び「初秋の歌」を發表す。「馬醉木」此月を以て廢刊す。二月、「アカネ」創刊號に「晩秋雜詠」を發表す。三月、小說「芋掘り」を「ホトトギス」に、寫生文「白甜瓜」を「アカネ」に發表す。四月、京都、奈良、吉野に遊ぶ。「アカネ」に寫生文「松蟲草」を發表す。六月、「アカネ」に「暮春の歌」を發表す。七月「アカネ」に「手紙の歌」を發表す。弟順次郎東京帝國大學工科大學を卒業す。九月、榛名山を越え、草津の奧山より切明溫泉に遊ぶ。十二月、陸中平泉に遊ぶ。

明治四十二年　三十一歲

一月、「ホトトギス」に小說「開業醫」を發表す。三月、「アララギ」に「旅の日記」を發表す。八月、「ホトトギス」に「菜の花」を發表す。九月、「ホトトギス」に小

說「おふさ」を發表す、十月、平泉、淺蟲溫泉、弘前地方より十和田湖に遊ぶ。「ホトトギス」に小說「教師」を發表す。

明治四十三年　三十二歲

一月、「ホトトギス」に小說「隣室の客」を、「アララギ」に小品「愛せられざる花」を發表す。二月、「ホトトギス」に小說「太十と其犬」を發表す。六月より「東京朝日新聞」に長篇小說「土」を連載す。八月、痔疾を患へ外科手術を受く。「アララギ」に「乘鞍岳を懷ふ」十四首を發表す。冬、岐阜及京都に遊ぶ、此行中岐阜坪井伊助氏を訪ひて竹林研究をなす。

明治四十四年　三十三歲

春、堆肥の研究をなし、また竹林栽培に着手す。七月頃より咽喉に痛みを覺ゆ。十一月、上京、岡田和一郎博士の診察を受け、喉頭結核と診斷せらる。十二月、五日岡田博士の根岸養生院に入院す。

大正元年　三十四歳

二月、「アララギ」に「わが病」を發表す。二月二十二日根岸養生院を退院し、下谷區那須館に止宿す。三月、七日歸鄕す。十六日出立、名古屋、月ヶ瀨、笠置を經て、二十二日京都に入る。二十六日京都醫科大學附屬病院に入院す。四月、「アララギ」に「病中雜詠」を發表す。四月十日京都大學病院を退院す。十二日大和吉野山に遊ぶ。十五日再び京都に歸る。二十日京都發、二十二日福岡九州大學にて、久保博士の診察を受く。二十五日福岡を立つて鹿兒島方面に旅行す。二十九日開聞嶽登山、五月、宇土より長崎に航し、七日福岡に歸る。再び久保博士の診察を受く、此月「土」を春陽堂より出版す。六月、對馬に遊ぶ。七月、四日福岡を出立途中、耶馬溪、英彥山、別府、道後、屋島、琴平、高砂、和歌山、高野山、奈良、京都、近江に遊び、九月二十五日歸鄕す。此頃より特に佛畫、佛像、釣鐘等に興味を持ち多く古社寺を訪ふ。十一月、上京、下谷那須館

に滯在、岡田氏に就て岡田式靜座法を始む

大正二年　三十五歳

三月、十四日東京發、十九日福岡着、再び久保博士の診療を受く。四月、四日、福岡發、宮島、奈良、京都より、伯耆、出雲に遊び、月末歸鄕す。七月、三十一日伊藤左千夫逝く。八月、「芋掘」を春陽堂より出版す。十一月、上京、神尾友修氏の金澤病院に入院す。

大正三年　三十六歳

一月、金澤病院を退院、歸鄕。三月、十四日神田區橋田茂重氏の橋田內科醫院に入院。五月より「アララギ」に「鍼の如く」を連載す。五月二十九日橋田內科醫院を退院、三十日歸鄕。六月、十日三たび福岡に到り、久保博士の診療を受く。二十日、九州大學病院に入院す。八月、退院、日向靑島に遊ぶ。九月、福岡に歸り、市外東公園平野屋に滯在、久保博士の治療を受く。

大正四年　三十七歳

一月、「アララギ」に「鍼の如く其五」を發表す。一月四日、九州大學病院に入院。
二月、七日夜、昏睡狀態に陷り、八日午前十時死去。九日、福岡崇福寺和尚病院の屍室にて讀經の上入棺し、久保博士、曾田、掛下、高崎、西卷、川邊、の醫員中野屋主人及父源次郎、弟頓次郎等付添ひ崇福寺に到る。更に讀經あり、一同燒香す。後市外火葬場にて荼毘に附す。法諡を秀岳義文居士といふ。
十一日、父源次郎、弟頓次郎遺骨を護りて東京着。同夜、小石川小布施邸にて、在京の親戚、友人等通夜す。十二日、遺骨郷里に歸着。三月、十四日佛式を以て葬送す。

長塚節歌集目次

短歌

明治三十三年

明治三十四年

明治四十年

明治四十一年

長歌

明治三十四年

明治三十五年

明治三十六年

俳句

挿圖

明治三十三年

根岸庵

竹の里人をおとなひて席上に詠める歌

歌人の竹の里人おとなへばやまひの床に繪を
かきてあり

荒庭に敷きたる板のかたはらにふる鉢ならび
赤き花咲く

生垣(いけがき)の杉の木ひくみとなり屋の庭の植木の青
芽ふく見ゆ

茨の木の赤き芽をふく垣の上にちひさき蟲の
出でて飛ぶ見ゆ

人の家にさへづる雀ガラス戸の外に來て鳴け
病む人のために

ガラス戸の中にうち臥す君のために草萌え出
づる春を喜ぶ

古雛を飾りひひなの繪を掛けしその床の間に
向ひてすわりぬ

わが草のはつかに萌ゆる庭に來て雀あさりて
隣へ飛びぬ

ガラス戸のそとに飼ひ置く鳥の影のガラス戸
透きて疊にうつりぬ

枝の上にとまれる小鳥君のために只一聲を鳴
けよとぞ思ふ（座上に剝製の鳥あり）

森

野を行けばただに樂しく森行けばこととしも
なく物ぞ偲ばゆ

すがの根のながながし日も傾きて上野の森の
影よこたはる

3

吉野園

六月二十日四つ木の吉野園に遊びて

尖葉の菖蒲のくさの花さきて白にむらさきに
園にぎはしも

四つ柱土にうづめて藁ふきてあやめの園にあ
づまやを建つ

梅の木の青葉のもとに雲なしてさける菖蒲に
ひろき園かも

廣園のあやめの花のはなびらのひとつひとつ
に風ふきわたる

菖蒲草その花びらのむらさきを衣(きぬ)にし摺りて
妹に着せばや

大きなる菖蒲のつぼみ花になりて萎みし花の
上をおほひぬ

はなびらのうすむらさきに紫の千筋(いき)百いきい
きあるあやめ

菖蒲草しぼり隈どり品(しな)はあれど白とむらさき
と二つを喜ぶ

あやめ咲く園の細道いくめぐり池をめぐりて
亭にいこひつ

三つひらの菖蒲の中に六つひらの菖蒲の花の
ともしきろかも

むらさきの、菖蒲の花は黒くして白きあやめの
目にたつ夕べ

藁ふきの四阿（あづまや）すでに灯ともして園のあやめは
ただ白く見ゆ

菖蒲さく園を訪ひ来てその園に水鷄巣くひし
はなしを聞きぬ

7

ぬば玉の　のあやめのうねうねは白木綿布(しらゆふぬの)を
しけるが如し
ともし火を釣りたる園の四阿(あづまや)のまはりに白き
あやめ草かも
白妙のあやめの上をとぶほたるうすき光をは
なちて去りぬ
たまたまに出でし螢をめづらしみ取らむとす
れば其光きえぬ

讀平家物語

野に山にたらひわたれるもののふのをたけび
なして水鳥たちぬ（富士川）

綱とると尻毛手握りむちうてばしりへの方へ
馬馳せいだす（同）

逃げ去りしいくさの跡にみだれたる弓は弱弓
矢は細矢にて（同）

かしこきやすめらみことにありながらありと
ふ妹が家も知らなく（小督）

かしこきやすめらみことにありながら朝な夕なに妹を戀ふらく（同）

人の臣のかしこきかもよ人の君を板屋の中にこめたてまつる

君故にさかえし我よわがために衰へたりし君をかなしむ（佛）

瀧

うちわたす二つの瀧の下つせの落合の瀬は木深み見えず

二荒のふもとを行けば野のきはみ山あひにして瀧かかる見ゆ

二荒の山のつづきの山もとにたぎつ七瀧七つ並み落つ

あしびきの山の夕立風あれて瀧のとどろの音もきこえず

杉の木のしみたつ山の山おくの雲湧くところ瀧落ちとよむ

東宮御西遊

天つ日の日つぎにませば日のみこは國原まね
くいめぐりたまふ

とよ秋をきよみさやけみいまだ見ぬ國を見さ
すといでたたすかも

たなつもののみのらふ秋をよろしみといでます
空に鶴なきわたる

みあらかをまだきたたして白雲のたなびく山
のあなたゆかすも

とこよべにありとふ神は和田の原沖の汐路に
玉しくらむか
白雲のむかふすかぎり山々は紅葉かつらぎむ
かへまつらふ
山にゐる毛ものも海の鰭物も秋にしあればみ
けのままに
みとまりの宮居の上にむらさきの夕棚雲はた
なびきわたる

祝御着帶歌

雲の上のよろこびごときのふとのみ思ひはべりしにはや御着帶の事きこえはべれば

むらさきの花をつくりていはひてし月の六かはり秋ふけわたる

神ながら契らす秋の長秋をみこのきさいに玉こもります

すめろぎのみすゑさかゆく大み代に天なる神は玉くだします

こもらせる玉をたふとみやすらかにあふせた
まへといのりたてまつる
をにませば日のすゑとほぎめにませば月のす
ゑとほぐ玉にいますはや
天なるや神のくだせるうづの玉をことほぎま
つることのかしこさ
かがなべて五つのおよび二をりの十かはり月
日さきくといのる
こもらせる玉をかしこと山川のきよき河内に
宮(みや)居(ゐ)せすかも

かしこきや玉くだらせる國原にかがよふ雲の
八重たちのぼる
國原に玉くだらせるしるしありてとよの長秋
ながくやすらかに
天にまし國にいませるもろもろの神のまもら
す玉のたふとさ

海

住吉のあまにもがもな常世べのをとめが宮に
行けらく思へば

雪

あら山の雪にこやせる旅人あはれ家のらばい
行きて妹に告げやらましを

明治三十四年

課題の歌

西吹くや風さむければ網ほせるみぎはの葦に氷むすびぬ（氷二首）

氷ゐる水のそこひの白珠の目にはつけどもとりがてぬかも

いはひ瓮(へ)にうま酒みてて埋(う)めきとふ野べの阜(つかさ)は松木たれたり（酒）

萱刈りて畑なひらきそ麻田比古(まただひこ)が額(ぬか)の片(かた)へに麥蒔かば足り（滑稽二首）

君によりなごむ心はにひ菜に包む海鼠のしかとくるごと

霞が浦

常陸國霞が浦に舟を泛べてよみける

葦の邊を榜ぎたみ行けば思ほゆる妹と相見の埼近づきぬ

たづさへて相見の埼のむら松の待つらむ母に家苞もがも

沖つ邊にい行きかへらふ蜑舟は若鷺(わかさぎ)捕らし秋たけぬれば

白波のひまなく寄する行方(なめがた)の三埼(みさき)に立てる離れ松あはれ

いさり舟白帆つらなめ榜(こ)ぐなべに味村(あぢむら)騒ぎ沖に立つ見ゆ

霞(かすみ)が浦岸の秋田に田刈る子や沖榜ぐ蜑が妹にしあるらし

ささら荻(をぎ)あしの穗わたる秋風に蜑が家居に網干せり見ゆ

草枕旅にしあれば舟うけてことのなぐさに榜ぎ廻り見つ

秋思

吾父は一のことにかかづらひて、一たびは牢の内にもつながれけるが、三とせになれどもことの疑ひはれず、その間心なきたきしめしこといくそばくぞや、此の年十月のはじめかさねて召し出さるることとなりければ、うれへあらたに来る思ひありて堪へがたくおぼゆるままによめりける

ちちのみの父は行かすもこと分(わけ)の司(つかさ)のにはへ
父は行かすも
吾父にことなあらせそわがために一人の母が
泣かざらめやは
ちゝのみの父を咎めむ掟(おきて)あらば失(う)せもしなな
む人知らぬとに
かくのみにつれなき物か世の中に侫(ねぢ)けし人は
父はあらなくに、
ちちのみの父を念へばいゆししのいためる心
なぐさもらなく

世の中はわりなき物かまがつみに逢ひてすべなき父をし念へば

月日はもここだも經れどいや日けに憂はまして忘らえぬかも

わがこころなぐさまなくに父もへばまうら悲しき秋の風吹く

ははそはの母の命がうらさびてうれたむ見れば心は泣かゆ

いつたりの子等が念ひは久方の天にとほりて人も知りこそ

日々の歌

十月二十四日、朝の程よりくもる、舊暦九月の十三日なり

との曇り天の日も見ず吾が待ちし今宵の月夜
照らずかもあらむ

二十五日夕ぐれに鴫網を張る

押し照れる月夜さやけみ鳥網(とあみ)張る秋田の面に
霧立ちわたる

秋の田の穗の上霧合へりしかすがに月夜さや
けみ鴫鳴き渡る

夕されば鴫代す田居に鳥網張り吾が待つ月夜
風吹くなゆめ

秋の田に鳥網張り待ちこのよひい清き月夜に
鴫とりかへる

二十六日館とりて竹を伐る

むら鳥の塒竹むら下照りてにほふ柿の木ちり
にけるかも

二十七日、鬼怒川のほとりを行く

うぐひすのあかとき告げて來鳴きけむ川門(かはと)の
柳いまぞ散りしく

二十八日

秋の田に少女子すゑて刈るなべに櫨(はじ)とぬるで
と色付きにけり

二十九日、なにがしの寺の庭にある白膠(ぬる)
木(で)の老木の實を結びたるを見て

くれなゐに染みしぬるでの鹽の實の鹽ふけり
見ゆ霜のふれれ、ば(ぬるでの實は味辛し故に方言鹽の實といふ)

三十日、雨ふる

秋雨に濡らさく惜しみ柿の木に來居て鳴くかも小笠かし鳥

明治三十五年

ゆく春

四月の末には京に上らむと思ひ設けしことの叶はずなりたれば心悶えてよめる歌

青傘(あをがさ)を八(や)つさしひらく棕櫚(しゅろ)の木の花咲く春になりにたらずや

楤(たら)の芽のほどろに春のたけ行けばいまさらさらに都し思ほゆ

荒小田(あらをだ)をかへでの枝に赤芽吹き春たけぬれど一人こもり居(ゐ)

都邊を戀ひておもへば白樫の落葉掃きつゝありがてなくに

思ふこと更にも成らぬ枇杷の樹の落葉の春に逢はくさびしも

春畑の桑に霜ふりさ芽立ちのまたきは立たずためらふ吾れは

くさまくら旅にも行かず木屋の芽立つ春日は空しけまくも

にこ毛立つさし穂の麥の招くがね心に思へど行きがてぬかも

おもふこと楢のさ枝の垂花のかゆれかくゆれ
心は止まず

うみ学集

成田の梅林を見る

下埴生の成田の佛ををろがむと梅咲く春に逢ひ
にけるかも

みほとけに參來る人の世心に見てを行くべき
梅の花これ

あづさ弓春にしあれば梅の花時よろしみと咲きにけるかも

いかり綱五百榑杉に包まへる梅の林は見れど飽かぬかも

全枝にいまだ咲かねど梅の花散らくを見れば久しくあるらし

梅の花疾きと遅きと時はあれど咲きの盛りの木ぬれしよしも

梓弓梅咲く春に逢ひしかばおもしろくして去なまく惜しも

まだき咲く梅の林にうぐひすの年の稚(わか)みかい
　かくろひ鳴く

うぐひすは五百(いほ)杉(すぎ)村(むら)を木(こ)深(ぶか)みと未だも馴れず
　時稚(わか)みかも

梅のはな疾(と)きも遅(おそ)きも春風の和(なご)吹く息の觸る
　らくと否と

息(おき)長(なが)の春かせ吹けば列(つら)貫(ぬ)ける秀(ほつ)枝(え)の珠しここ
　に咲く見ゆ

梅の木は花かも咲けるひはつ女の白珠粧ひ今
　するらしも

白珠は緒にも貫かくと照るといへど枝に貫く
珠香さへ包めり

鶯の咋ひ持つ花を緒に貫きていかけ引けらば
寄り來ざらめや

香取の梅を見て

吾はもや梅見にきたりこの春は復は見がたみ
今日見にきたり

かしこくも吾はあるかも春雨の降りての後に
梅見すらくは

舟の秀ははるかにあれどここにして振放見ればの上ゆ見ゆ

檝取のや稻幹くくる薦槌のい行きかへらひ梅見つわれは

梅の花咲きも咲かずも川舟の潮來の見ゆるこの岡うるはし

全木には梅まだ咲かずうべしもよ麥の青薦しきうすくこそ

この梅は花のともしも春風の吹きすくなみか花の乏しも

利根川を渉る

燒鎌の利根の川門に萱はあれど手長廣生と刈りもあへぬかも

利根川を打ち越え來れば鳥網張る湖北村にうぐひす鳴くも

印旛沼

伊丹庭の湖網引き船漕ぐ葦の邊の和の春風いまだ寒みか

雙生丘

雙生の椿咲く丘はしきよし花はつらつらつら樹さへつらつら

二見(ふたご)は椿さはなれどひた丘に木垂り木根立ち
しかさは見えず

利根川の葦原を過ぎて鬚うすき人を思
ひよせて戯れたる歌五首

葦(あし)株(くひ)は焼けばさは萌ゆ葦の如萌ゆらむものぞ
焼かせその鬚

刈(かり)株(くひ)の株(くひ)の焼生(やけふ)に焼けのこる葦の古穂にさね
似たる鬚

春風はい吹き渡れどうすき鬚葦にあらねば萌
えぬその鬚

焼株の灰掻き持ちてこり塗らば蓋しか萌えむそのうすき鬚

やけ株の灰こり塗らば正髯と人かも見らむ本あら小髯

消息のはしにかき付けて人々の許へやりたる中

葛飾の梅咲く春を見に行かむたどきも知らず一人こもり居（本所へ三首）

木下川の梅の林に挑細の吾が見し少女わすれかねつも

わが宿は人の來ぬ宿人はくれど梅見に來つと
人の來ぬ宿

さ蕨の萌え出づる春に二たびもい行かむ山の
筑波しうるはし（筑波のふもとへ二首）

さ蕨の人來人來とさし招く春にし逢はばたぬ
しけまくも

二月二十五日筑波山に登りて國見して
作れる歌

筑波嶺ゆ振りさけ見れば水の狹(さ)沼(ぬま)水の廣(ひろ)沼(ぬま)霞
たなびく

御鏡の息吹のはしに曇るなす國つ廣原かすみたる見ゆ

筑波嶺の巖根踏みさくみ國見すと霞棚引き隔てつるかも

春霞い立ち渡らひ吾妻のやうまし國原見れど見えぬかも

筑波嶺の的面背面に見つれども霞棚引き國見しかねつ

春がすみ立ちかも渡る佐保姫の練の綾絹引き干せるかも

佐保姫の練綾絹のあやしかも國土ひたに覆へる見れば

うす絹と霞立ち覆ひおぼろにも國の眞秀ろの隱らく惜しも

地祇み合ひしせさす春とかも練絹おほひ人に見えずけむ

思ほゆることの如くは練絹の霞のころも裁たまくし思ほゆ

下妻なる狹沼のほとりは吾幼き折のすみとなりければ見るに懷しき思ひぞすなる、今年の春舟を泛べて漫ろに昔の事など思ひいでければ

わらはべに吾ありしかば舟競ひ漕ぎせりける
狭沼ぞこれは

これはもや水たまりの沼種おろす八十水田村
へ水くまりの沼

蘆角の萌ゆる狭沼の埴岸に舳ときはなちて吾ひ
とり漕ぐ

岸のべの穂立柳は茂れどもありける家を見ぬ
がともしさ

いにしへの二もと柳妹に別れひともと立てり
水付く柳

二もとありける柳妻なしにただ一本にあるが
うれたさ

水付くやひともと柳人ならば言(こと)問はましをひ
ともと柳

わか草の妻覓(ま)ぎかねてひとりある柳を見れば
昔おもほゆ

妹(いも)柳(やなぎ)今もさねあらば舟寄せて見て行かまくの
朽ちにけるかも

狹沼邊のひともと柳木(き)根(ね)高(だか)に立ちさかゆとも
一もと柳

白波の手搖り振らばひひまもなき一もと柳妻なしにあはれ

五月雨もいつしか霽れて土用ともなれば日々に暑けくなりまさりしたへがたくおぼゆるものからなほ涼しきを求めてえがたきことのあらめやとおもひつづけてよめる

竹箒手にとり持ちて散り松葉あさなあさなに掃くがすずしさ

鋸のわたる椚の切株のわか木むら立ちたつがすずしさ

かぎろひのゆふつみ茄子(なすび)さくさくに菜刀もちて切るがすずしさ（菜刀は方言なり庖丁をいふ）

野老(ところづら)ませがおどろを刈りそけて足(あ)うらしみみに踏むがすずしさ

穴ごもりくろ行く螻蛄(けら)の夕さればころころころろになくがすずしさ

にはつとりかけのかひこに根芽(ねめ)つなぎはつなる瓜のなるが涼しさ

こも槌のかたみに包む皮剝げて竹の肌(はだへ)を見るがすずしさ

いたいたしき枝がうれに玉むすぶ青山椒(はじかみ)を嚙むがすがしさ

手握(たにぎり)の弓のたわめる皂莢(さいかち)のさゆらさゆらにゆるがすがしさ

末つみにつむや藜(あかざ)をとり茹でて手桶の水にさすがすがしさ（さすは方言にしてさらすの意なり）

佛頂山の歌

石きざむ佛の山は青菅のしげき茂峯(しげを)に雲たちわたる

八月四日、雨ふる、下妻にやどる

草枕旅に行かむと思へるに雨はもいつか止まむ吾がため

五日、あさの程くもり、五十日に及びて雨はれず

苧(を)だまきを栗の垂れ花刺(いが)むすび日はへぬれども止まぬ雨かも

午後にいたりて日を見る

おぼほしく降りける雨は青葙(うまくさ)の立秀(たちほ)の上に晴れにけるかも

八日、立秋

45

久方の雨やまなくに秋立つとみそ萩の花さき
にけるかも

十二日、雨、この日下づまに在り、友なるも
の、いたづける枕もとに、さまざまの話し
てあるほどに、房州の黒吉にありける弟
おもひもかけず来り合せたるにくさぐ
さのことをききて

烏賊釣に夜船漕ぐちふ安房の海はいまだ見ね
ども日にし見えくも

十四日、きぬ川のほとりを行く

桜の木は芽立つやがてに折らゆれどしげりは
しげし花もふさふさ

廿五日、ものへ行く、棚に垂れたる絲瓜のふとしきを見て

秋風は吹きもわたれかゆらゆらに絲瓜(へちま)の袋垂れそめにけり

青袋へちま垂れたりしかすがにそのあを袋つぎ目しらずも

夏引の手引の絲をくりたたね袋にこめてたれし絲瓜か

廿八日、芒の穗みえそむ

秋風はいまか吹くらし小林に刈らでの芒穗にいでそめつ

卅一日、成田へ行かむと夜印旛沼のほとりを過ぐ

ぬば玉の夜にしあれば伊丹庭の湖さやに見えねどはろばろに見ゆ

竪長の横狭の湖ゆ見出だせばおほにたな引き天の川見ゆ

いにはの湖水田稲村めぐれどもまさしに見えず夜のくらければ

九月一日、滑川より雙生丘をのぞむ

大船の楫取の稲田はるばるに見さくる丘の雙生しよしも

雙生丘にのぼる利根川の水その下を浸して行く形の瓢に似たるもの面白ければ

くすの木の木垂るしげ丘(を)は秋風に吹かれの瓢(ひさご)ころぶすが如し

秋風はいたくな吹きそ白波のい立ちくやさば瓢なからかむ

秋風の吹けどもこけずひた土のそこひの杭につなぐひさごか

なりひさご堅(たた)さに切りて伏せたれどその片ひさごありか知らなく

二日、利根川のほとりに人なたゞぬ、打ち渡す稲田おほかたは枯れはてたり、いかなればかと問へば雨ふりつゞきて水滿ちたたへたれども落すすべを知らず、日久しくしてかくの如しといふ

廿稲のみのりはならず枯れたるに水滿てるかも引くとはなしに

久方の天くだしぬる雨ゆゑに稲田もわかずひたりけるかも

まがなしく枯れし稲田をいつとかも刈りて收めむみのらぬものを

日のごとも水は引けども秋風のよろぼひ稻に吹くが寂しさ

三日、印旛沼のほとりを過ぐ

しすゐのや柏木村を行き見ればもく採る舟かつらに泛けるは（もくは方言なり藻をいふ）

味村のつらつららの小舟葦邊にか漕ぎかくりけむ見れども見えず

四日、蕨氏に導れて杉山を攀のぼるとて

睦岡の埴谷の山はいばらつら足深にわけて越ゆる杉山

とよみけるがいたくあやまりたり、このわたりの杉山ことごとく下草刈りそけこ見るに涼しげなり

睦岡の丘門杉山はした草の利鎌にふりて見るにさやけし

千葉の野を過ぐ

千葉の野を越えてしくれば蜀黍の高穗の上に海あらはれぬ

もろこしの穗の上に見ゆる千葉の海こぎ出し船はあさりすらしも

百枝垂る千葉の海に網おろし鯵かも捕らし船
さはにうく

悼正岡先生

九月十九日、正岡先生の訃いたる、この日
栗拾ひなどしてありければ

年のはに栗はひりひてささげむと思ひし心す
べもすべなさ

ささぐべき栗のここだも掻きあつめ吾はせし
かど人ぞいまさぬ

なにせむに今はひゝはむ秋風に枝のみか栗ひたに落つれど

二十日、根岸庵にいたる

うつそみにありける時にとりきけむ菅の小蓑は久しくありけり

二十三日、おくつきに詣でて

かくのごと樒(しきみ)の枝は手向くべくなりにし君は悲しきろかも

筒にもりてたむくる水はなき人のうまらにきこす水にかもあらむ

廿五日、初七日にあたりふたゝびおくつきにまうでぬ、寺のうら手より蜀黍のしげきがなかを歸る．

吾が心はたも悲しもともずりの黍(きび)の秋風やむ
時なしに

秋風のいゆりなびかす蜀黍(もろこし)の止(や)まず悲しも思
ひしもへば

もろこしの穂ぬれ吹き越す秋風の寂しき野邊
にまたかへり見む

秋風のわたる黍野を衣手のかへりし來れば寂
しくもあるか

十月九日、三七日にあたりぬ、はるかに思
なはせてよみはべりける

まうですと吾が行くみちにもえにける青菜は
いまかつむべからしも

いつしかも日はへにけるかまうで路のくまみ
にもえし菜はつむまでに

なぐるさの遠さかり居て思はぶは青菜つむ野
をまた行かむもの

青雲の棚引くなべに目[ま]かげさし振りさけ見れ
ば都はとほし

筑波山の歌

十一月十八日、筑波山に登りてよめる

狹衣の小筑波嶺ろのたをりには萱ぞ生ひたる
苫のふき萱

筑波嶺をいや珍らしみ刈れれどもまた生の萱
のまたも來て見む

筑波山を望みてをりをりによみける

おくて田の稲刈るころゆ夕されば筑波の山の
むらさきに見ゆ

夕さればむらさき匂ふ筑波嶺のしづくの田居(たゐ)
に雁鳴き渡る

蜀黍(もろこし)の穂ぬれに見ゆる筑波嶺ゆ棚引きわたる
秋の白雲

稲の穂のしつくの田居の夜空には筑波嶺越え
て天の川ながる

筑波嶺に降りおける雪は陽炎(かぎろひ)の夕さりくれば
むらさきに見ゆ

人々の許に

一

いにしへのますら武夫も妹に戀ひ泣きこそ泣きけれその名は捨てず

世の中は足りて飽き足らず丈夫の名を立つべくは貧しきに如かず

二

沖の浪あらし吹くとも蜑小舟おもふ浦には寄るといはずやも

葦邊行く船はなづます沖浪のあらみたかみと
檝(かぢ)とりこやす

三

明治三十五年の秋あらし凄まじく吹きすさびて大木あまた倒れたるいちさまざまの樹木に返り咲きせし頃筑波嶺のおもてに人を訪ねてあつきもてなしをうけて携へてよみてありける歌

いづへにか露はおひける棕櫚の葉に枇杷の花
散るあたりなるらし

苦(にが)きもの香にはあれど羹(あつもの)ににがくうまけき露
の羹よろし

くくたちの蕗の小苞(をはかま)ひた掩ひきのおもしろき
蕗の小苞

秋まけて花さく梨の二たびも我行けりせば韮(にら)
は伐りこそ

國見山

十月十六日常毛二州の境に峙つ國見山
に登りてよめる

茨城は狹(さ)野(の)にはあれど國見嶺に登りて見れば
稲田廣國

國尻のこの行き逢ひの眞秀處にぞ國見が嶺ろ
は聳え立ちける

明治三十六年

新年宴會

利鎌もて刈りゆふ注連の年のはにいやつぎ行
かむ今日の宴は

菩提樹

常陸國下妻に古刹あり光明寺といふ、門外に一株の菩提樹あり、傳へいふ宗祖親鸞の手植せし所と、蓋し稀に見る所の老木なり、院主余に徵するに菩提の歌を以てす、乃ち作れる歌七首

天竺の國にありといふ菩提樹ををつつに見れば佛おもほゆ

善き人のその掌にうけのまば甘くぞあらむ菩提樹の露

世の中をあらみこちたみ嘆く人にふりかかるらむ菩提樹の華

菩提樹のむくさく華の香を嗅げば頑固人もなごむべらなり

菩提樹の小枝が諸葉のさやさやに鳴るをしきかば罪も消ぬべし

ここにして見るが珍しき菩提樹の木根立ち古りぬ幾代へぬらむ

うつそみの人のためにと菩提樹をここに植ゑけむ人のたふとき

初雪

一月二十日、きのふより夜へかけて降りつづきたる雨のやみたるにつとめておき出でて見れば筑波の山には初雪のふりかかりたればよめる歌六首

おぼほしく曇れる空の雨やみて筑波の山に雪ふれり見ゆ

よもすがら雨の寒けくふりしかば嶺の上には雪ぞふりける

をのうへにはだらに降れる雪なればこゝのあたりはうべ降らずけり

筑波嶺の茅生の萱原さらさらにここには散らずふれる雪かも

二なみの山の峡間にふりしける雪がおもしろはだらなれども

筑波嶺にふりける雪は白駒の額毛に似たり消えずもあらぬか

筑波登山

二月五日筑波山に登る、ふりおける雪ふかかりければ足の疲れはなはだしくおぼえぬ、その夜のほどによみける歌

足曳の山をわたるに惱ましみい行かじものを山がおもしろ

作葉のははそのしばのしばしばも立ちは休らふ山の八十坂

葉のたぐひて行かむ人なしにひとり越ゆれば
なやましき坂
さやさやに利鎌さしふる樒木のなよなよしも
よ山路こゆれば
くさまくら旅ゆきなれし吾なれど山坂越せば
いたし足うらは
筑波嶺にこりたく樵のもゆるなす思ひかねつ
つ足はなやみぬ
肉むらの引かゆがごとも思ほえて脛のふくれ
のいたましき宵

桑の木の木ぬれをはかる青蟲のかがめて居ればいたき足かも

小衾のなごやが下にさぬらくのすがすがしもよ足疲ればれ

妹嫁ぐ

三月十四日、妹とし子あすは嫁がむといふに、夕より雨のいたくふりいでたれば

さきはひのよしとふ宵の春雨はあすさへ降れどよしといふ雨

春雨に梅が散りしく朝庭に別れむものかこの夜過ぎなば

宵すぐるほどに雨やみてまどかなる月いづあすはまさ目に思はれければ

しばしばも装ひ衣ぬぎかへむあすの夜寒くありこすなゆめ

なほ思ひつづけける

柞葉の母が目かれてあすさらばゆかむ少女をまもれ佐保神

夜をこめてあけの衣は裁ちぬひし少女が去なば寂しけむかも

桜の芽

四月十七日、雨ふる、うらの藪のなかへ入りて見るに桜の木の芽いやながに萌え出でたり、亡師のもとへとしどしにおくりけるものを、いまはそれもすべなくなりぬ

朝さらずつぐみなくなる我が藪の桜(たら)の木みれば萌えにけるかも

春雨の日まねくふれば桜(たら)の木の萌えてほうけぬ入りも見ぬとに

たらの木のもゆらくしるく我が藪の辛夷の花は散りすぎにけり

榿刈るわが竹藪のたらの木は伐らずぞおきしもえば折るべく

春雨に濡れつつつたらは折らめどもをりきと告げむ人のあらなく

葉つつみたらの木の芽はおくらまく心はいまは空しきろかも

めでぬべき人もあらぬに徒にもえぞ立ちぬるそのたらの芽を

折らゆればすなはち萌ゆる桜の芽のまたも逢ふべき人にあらなくに
春雨のしきふる藪のたらの木のいたくぞ念ふそのなき人を

つくし

むかし我がしばしば過ぎし大形の小松が下はつくしもえけり
つくつくしもえももえずも大形の小松が下に行きてかも見む

つくしつむ方も知らえず大形に行きてを見なむ昔見しかば

春雨

ほろほろと落葉こぼるるゆづり葉の赤き木ぬれに春雨ぞふる

春の夜の枕のともし消しもあへずうつらうつらにいねてきく雨

春雨の露おきむすぶ梅の木に日のさすほどのおもしろき朝

あふぎ見る眉毛にかかる春雨に傘(かさ)さしわたる
月人をとこ

海苔

品川のいり江をわたる春雨に海苔干す垣に梅
のちる見ゆ

寄鑄物師秀眞

小鼠は栗も乾鱓(ごまめ)も引くといへどさぬるふすま
も引くらむや否

うつばりのたはれ鼠が栲縄(たくなは)のひきて行くちふ
ひとりさぬれば

檻の實のひとりぬればに鼠だに引くとさはい
ふひとりはないね

嫁が君としかもよべども木枕をなめてさねな
む鼠ならめやも

いとこやの妹とさねてば嫁が君ひくといはじ
もの妹とさねてば

嫁が君よりてもこじを妹がかた鑄てもさねな
な冷(つめ)たかりとも

みかの釜に鼠おとしもおとさずも妹とさねて
ば引くといはなくに
小鼠の引くといふものぞ特牛(ことひうし)の角(つの)のふくれは
つつましみこそ

蟬

那須の野の萱原過ぎてたどりゆく山の檜(ひ)の木
に蟬のなくかも
豆(まめ)小豆(あづき)しげれる畑の桐の木にひぐらしなくも
あした涼しみ

まつかさ集　其一

梧桐の梢おもしろく見えたれば

青桐のむらなる葉のさやさやに照れるこよひの月の涼しさ

また庭のうちに榧の樹あり、過ぎしころは夜ごとに梟の鳴きつときけば

ふくろふの宵々なきし榧(かや)の樹のうつろもさやに照る月夜かも

おなじく庭のうちなる樟の木のきらき

らとかがやきたるを主の女の刀自のいと美しきものと稱ふれば我が刀自にかはりてよみける

秋の夜の月夜の照れば樟の木のしげき諸葉に黄金かがやく

一日小雨、庭上に梅の落葉せるを見てよめる歌四首

秋風のはつかに吹けばいちはやく梅の落葉はあさにけに散る

あさにけに落葉しせれば我が庭のすずろに寂し梅の木の秋

朝さらず立ち掃く庭に散りしける梅の落葉に
秋の雨ふる

我が庭の梅の落葉に降る雨のさむき夕にこほ
ろぎのなく

濱邊盛衛君は予が同窓の友なり、出でて商船學校に學び汽船兵庫丸の三等運轉士たり、本年六月十四日遠洋航海の途次同乘の船員數名と共に小笠原群島母島の測量に從事し颶風に遭ひて遂に悲慘の死を致す、八月三十日舊友知人相會して追悼の式を擧げ聊か其靈魂を弔ふ、予も亦席に列る、乃ち爲めに短歌八首を詠す、錄六首

ますらをは船乗せむと海界(うなざか)の母が島邊にゆき
てかへらず

小夜泣きに泣く兒はごくむ垂乳根の母が島邊
は悲しきろかも

ちちのみの父島見むと母島の荒き浪間にかづ
きけらしも

はごくもる母も居なくに母島のいたぶる浪に
臥(こや)せるやなぞ

鱶(ふか)の寄る母が島邊に往きしかば歸りこむ日の
限り知らなく

秋されば佛をまつるみそ萩のはなも咲かずや
荒海の島

西遊歌

七月二十五日、大阪桃山にあそぶ

ひた丘に桃の木しげる桃山はたかつの宮のそ
のあとどころ

二十六日、四天王寺の塔に上る

刻階を足讀み片讀みのぼり行く足うらのしも
ゆ風吹ききたる

押照るや難波の海ゆ吹きおくる風のすずしき
この塔の上

二十七日、泉布觀後庭

あふちの枝もうごかず著き日の庭にこぼるる
白萩のはな

あぶら蟬しきなく庭の青芝に散りこぼれたる
白萩のはな

二十八日、安倍野を過ぐ

畝なみに藍刈り干せる津の國の安倍野を行けば著しこの日は

和泉國に陵を拜がむと舳の松といふところを行くに、芒のまねまねに靡きたるを見てよめる

大ふねの舳の松の野の穗芒は陵のへになびきあへるかも

仁德天皇の山陵を拜す中の陵といふ

和泉は百舌鳥の耳原耳原のみささぎのうへにしげる杉むら

すこし隔たりたる南の陵といふを拜みまつるに、松の木の生ひしげりたれば

うなねつき額づきみればひた丘の木の下萱の
さやけくもあるか

おなじく北の陵へまかる途にて

向津井の稗は穂に出づ草まくら旅の日ごろの
いや著けきに

北の陵にて

物部の建つる楯井のみささぎにまつると作れ
その菽も稗も

舳の松にて

雨ないたくもちてなよせそ茅渟の海や淡路の
島に立てる白雲

住吉の松林を磯の方に打出でてよめる

住吉の磯こす波の夕なぎに鷺とびわたれむら
松がうれに

三十日西京なる東山のあたりを行くと
て清閑寺の陵にいたる道すがらよめる

さびしらに蟬鳴く山の小坂には松葉ぞ散れる
その青松葉

三十一日、比叡山の頂にのぼりて湖のあ
なたに田上山を望むに、折柄山の上なる
空に雲のむらむらとうかび居たれば

比叡の嶺ゆ振りさけみれば近江のや田上山(たなかみやま)は
雲に日かげる

息吹の山をいや遙にみて

天霧（あまぎら）ふ息吹（いぶき）の山は蒼雲のそぐへにあれどただ
に見つるかも

極めてのどかなる潮のうへに舟のあま
た泛びたるをみて

近江の海八十（やそ）の湊に泛（う）く船の移りも行かず漕
ぐとは思へど

丹波の山々かくれて夕立の過ぎたるに
辛崎のあたりくらくなりたれば

鞍馬嶺ゆ夕だつ雨の過ぎしかばいまか降るら
し滋賀の唐崎

八月一日、嵐山に遊ぶ、大悲閣途上

さやさやに水行くなべに山坂の竹の落葉を踏めば涼しも

二日、ひるすぐるほどに奈良につく、ありといふ鹿の見えざるに、訝しみて人にとひなどしつつ

春日野の茅原を若み森ふかくこもりにけらし鹿の見えこぬ

春日山しげきがもとを涼しみと鹿の臥すらむ行きてかも見む

嫩草山にのぼるに萩のやうなるものの

おびただしく生ひたるが、ささやかなる
白き花の咲きたるを、捨てがたくおもへ
ば麓なるあられ酒うる家の主にきくに、
草萩といふといへば

見れど飽かぬ嫩草山に夕霧のほのぼのにほふ
くさ萩の花

三日、大和國たふの峰にやどりて梟のな
くをききてよめる

ゆふ月の光り乏しみ樹のくれの倉梯山にふく
ろふのなく

四日、初瀬へ行くに艾うる家のならびた
れば

こもりくの初瀬のみちは芝なす著けくまさる
倚る木もなしに

三輪山へいたる途にて

味酒三輪のやしろに手向けせむ臭木の花は翳
してを行かな

三輪の檜原のあとゝいふを、山守にみち
びかれてよみける

櫛御玉大物主の知らしめす三輪の檜原は荒れ
にけるかも

耳なし山をのぞむ、木立のしげきに梔の
木のおほきといへば

耳成の山のくちなし樹がくりに咲く日の頃は
過ぎにけらしも

五日、橿原の宮に詣づ

葦はらや八百湧きのぼる滿潮の高知りいます
神の大宮

やしろの庭のかたほとりに、かたばかり
なる葦原あり、そこに水汲む井のありけ
れば

橿原の神の宮居の齋庭には葦ぞおひたる御井
の眞淸水

橿原の宮のはふりは葦分に御井は汲むらむ神
のまにまに

橘寺より飛鳥へ行くみちのかたへに逝回の丘といふにのぼりて

たびびとの逝回(ゆきき)の丘の小畠には煙草の花は咲きにけるかも

八日、大阪より伊勢へこえむ―木津川のほとりを過ぐ

やま桑の木津のはや瀬ののぼり舟綱手かけ曳く帆はあげたれど

伊勢路に入りてよめる

日をへつつ伊勢の宮路に粟の穂の垂れたる見れば秋にしあるらし

九日、外宮より内宮に詣づ、目にふるる物皆たふとく覺ゆるに白丁のほのめくな見てよめる

かしこきや神の白丁(よほろ)は眞さやけき御裳濯川に
水は汲ますも
白栲(しろたへ)のよぼろのおりて水は汲む御裳濯川に日
漱ぎけり
蘿(こけ)蒸せる杉の落葉のこぼれしを白丁はひりふ
宮の垣内に

この日、鳥羽の港より船に乗りて熊野へ志す

加布良古の三崎の小門を過ぎくれば志摩の浦
曲に浪立ち騒ぐ
麥崎のあられ松原そがひみにきの國山に船は
へむかふ
大和嶺に日が隱ろへば眞藍なす浪の穗ぬれに
文鰩魚の飛ぶ見ゆ
眞熊野のしづけき海に飛ぶ文鰩魚の尾鰭張り
飛び浪の穗に落つ
おもしろの文鰩魚かも檝まくらこれの船路の
思ひ出にせむ

十日、よべ一夜は船にねて、ひる近きに勝浦といふところへつく、沖の方より向ひの山に一條の白きが落ち懸れるを見る

三輪崎の輪崎をすぎて立ちむかふ那智の檜山の瀧の白木綿（しらゆふ）

那智山をわけて瀧の上にいたりみるに谷深くして、はろかに熊野の海をのぞむ

丹敷戸畔（にしきとべ）丹敷の浦はいさなとる船もうかばず浪のよる見ゆ

谷ふかみもろ木はあれど杉がうれを眞下に見れば畏きろかも

やどりの庭よりは谷を隔ててまのあた
りに瀧のみゆるに、月の冴えたる夜なり
ければふくるまでいも寝ずてよみける

眞熊野の熊野の浦ゆてる月のひかり滿ち渡る
那智の瀧山

みれど飽かぬ那智の瀧山ゆきめぐり月夜に見
たり惜しけくもあらず

眞熊野や那智の垂水の白木綿のいや白木綿と
月照り渡る

人みなの見まくの欲れる那智山の瀧見るがへ
に月にあへるかも

この見ゆる那智の山邊にいほるとも月の照る
夜は常にあらめやも

十一日、つとめて本宮へこえむと、大雲取峠といふをわたるにやがて暑さはげしくなりてたへがたければ、しばしば水をむすびて喉をうるほす

虎杖のおどろが下をゆく水の多藝津速瀬をむ
すびてのみつ

眞熊野の山のたむけの多藝津瀬に霑れ霑れさ
ける虎杖の花

さらに小雲取峠といふにかかる、木立稀なれば暑さいよいよきびしくして思ひ

のまゝにはえもすゝまず、汗おし拭ひおし拭ひてはやすらふ程に、羊歯のしげりたるを引きたぐりてみれば七尺八尺いながさなるを、珍らしく思ふまゝになりて持て行くとて

かゞなべて待つらむ母に眞熊野の羊歯の穂長を箸にきるから

十二日、熊野川へそゝぐきたやま川といふ川ののぼりに瀞八丁といふをみむと竹筒といふところより山越えて

竹筒(たけと)のや樛の木山の谷深み瀬の音はすれど目にもみらえず

十三日、舟にて熊野を下る

熊野川八十瀬を越えてくだりゆく船の筵(むしろ)にさねて涼しも

十四日、きのふ新宮より七里の松原を海に添ひて木の下までたどりける日くれて花の窟といふところのほとりにやどりてつとめておきいでて窟を拜む、遠くよりきたれる山の脚のにはかにここにたえたるさまにて、岩の峙ちたるに潮のよせきて穿ちけむと思はるる穴のところどころに見ゆ、沖は和ぎたれば磯うつ浪もゆるやかなるを、窟にひびくおとのとどろとどろと鳴るさま凄まじきばか

りなるに、おれたらんほどいこと思ひやらる、伊弉册尊をここにはふりまつりけるよしいふつたへて昔より蜑どもの花をささげてはいつきまつりけるところと聞きて

鯖(さば)釣りに沖こぐ蜑もかしこみと花たむけしゆ負(お)へるこの名か

眞くま野の浦曲にさける篋柳(ささやなぎ)われもたむけむ花の窟に

熊野より船にて志摩へかへると夜はふねに寝てあけがたに鳥羽の港につきてそこより伊勢の海を三河の伊良湖が崎

にいたる

三河の伊良胡が崎はあまが住む庭の眞砂に松
の葉ぞ散る

十六日、つとめて伊良胡が崎をめぐりて
よめる

いせの海をふきこす秋の初風は伊良胡が崎の
松の樹を吹く

しほさゐの伊良胡が崎の萱草なみのしぶきに
ぬれつつぞさく

十七日、駿河の磯邊をゆきくらして江尻
までたどり行かむとてよめる

清見潟三保のよけくを波ごしに見つつを行かむ日のくれぬとに

十八日、箱根の山をわたりてよめる

箱根路を汗もしとゞに越えくれば肌冷かに雲とびわたる

松かさ集　其二

西の都を見にまかりてまる山といふ所にいきけり、芋棒となむいふ家に入りて書簡したたむる程にあとよりきたる女どもの、盛り傾ぶきし齢にも有らねば、はでやかなるさまに

粧ひけるが、隣の間へいりたるを、暑き日の盛りとて隔ての葭戸は明け放ちたるままなりければ、京の女といふもの珍らしく思ひて見る程、怪しくも帯解きやり帷子なりけるが片へに脱ぎ捨ててゆもじばかりになりてぞ酒汲み始めける、はしたなき女どもの振舞かなと、興さめ果てて胸苦しくぞ覺えしや、只管によき衣の汗ばみて汚れなむことを恐れけるとかや、後になりてぞ聞き侍りし

からたちの荊棘(いばら)がもとにぬぎ掛くる蛇の衣(ころも)に
ありといはなくに

篠のめをさわたる蛇の衣(きぬ)ならばぬぎて捨てむ
にまたも着めやも

比叡の山のいただきなる四明が嶽にのぼりて雨にあひ、草の茂りたる中を衣手しとどに濡れて八瀬の里へ下らむと、西塔堂のほとりに出で、杉深くたちこめたる谷をうしろに白木槿のやうなる花のさきたる樹あり、沙羅雙樹といふといふ。耳には馴れたれども目にはいまはじめてなり。まして花の盛なれば珍らしきこと極りなし、暑さを冒してきたりけるしるしもこそありけれとてよみける

比叡の嶺を雨過ぎしかばうるほへる杉生がもとの沙羅雙樹の花

杉の樹のしみたつ比叡のたをり路に白くさきたる沙羅雙樹の花

比叡の嶺にはじめて見たる沙羅の花木槿に似
たる沙羅雙樹の花

暑き日を萱別けなづみ比叡の嶺にこしくもし
るく沙羅の花見つ

倭には山はあれどもみほとけの沙羅の花さく
比叡山吾れは

八月四日、法隆寺を見に行く、田のほとり
に、あらたに梨をうゑたるを見てよめる

あまたたび來むと我はもふ斑鳩の苗なる梨の
なりもならずも

はじめの月見の日なりけるが、いふまけて姫の朝へ芋掘りに行きけるが、その家の下部なるもの駒引き出して驅けめぐりける間に、いたくもあれ出でて止むべくもあらずなりて、思ひもかけず主の頭を蹄にかけければ、肉やぶれ骨摧けてやがていく程もなくて死にけり、人々悲しむこと限りなく、しばらくありて後そこへ幣たてきと、ありけることどもつたへ云ふな聞きてよめる

世の中にしれたる人の駒たぐと過ちせしより悔いてかへらず

垂乳根の母をゆるして芋掘りにかかからむと知らば行かざめや行けや

あら駒の蹄のふらくと知らませばやらめや人の母を思はず

垂乳根の母が子苧を皿にもり見むと思ひし月にやもあらぬ

おもしろとめづる月夜を垂乳根の母をいたみて泣くか長夜を

秋の夜のなが夜のくだち眞痛みに泣きけむ母をもりがてにけむ

あやまちを再びそこにあらせじと幣はもおくか駒の足(あ)の趾(と)に

雑詠十六首

しろたへの衣手さむき秋さめに庭の木犀香にきこえ来も

秋の田のわせ刈るあとの稲葉にわびしく残るおもだかの花

時待ちて穂にたちそめし晩稲田の花さくなべにわさ田刈り干す

秋の日の日和よろこび打つ畑のくまみに咲ける唐藍の花

我門の茶の木に這へる野老(ところ)蔓(づら)秋かたまけてい
ろづきにけり

さらさらに梢散りくる垣内にはうども茗荷も
いろづきにけり

なぐはしき嫁菜の花はみちのへの莢がなかに
よろぼひにさく

畝なみに作れる菊はおしなべて下葉枯れれど
いまさかりなり

小春日の庭に竹ゆひ稲かけて見えずなりたる
山茶花の花

鋏刀持つ庭つくり人きりそけて乏しくさける
山茶花の花

こぼれ蘂こぼれし庭の朝霜にはらはらに散れる
山茶花の花

つゆしもの末枯草の淺茅生にまじりてさける
紅蓼のはな

冷やけく茶の木の花に晴れ渡る空のそぐひに
見ゆる秋山

馬塞垣に縄もてくくる山吹のもみづる見れば
春日おもほゆ

筑波嶺は晴れわたり見ゆ丘の邊の唐人草の枯れたつがうへに

鬼怒川を朝越えくれば桑の葉に降りおける霜の露にしたたる

松かさ集　其三

なになすることもなくてありける程鎌もて門の四つ目垣のもとに草とりけることありけり。近きわたりの子供二人垣のもとにいよりて物をいはずしてありけり。我れこの鎌もて汝等が頭斬りてむ

と思ふはいかにといへば、大きなるが八つばかりになりけるが、訝かしげなる面貌にて香といふ、我れ汝らが頭きらむといこはふきかうべにして素の形につけえさをむと思ふにこそといへば、いよいよ訝しみ駭けるさまにて命死なむことの恐ろしといひて垣のもととほぞきて唯香とのみいひけり小さなりけるは四つばかりになりけるが、そは飯粒もこつくるにやとこれもいたくおどろけるさまにてひそやかにいひいでけり腹うち抱へられて可笑しき限りなかりき罪ある戯れなりかしメンチといふものた琉ぶもて常に飯粒もこつけ合せけるよし母なるもののききて笑ひつつ語りけり

利鎌もて斷つといへどももとほるや蚯蚓の如
き涙垂るる子等
みみずみみず頭もなきとをもなきと蕗の葉蔭
を二わかれ行く

秀眞子ひとり居の煩しきをかこつこと三とせばかりになりけるが、このごろうら若き女のほの見ゆることあるよしいづこともなく聞え侍れば、彼れ此れとひたゞせども辨へず。その眞なりや否やそは我がかかつらふところに非ず。我は歌をつくりてこれを秀眞がもとにおくる。秀眞たるもの果して腹立つべきか、又はうち笑ひてやむべきか、只これ一時の戯れに過ぎざるのみ。歌にいはく

萬葉の大嘘鳥をそろをそろ秀眞がやどに妻はあらなくに

ひとりすむ典鑄司あはれみ思へれば妻覓ぎけるか我が知らぬとに

商人の繭買ひ袋かかぶらせ棚に置かぬに妻かくしあへや

鷸の嘴隱すとにあらじ妻覓ぐと告げぬは蓋し忘れたりこそ

唐臼の底ひにつくる松の樹の妻を待たせて外にあるなゆめ

馬乗りに鞍にもたへぬ桃尻の尻すわらずば妻
泣くらむぞ

粘土を捏ねのすさびにかがる手を見せて泣か
すなそのはし妻を

朝なさな食稻とぐ手もたゆきとふはし妻子ら
を見せずとかいはむ

尾張熱田神宮寶物之内七種

眞熊野の熊野の山におふる樹の姥女木の胴の
うづの疊太鼓

天飛ぶや鶏の尾といひ世の人のさばの尾とも

いふ朱塗の琴
瀬戸の村に陶物焼くと眞埴とりはじめて焼き
し藤四郎が瓶
瀬戸物のはじめに焼きしうすいろの鈍青色の
古小瓶六つ
春の野の小野の朝臣がみこともち仕へまつり
し春敲門の額
熱田のべろべろ祭べろべろに振らがせりきと
いふ光鼓
大倭國つたからにかずまへる納蘇利崑崙八仙

の面

尾張のや國造の宮簀媛けせりきといふ玉裳
御襲

大阪四天王寺什物之内四種

廐戸の皇子の命の躬らつゞれさゝせる糞掃衣
これ

物部の連守屋を攻めきとふ鏑矢みればかなし
きろかも

御佛のまもりのふくろ七袋太子がもたししそ
の七袋

廐戸の皇子がかかせる十あまり七條(ななおきて)憲法(のり)見るがたふとさ

明治三十六年七月我西遊を企つるや、格堂に約するに途必ず備前に至らむことを以てす、しかも足遂に大阪以西を踏むに及ばず、頗る遺憾となす、九月格堂遂に書を寄せて我が起居を問ふ、應へず、十一月下旬具さに怠慢の罪を謝して近況を報す、乃ち兒島の地圖を披きて作れるこゝろの短歌五首之をその末尾に附す、歌にいはく

おほ地(つち)の形の刷り巻ひらきみれば吉備の兒島は見えの宜しも

なぐはしき苧環草（をだまきくさ）のこぼれ葉ににるかもまこ
と吉備の兒島は

眞金吹く吉備の兒島は垂乳根の母が飼ふ兒の
はひいでし如

燒鎌の利根のえじりと瀬戸の海と隔てもなく
ばしき通はむに

茅渟の海や淡路の見ゆる津の國へ行きける我
や行くべかりしを

明治三十七年

榛の木の花

つくばねに雪積むみれば榛(はり)の木の梢寒けし花
は咲けども

霜解のみちのはりの木枝ごとに花さけり見ゆ
古殻(ふるから)ながら

はりの木の花さく頃のあたたかに白雲うかぶ
空のそぐへに

田雀の群れ飛ぶなべに榛の木の立てるも淋し
花は咲けども

焚火たきすしたるなせどゆらゆらに揺りおも
しろき榛の木の花

はりの木の皮もて作る染汁に浸てきと見ゆる
榛の木の花

榛の木の花咲く頃を野らの木に鵙の速贄(はやにえ)はや
かかり見ゆ

はりの木の花さきしかば土ごもり蛙は啼くも
あたたかき日は

稲莖の小莖がもとに目掘する春まださむし榛
の木の花

稻ぐきのもとなどに小さなる穴のあるを掘り返して見れば必ず鮒の潛み居るを人々探り出でてはあさるなり、これは冬の程よりすることなるが日掘とはいふなり

春季雜詠

淡雪の檜の林に散りくれば松雀(まつめ)がこゑは寒し

この日は

筑波嶺に雪は降れども枯菊の刈らず殘れるしたもえに出づ

淺茅生の茅生の朝霜おきゆるみ蓬はもえぬ茅生の淺茅に

枝ごとに三また成せる三椏のつぼみをみれば蜂の巣の如

春雨のふりの催ひに淺みどり染めいでし桑の葉解き放つ

アイヌ

アイヌが日常の器具などを陳列せるを見てよめる歌三首

アイヌ等がアッシの衣は麻の如見ゆ　うべしこそ樹の皮裂きて布は織るちふ

アイヌ等がアッシの衣冬さらば綿かも入るる蒲(がま)のさ穂かも

アイヌ等は皮の衣きて冬獵に行く　鮭の皮を袋にむきし沓はきながら

花崗石

花崗石といふものは譬へば石のなかの丈夫なり、筑波につゞく山々はなべてこの石もて成る

天の御影地の御影と天地の神のつくりし石の名なるべし
筑波嶺につゞく長山みなどか山天の御影になりのよろしも

雜詠十六首

足曳の谷(やつ)田のくろの揚げ土にほろほろ落つる
楢の木の花
鋸の齒なす諸葉の眞なかゆもつらぬきたてる
たんぽぽの花
はるの田を耕し人のゆきかひに泥にまみれし
鼠麹草(ははこぐさ)の花
うつばりの鼠の耳に似たる葉のたぐひ宜しき
その耳菜草

あら鋤田の畔の杉菜におひ交り黄色に咲ける
つる苦菜(にがな)の花

鍋につく炭掻きもちてここと塗りたれ戯れの
そら豆の花

春雨のあらへど去らずそら豆のうらわか莢の
尻につくもの

筑波嶺のたをりの路のくさ群に白く咲きたる
一りんさうの花

藪陰のおどろがさえにはひまとひ蕗の葉に散
る忍豆の花

きその宵雨過ぎしかば棕櫚の葉に散りてたま
れる棕櫚の樹の花

よひに掃きてあしたさやけき庭の面にこぼれ
てしるき錦木の花

かはづなく水田のさきの樹群にしししらしら見
ゆる莢蒾の花

袷きる鬼怒の川邊をゆきしかばい引き持てこ
しみやこぐさの花

いちじろく穂に抜く麥にまつはりてありなし
に咲く猪殃々の花

著き日の照る日のころとすなはちにかさ指し
開く人參の花

筑波嶺のみちの邂逅に山人ゆ聞きて知りたる
やまぶきさうの花

折にふれて

菜の花は咲きのうらべになりしかば莢の膨れ
を鶸の來て喰ひ

かぶら菜の莢喫む鶸の飛びたちに黄色のつば
さあらはれのよき

夏季雜詠

其一

さみだれの降りもふらずも天霧らひ月夜少な
き夏蕎麥の花

なつそばのはなに白める五月雨の曇り月夜に
ふくろふの啼く

干竿にあらひかけほす白妙のころものすその
たち葵の花

あさ霧の庭をすゞしみ落葉せる樒がもともたち掃きにけり

にはとりの足の淺舟さやらひにぬなはの花の隱(こも)りてをうく

やまべといふうなの肉も骨も一つにやはらかなるは五月雨のふりいづるまでのことなり

鬼怒川の堤におふる水蠟樹(いぼたのき)はなにさきけりやまべとる頃

やまべは網してとり、鰣(はら)は絲垂れてとる

忍冬の花さきひさに鬼怒川にぼら釣る人の泛けそめし見ゆ

卽事

鬼怒川の高瀨のぼり帆ふくかぜは椁の花を搖らがして吹く

其二

七月十一日といふより十日が程は全くくふ物斷ちて水ばかり飮みて打過しけり、幼き時よりの胃のわづらひを癒さむとての企なり。素よりいえなむ日までと思ひ立ちたるなりければ、いつを畢りと

豫れて定むべくもあらずと

葉がくりになる南瓜のおぼろには門にみえぬ
ごとおくが知らずも

辰巳のかぜふきて雨のふりつゞきければ鬼怒川いたくまさり濁れる大豆の畑にも越えたりといふをききて

よごれたるおどろがなかに鴨跖草(つゆくさ)の花かもさ
かむ水ひきていなば
鴨跖草の花のさくらむ鬼怒川の水のあと見に
いつかまからむ

こころ計りは憔なれども、脚に力なければ、頓にたたむとすれば目くるめくこともありおほかたは打ち臥す。藪の中にさきたりけるとて百合の花をもて來てくれけれれば

さゆりばな我にみせむと野老蔓からみしままに折りてもち來し
白埴の瓶によそひて活けまくはみじかく折りし山百合の花

いたく欲しとにはあられど人の物くふをみればうまげなるも片腹いたきおもひするに、まだきにやまべの串をもてき

て呉れたるを

鬼怒川のやまべ焼串(やきぐし)うまけれどこゝろなの人
やけふ持ちて來し

鬼怒川の夏潤水のぬるき瀬にやまべとるらむ
見にも行かめど

暑さはけしければいづこも明け放ちて
やすらふ、夏蕎麥の幹うつとて下部の庭
にたちて振まふなうちながめつゝ

柄臼(からうす)を横さにたてゝうつ蕎麥のこぼれて飛ぶ
を見つゝおもしろ

たちこちに麥うつ音頻りにきこゆるに

となりやに麥はうてども藪こえて埃（ほこり）もこねば
おもしろに聞く

連枷（からさを）のとどろとどろにほこり立て麥うつ庭の
日ぐるまの花

日のうちは暑さに疲れたおぼゆれども
くれ近くなればいささか出でありくこ
とあり

たまたまにたち出でてみれば花ながら胡瓜の
しりへゆがまひて居り

眞日の照り日の照るなべにさぶしらに胡瓜の
黄葉おちにけるかも

はや上田にもいりたるに、群下言もい
まはやめよと切なるすすめに止むなく
して二十一日の夜はじめて物くふ、二日
ばかりにて車に乗りていでありく

いくばくも木だへなくに葉がくりに花なりし
薇の莢になりつつ

車の上にても暑さはげしきに、つくばの
山にはノタリといふ雲のかかりたるを
見てちかく雨のふるならむと、少し腹に
力もつきたることなれば身も心もいさ
ましく

筑波嶺のノタリはまこと雨ふらばもろこし黍
の葉も裂くと降れ

其三

明治三十六年八月十日、熊野に入り那智にやどる、庭に彳めば谷を隔てて名に負ふ瀧のかかれるも見ゆるに、かうべをめぐらせば熊野の浦はるばるとして限りを知らず、なりしも月の冴えたる夜なりければ涼しさ肌にしみ透るやうに覺えて心地いふべくもあらざりき。ことしまた暑さに向ひて只管この山のすずみを偲びてその夜のこころになりてよみける歌十首

山桑の木ぬれにみゆる眞熊野の海かぎろひて

月さしいでぬ

ぬばたまの夜の樹群のしげきうへにさゐさゐ
落つる那智の白瀧

ここにしてまともにかかる白瀧のすがしきよ
ひの那智山としも

照る月を山かもさふる白瀧の深谷のたむれい
まだ見わかね

那智山は山のおもしろいもの葉に月照る庭ゆ
瀧見すらくも

なち山の白瀧みむとこし我にさやにあらむと
月は照るらし

眞むかひに月さす那智の白瀧は谷はへだてど
さむけくし覺ゆ

あたらしき那智の月かも人と來(こ)ばみての後に
もかたらはむもの

那智山の瀧のをのへに飽かず見むこよひの月
夜明けぬべきかも

やまとにはいひ次ぐ那智の瀧山にいくそ人ぞ
も月にあひける

憶友歌

我が友瀧口玲泉は水戸の人にして早稲田出身の文士なり、軍に從ひて近衛に屬し、遼陽攻陷の際八月二十六日、大西溝の激戰に、右腕に銃創を蒙り濱寺山定立病院に收容せられぬ、予頃日水戸に遊びその家人に就きて具に狀況を悉すをえたり、玲泉は予が交友中尤も快活なるもの。然も肉落ち眼窩凹めるの狀を想見すればば哀憐の念禁ぜず、予は渠が創痍の速に癒えて後送せらるゝ日を待つや切なり、

乃ち之に一書を贈り、末尾に短歌十五首を附す。素渠が苦悶を慰めむと欲せしに過ぎず、語句の斡旋の如きは必ずしも意を用ゐざるなり

眞痛みにいたむ腕をいだかひて臥すかあはれ
諸越の野に

ますらをや痛手すべなみ黍の幹を敷寝の床も
去りがてにあらむ

もろこしは霜の降りきと聞きしかば痛手の惱
みまして偲ばゆ

籠り居る黍の小床にこほろぎのよすがら鳴かばいかにかも聞く

をいこやも務めつくせり垂乳根の母ます國へはや歸るべし

活けるもの死にするいくさ然にあるをいきて歸るに何か恨きむ

垂乳根の母がます國もとつ國うまし八洲はまさきくて見よ

那珂川に網(あみ)曳く人の日も離(か)れず鮭を待つごと君待つ我は

歸りくと早も來ぬかもうましらに秋の茄子は
いまだみのれり

秋はいまは馬は肥ゆとふふるさとの縣の芋も
肥えにたらずや

我がさとの秋告げやらむ女郎花下葉はかれぬ
花もしをれぬ

ありつつも見せまく欲しき蕎麥の花萎まばつ
ぎてをしね刈る見む

やすらかに胡麻の殼うつ鄙人に交りて居れば
君をこそおもへ

待つ久に遇ふべくあるは青菜引く冬にかあら
むいまかあふべき

かへらはば我鄕訪ひこ見にまかれ足がまたけ
ば手は萎えぬとも（九月上旬作）

雲の峰

おしなべて豆は曳く野に雲の峰あなたにも立
てばこなたにも見ゆ

雲の峰ほのかに立ちて騰波の湖の薺菜の花に
波もさやらず

雑歌

このごろの朝掃く庭に花に咲く八つ手の苞(はかま)落
ちにけるかも

朝ぎらふ霞が浦のわかさぎはいまか肥ゆらむ
秋かたまけて

鮭網を引き干す利根の川岸にさける紅蓼葉は
紅葉せり

秋の田の晩稲刈るべくなりしかば狼把草(たうこぎ)の花
過ぎにけるかも

多摩川の紅葉を見つつ行きしかば市の瀬村は
散りて久しも

麦まくと畑打つ人の曳きこぎてたばにつかね
し茄子古幹

秋冬雑咏

秋の野に豆曳くあとにひきのこる莠がなかの
こほろぎの聲

稲幹に束ねて掛けし胡麻のから打つべくなり
ぬ茶の木さく頃

秋雨の庭はさびしも樫の實も落ちて泡だつそのにはたづみ

こほろぎのころろ鳴くなべ淺茅生の疊の葉はもみぢしにけり

桐の木の枝伐りしかばそのえだに折り敷かれたる白菊の花

朝なあさな來鳴く小雀は松の子をはむとにかあらし松葉たちぐく

掛けなめし稻のつかねを取り去れば藁のみだれに淋し茶の木は

芋の葉の霜にしをれしかたへには咲きてとも
しき黄菊一うね

獨活の葉は秋の霜ふり落ちしかば目白は來れ
ど枝のさびしも

むさし野の大根の青葉まさやかに秩父秋山み
えのよろしも

はらはらに黄葉散りしき眞北むく公孫樹の梢
あらはれにけり

秋の田に水はたまれりしかれども稻刈る跡に
杉菜生ひたり

此日ごろ庭も掃かねば杉の葉に散りかさなれる山茶花の花

鴨跖草（つゆくさ）のすがれの花に晴るる日の空のさやけく山も眞近し

もちの木のしげきがもとに植ゑなべていまだ苗なる山茶花の花

葉鶏頭（かまつか）は種にとるべくさびたれど猶しうつくし秋かたまけて

さびしらに枝のことごと葉は落ちし李（すもも）がしたの石蕗（つはぶき）の花

秋の日の蕎麦を刈る日の暖に蛙が鳴きてまた
なき止みぬ

篠のめに蒿雀が鳴けば罠かけて籾まき待ちし
昔おもほゆ

鵲豆は庭のかきねに花にさき莢になりつつ秋
行かむとす

うらさぶる櫟にそそぐ秋雨に枯れがれ立てる
女郎花あはれ

麦をまく日和よろしみ野を行けば秋の雲雀の
たまたまになく

いろづける眞萩が下葉こぼれつつ淋しき庭の
白芙蓉の花

庭にある芙蓉の枝にむすびたる莢みな裂けて
秋の霜ふりぬ

いちじろく色づく柚子の梢には藁投げかけぬ
霜防ぐならし

辣韮のさびしき花に霜ふりてくれ行く秋のこ
ほろぎのこゑ

鬼怒川の蓼かれがれのみぎはには枸杞の實赤
く冬さりにけり

小春日の鍋の炭掻き洗ひ干す籬をめぐりて咲く黃菊の花

朴の木の葉はみな落ちて蕃への梨の汙ふく冬は來にけり

鬼怒川のほとりを行く

秋の空ほのかに燒くるたそがれに穗芒白し闇くしなれども

淺間の雲

明治三十年七月、予上毛草津の溫泉に浴しき、地は四面めぐらすに重疊たる山嶽

を以てし、風物の一も眼を慰むるに足るものあることなし。滯留洵に十一週日時に或は野花を探りて僅に無聊を銷するに過ぎず。その間一日淺間の山嶺に雲の峰の上騰するを見て始めて天地の壯大なるを感じたりき。いま乃ちこれを取りて短歌七首を作る。(十月五日作)

芒野ゆふりさけ見れば淺間嶺に沒日(いりひ)に燒けて
雲たち出でぬ

とことはに燃ゆる火の山淺間山天(あめ)のはるかに
立てる雲かも

たたなはる山の眞洞に思はぬに雲の八つ峰を
けふ見つるかも

まなかひの狹國なれど怪しくも遙けきかもよ
雲の八つ峰は

淺間嶺にたちのぼる雲は天地に輝る日の宮の
天の眞柱

淺間嶺は雲のたちしかば常の日は天に見しか
ど低山に見ゆ

眞柱と聳えし雲は燃ゆる火のけだしか消ちし
行方知らずも

明治三十八年

霜

綿の木の畝間(うねま)にまきし蠶豆(そらまめ)の三葉(みは)四葉(よは)ひらき
霜おきそめぬ

かぶら菜に霜を防(ふせ)ぐと搔きつめし栗の落葉は
いがながら敷く

此日ごろ霜のいたけば雨のごと公孫樹(いてふ)の黄葉
散りやまずけり

藁かけし籬(まがき)がもとをあたたかみ霜はふれども
耳菜おひたり

あさ毎におく霜ふかみ杉の葉の落ちて溜(たま)れど
掃かぬ此ごろ

冬の田の霜のふれれば榛の木の蕾のうれに露
垂れにけり

いつしかも水菜はのびて霜除(しもよけ)に立てたる竹の
葉は落ちにけり

鬼怒川の冬のつつみに蒲公英(たんぽぽ)の霜にさやらひ
くきたたず咲く

このあしたおく霜しろき桑はたの蓬(よもぎ)がなかに
あさる鳥なに

をちかたの林もおほに冬の田に霞わたれり霜
いたくふりて

春季雜詠

杉の葉の垂葉のうれに莟(つほみ)つく春まださむみ雪
の散りくも

棕櫚の葉に降りける雪は積みおける眞木(まき)のう
へなる雪にしづれぬ

木の葉掻く木の葉返しの來てあさる竹の林に
梅散りしきぬ

梅の木の古枝にとまる村雀羽がきも掻かずふ
くだみて居り

小垣外のわか木の栗の枝につく枯葉は落ちず
梅の花散りぬ

根をとると鴨兒芹の古葉掻き掘れば柿の木に
居て鶯の啼く

藪の蔓枯れてかかれる杉垣に枝さし掩ひ梅の
はな白し

鬼怒川の篠の刈跡にやはらかき蓬はつむも箍葉搔きよせ

淡雪のあまた降りしかば枇杷の葉の枯れてゐり見ゆ木瓜のさく頃

槲木の枯葉ながらに立つ庭に繩もてゆひし木瓜あかからみぬ

枸橘のまがきがもとの胡椒の木花ちりこぼれ春の雨ふる

春かぜの杉むらゆすりさわたれば雫するごと杉の花落つ

桑の木の藁まだ解かず田のくろにふとしく咲
ける蠶豆の花

鬼怒川のつつみの水臘樹もえいでて簇々さけ
り黄花の薺

桑の木のうね間うね間にさきつづく薺に交る
黄花の薺

さながらに青皿なべし蕗の葉に李は散りぬ夜
の雨ふり

山椒の芽をたづね入る竹村にしたごもりさく
木苺の花

樫の木の木ぬれ淋しく散るなべに庭の辛夷も
過ぎにけるかも

木瓜の木のくれなゐうすく茂れれば雨は日毎
にふりつづきけり

我が庭の黐の落葉に散り交るくわりんの花に
雨しげくなりぬ

房州行

五月廿二日家を立つ、宿雨全く霽れて空爽
かなるにミンミンミン蟬のやうなる聲頻りに

林中に聞ゆ、其聲必ず松の木に在るをもて
人は松に居る毛蟲の鳴くなりといふ

うららかに梢のわか葉もおひまじる松の林に
松蟬の鳴く
青芒しげれるうへに若葉洩る日のほがらかに
松蟬の鳴く
蜿豆の花さくみちのしづけきに松蟬遠く松の
樹に鳴く
松蟬の松の梢にとよもして袷ぬぐべき日もち
かづきぬ

二十三日、外房航路船中

安房の國や長き外浦の山なみに黄ばめるものは麥にしあるらし

二十四日、清澄の八瀬尾の谷に炭燒を見に行く

清澄の山路をくれば羊齒交り胡蝶花の花さく杉の茂生に

樟の木の落葉を踏みて下りゆく谷にもしげく胡蝶花の花さく

二十五日、清澄に來りてより、毎夕必す細

く長く耳にしみて鳴く聲あり、人に聞くに蚯蚓なりといふ、世にいふ蚯蚓にもあらず、蚯蚓の鳴かぬは固よりなれど、唯之た蚯蚓の聲なりとして、打ち興ぜむに何の妨げかあらむと

清澄の胡蝶花の花さく草むらに夕さりごとに
鳴く聲や何

虎杖(いたどり)のおどろがしたに探れども聲なきやまず
土ごもれかも

山桑をもとむる人の谷を出でかへるゆふべに
鳴く蚯蚓かも

胡蝶花の根に籠る蚯蚓よ夜も日もあらじけむ
もの夜ぞしき鳴く

二十八日、淸澄の谷に金襖子を採りてよ
める歌八首のうち

萱わくるみちはあれども淺川と水踏み行けば
かじか鳴く聲

黃皀莢の花さく谷の淺川にかじかのこゑは相
喚びて鳴く

鮠の子の走る瀨淸み水そこにひそむかじかの
明かに見ゆ

我が手して獲つるかじかを珍らしみ包みて行くと蕗の葉をとる

かじか鳴く谷の茂りにおもしろく黄色つらなる猿かけの花

さるかけのむれさく花はかじか鳴くさやけき谷にふさはしき花

二十九日

蒼海原雲湧きのぼりひた迫めに清澄山に迫めきたる見ゆ

八瀬尾の谷に日ごと炭燒く人をおとづ

れてよみし歌のうち一首

ことと足りて住めばともしも作らねど山に薯蕷掘り谷に蕗採る

三十日、清澄山を下りて小湊へ志す、天津の町より道連になりたる若き女は漁夫の妻なりといふ、手には青笹もて鰓をつらぬきたる魚を提げたる足の運び忙しげなり、十里ばかり北の濱より濱荻といふ所にかしづきて既に四とせになりたれど子もなければわびしき月日をおくるに、夫は嚢に補充兵として横須賀に召集せられむとす、されば今はせんすべもなければ其歸らむまでは江戸の舊主

のもとをたづねて身をつゝしみ居らむと思へど、二人が胸には餘りたれば故郷なる父母に咨らむとて行くなり、といふ、其言惻々として人を動かす、東京といはずして江戸といふ、何ぞ其朴訥なるや、朴訥なるものは世情を知らず、世情を知らざれば則ち悲しむこと多きなり、乃ち彼が心に代りて作れる歌十首のうち

松魚(かつを)釣(つり)あるみにやりて嘆かぬをいくさといへば心いたしも

清澄のかくるる沖に嵐吹きかへらぬ海人(あま)もありとは思へど

我が背子と夜床に泣けば思ふことかたみいひ
えず胸には滿つれど

小湊誕生寺の傍より舟を傭ひて鯛の住
むといふ海を見に行く

妙(たへ)の浦ここだも鯛のよる海と鵜の立つ島をさ
してぞ漕(こ)ぎ來し

海人の子の舷(ふなばた)たたき餌をやれば鰭振る鯛のき
ららかに見ゆ

磯洄のよろしき口にも鯛のよる貽貝(いがひ)が島は波
うちしぶく

磯傳ひに南の方へ志して行く、曝日二首

濱荻の網干す磯ゆとほく見るあらはれ松ばら人麥を打つ

濱荻の磯過ぎくればこ麥づくり鎌には刈らず根こじ手に曳く

和田附近

あたゝかき安房の外浦は麥刈ると枇杷ちいろづくなべて早けむ

卅一日朝まだきに七浦のやどりをたつ

人參の花さく濱の七浦をまだきに來ればそぼふる小雨

すひかづら垣根にさびし七浦のまだきの雨に
獨り來ぬれば

野島が崎に至る恐ろしき巨巖のすき間すき間に只さらさらと波のさし引くのみ干潮なれば常はえ至るまじき巖のもとをも窺ふ。

おもひこし濤は見なくに異草(ことくさ)を野島が崎の巖
の間に摘む

白濱の野島が崎の松かげに芝生にまじるみや
こぐさの花

巨巖のうへ偃ふ松のしづけきに雀が來鳴き雨
霽れむとす

濱萬年青しげれる磯をさし出の野島が崎は見
えのよろしも

根本濱遠望

伊豆の海や見ゆる新島三宅島大島嶺は雲居棚
引く

布良

布良の濱から布刈る女が水を出で妻木何焚く
菜種殼焚く

館山灣

うきくさの菱(ひし)の白花白花とささ波立てり海平らかに

六月一日、館山灣の北を扼する大房(だいぶ)の岬に遊び

かさご釣る磯もしづけみ頰白の鳴くが寂しきこれの遠崎

おもしろき岬の松は繩つなぎ事負(ことひ)の牛に草飼ふところ

二日、孝子塚を見る、孝子は名を作家主といふ、父母の沒後その像を刻みて、之に仕

ふること生けるが如く、終身渝ることなし、朝廷嘉賞して租税を免ず、事は仁明天皇の承和年間に係る、爾來一千年此郷の土人碑を國分寺に建てゝ之を頌す、近年菅野の地に建碑の擧あり、刻むに菊池容齋描く所の伴家主の像を以てせり

茅花さく川のつゝみに繩繋ぐ牛飼人に聞きて來にけり

いにしへも今も同じく安房人の誇りにすべき伴家主(あたへなし)これ

伴家主おやを懷ひし眞心は世の人おもふ盡くる時なく

うらなごむ入江の磯を打ち出でて網にまつる
と鯛も釣りけむ
父母のよはひも過ぎて白髪の肩につくまで戀
ひにけらしも
麥つくる安房のかや野の松蔭に鼠麴草の花は
なつかしみ見つ

三日、汐見途上

濱苦菜ひたさく磯を過ぎくればかち布刈り積
み藁きせておく

四日、那古の濱より汽船に乘る、知り人の

予等四人かひがひしく港まで見送りす、一人は人に負はれ、一人はまだ學齡にも滿たざれど歩みて來る、此の子畫を描くを好みて常に左の手のみを用ふ、心うれしきままに後に母なる人のもとへよせておくりし歌のうち

青梅と雀と描きしひだり手に書持つらむかまた逢ふ時は

負はれ來し那古の砂濱ひとり來て濱鼓子花を摘まむ日や何時

炭燒くひま

春の末より夏のはじめにかけて炭竈のほとりに在りてよめる歌のうち

積みあげし眞木に着せたる萱菰に撓みてとどく櫻櫚の樹の花

炭がまを焚きつけ居れば赤き芽の柘榴のうれに沒日さし來も

芋植うと人の出で去れば獨り居て炭燒く我に松雀しき鳴く

炭竈の灰篩ひをれば竹やぶに花ほの白しなる
こ百合ならむ

擲木のふさに垂り咲く花ちりて世の炭がまは
燒かぬこの頃

炭がまを夜見に行けば垣の外に迫るがごとく
蛙きこえ來

炭がまを這ひ出てひとり水のめば手桶の水に
樫の花浮けり

廏戸にかたかた枝さし掩ふ枇杷の木の實のつばら
かに目につく日頃

送征途

小弟整四郎樺太軍に從ひ四月二十九日特殊の任務を以て獨り先發す、自ら調練せる小隊を率ゐるなりと、予妹二人を伴ひて下野小山の驛に會す、彼等三人相逢はざること既に數年、言なくして唯怡然たり、短歌五首を作りて之を送る

大君の御楯つかふる丈夫は限り知らねど汝を
おもふ我は

我が庭の植木のかへで若楓歸りかへらず待ち
つつ居らむ

淺緑染めし樹群にあさ日さしうらぐはしもよ
我がますら男は

竹棚に花さく梨のいさぎよくいひてしことは
母に申さむ

おぼろかに務めおもふな麥の穂の秀でも秀で
ずも問ふ所にあらず

雜詠

篠の葉のしげれるなべに樒(しきみ)さきさびしき庭の
うぐひすの聲

新墾の小松がなかに作りたる三うね四うねの
豌豆(ゑんどう)の花

青葱の花さく畑の桃一樹しげりもあへず毛蟲
みな喰ひ

桑の木の茂れるなかに咲きいでて仄かに見ゆ
る豌豆の花

行々子の歌

六月なかばに左千夫氏の來狀近く山百合氏の來るをいふ、且つ添へていふ庭前の槐に行々子頻りに鳴くと、雨夜聞きし狀日に暮るゝ思あり、乃ち懷をのべて左千夫氏に寄す

垣の外ははちす田近み慕ひ來て槐(ゑんじゆ)の枝に鳴く
かよしきり

あしむらに棲める葭剖(よしきり)いかさまに槐の枝に止
まりて鳴くらむ

竪川（たてかは）の君棲む庭は狭けれど葭剖鳴かば足らずしもあらじ

五月雨のけならべ降るに庭の木によしきり鳴かば人待つらむか

栗の木の花さく山の雨雲を分けくる人に鳴くかよしきり

みすず刈る科野の諏訪はみづうみに葭剖鳴かむ庭には鳴かじ

稀人（まれびと）を心にわれはおもへども行きても逢はず葭剖も聞かず

我が庭の杉苔がうへを立ち掃くとそこなる庭の槐をぞおもふ

諏訪の歌會

第一回

九月五日、地蔵寺へ集る、同人總べて五、後庭宿樹の間には清水湛々として石上に落ち、立つて身を押せば諏訪の湖遠く横りて明鏡の如し、此清光を恣にして敢て人員の乏しきを憂へず、題は秋の田、蜻蛉、殘暑、朝草刈

秋の田のかくめる湖の眞上には鱗なす雲ながく棚引く

武藏野の秋田は濶し椋鳥の筑波根さして空に消につつ（道灌山遠望）

豇豆干す庭の筵に森の木のかげるゆふべを飛ぶ赤蜻蛉

水泡よる汀に赤き蓼の穂に去りて又來るおはぐろ蜻蛉

秋の日は水引草の穂に立ちて既に長けど著きこのごろ

科野路は蕎麥咲く山を廻りきて諏訪の湖邊に
著しこの日は

秣刈り霧深山をかへりきて埴根にうれし月見
草のはな

第二回

七日有半の樓上に開く、會するもの更に
一人を減す、題は秋の山、霧、灯、秋の果物

杉深き溪を出で行けば草山の羊齒の黄葉に晴
れ渡る空

馬放る牧の草山ここにして那須野の霧に日の
あたる見ゆ（下野鹽原の奥）

山梨の市の瀬村は灯ともさず榾火がもとに夜
の業すも

瓜畑に夜を守るともし風さやり桐の葉とりて
包むともし灯

黄葉して日に日に散ればなり垂れし庭の梨の
木枝のさびしも

二荒山いまだ明けねば關(せき)本(もと)の圃なる梨は露な
がらとる

羇旅雜咏

八月十八日、鬼怒川を下りて利根川に出づ、潮流滔々たり、舟運河に入る

利根川やみなぎる水に打ち浸る楊吹きしなふ秋の風かも

おぼほしく水泡吹きよする秋風に岸の眞菰に浪越えむとす

同廿三日、雨、房州に航す

相模嶺はこの日はみえず安房の戸や鋸山に雲飛びわたる

秋雨のしげくし降れば安房の海たゆたふ浪に
しぶき散るかも

廿七日、房州那古の濱より鷹の島に遊ぶ

鮑とる鷹の島曲をゆきしかば手折りて來たる
濱木綿の花

潮滿つと波打つ磯の蕁麻のしげきがなかにさ
ける濱木綿

はまゆふは花のおもしろ夕されば手に持ち來
れど開く其花

廿一日、甲斐の國に入る、幾十個の隧道を
出入して鹽山附近の高原を行くに心境

頓に蕭然たるを覺ゆ

甲斐の國は青田の吉國(よくに)桑の國もろこし黍(きび)の穂につづく國

古屋氏のもとにやどる屬目二首

梅の木の落葉の庭ゆ垣越しに巨摩(こま)の群嶺に雲騷ぐ見ゆ

ここにして柿の梢にたたなはる群山こめて秋の雲立つ

九月一日、古屋志村兩氏と田園の間を行く、低き山の近く見ゆるに頂まで皆畑なるは珍らし

甲斐人の石臼たてて粉に碎く唐（カラ）もろこしか此
見ゆる山は

三日、御嶽より松島村に下る途上

稗（ヒエ）の穂に淋しき谷をすぎくればおり居る雲の
峰離れゆく

霧のごと雨ふりくればほのかなる谷の茂りに
白き花何

ひよどりの朝鳴く山の栗の木の梢しづかに雲
のさわたる

韮崎

走り穂の白き秋田をゆきすぎて釜なし川は見るに遙かなり

甲斐に入りてより四日、雲つねに山の嶺を去らず

韮崎（にらさき）や釜なし川の遙々にいづこぞ不盡（ふじ）の雲深み見えず

[illegible]棲谷（うさつ）より對岸を望む

いたくたつは何焚く煙ぞ釜なしの楊（やなぎ）がうへに遠く棚曳く

臺が原に入る

白砂にかはらははこの咲きつづく釜無川に日は暮れむとす

四日、臺が原驛外

小雀の榎の木に騷ぐ朝まだき木綿波雲に見ゆる山の秀

信州に入る

釜なしの蔦木の橋をさわたれば蓬がおどろ雨こぼれきぬ

富士見村

をすすきの楷に交り穗になびく山ふところの秋蕎麥の花

坂室の坂上よりはじめて湖水を見る

秋の田のゆたかにめぐる諏訪のうみ霧ほがら
かに山に晴れゆく

六日、諏訪の霧が峰に登る途上

立石の山こえゆけば落葉松の木深き渓に鵙の
啼く聲

立石の淺山坂ゆかへりみる薄に飛騨の山あら
はれぬ

霧が降

うれしくも分けこしものか遙々に松蟲草のさ
きつづく山

つぶれ石あまたもまろぶたをり路の疎らの薄
秋の風ふく

霧が峰は草のしげ山たひら山萩刈る人の大薙（おほなぎ）
に刈る

八日、鹽尻峠を越へて桔梗が原を過ぐ

しだり穂の粟の畑に墾（は）りのこる桔梗が原の女
郎花の花

をみなへし茂きがもとに疎らかに小松稚松お
ひ交り見ゆ

九日、奈良井を發す

暁のほのかに霧のうすれゆく落葉松山にかし
鳥の鳴く

鳥居峠

諸樹木(もろきぎ)をひた掩ひのぼる白雲の絶間にみゆる
谷の秋蕎麥

宮の越附近

木曾人の秋田のくろに刈る芒かり干すうへに
小雨ふりきぬ

西野川の木曾川に合するほとり道漸く
たかし、崖下の杉の梢は道路の上に聳え
たり

鋒杉の茂枝がひまゆ落合の瀬に噛む水の碎け
ちる見つ

須原の地に入る、河聲やや遠し

男郎花まじれる草の秋雨にあまたは鳴かぬこ
ほろぎの聲

終日雨やまず

木曾山はおくがは深み思はねど見ゆべき峰も
隱りけるかも

十日、風に須原を發す

木曾人の朝の草刈る桑畑にまだ鳴きしきるこ
ほろぎの聲

長野ヶ原開田にのぞみて大樹おほし

木曾人よあが田の稲を刈らむ日やとりて焚く
らむ栗の強飯(こはいひ)

妻籠より舊道を迎る、溪水に襯衣を濯ぎ
て日頃の垢を流す、又巨巌の蓬を求めて
蘚しきて打ち臥す、こゝは秋天の高きを
仰ぎて、一つは衣の乾く程を待つなり

ゆるやかにすぎゆく雲を見おくれば山の木群
のさやさやに搖る

ひややけき流れの水に足(あ)うら浸(ひ)で石を枕ぐ旅
びとわれは

馬籠(まこめ)峠を美濃に下る

まさやかにみゆる長山美濃の山青き山遠し峰かさなりて

十一日、釜戸より日吉といふ所へ越す峠に例の蓙をしきて打ち臥すに小さき聲にて忙しく鳴く蟲あり日ごろも聞く所なり、蟬の小さなるものなりと或人いふ、つち蟬といふものにや、草のなかにあれば假に草蟬とよびて

汗あえて越ゆるたむけの草村に草蟬鳴きて涼し木蔭は

日吉より次月(しつき)といふところへ越す

をみなへしみじかくさける赤土の稚松山は汗

もしとどに

十二日、中山道伏見驛より川を下らむとして成らず、獨り岡道を辿る

木曾川のすぎにし舟を追ひがてに松の落葉を踏みつつぞ來し

木曾川の沿岸をゆく

うろこなす秋の白雲たなびきて犬山の城松の上に見ゆ

各務が原

淺茅生の各務(かかみ)が原は群れて刈るまぐさ干草(ほしくさ)眞熊手に搔く

十五日、江崎より大垣

松かげは篠も芒も異草も皆ことごとくまんじゆさげ赤し

鯰江の縄手をくれば田のくろの荳(まめ)のなかにもまんじゆさげ赤し

十六日、潮音氏と養老山に遊ぶ、途に遙に小瀑布をのぞむ

多度山の櫟がしたに刈る草の秣が瀧はよらで過ぎゆく

養老公園

落葉せるさくらがもとの青芝に一むらさびし白萩の花

養老の瀧

しろたへの瀧落衣掛けて下す樹々の櫻は紅葉しにけり

瀧の邊の槭の青葉ぬれ青葉しぶきをいただみ散りにけるかも

十七日、瀬音夢圃の兩氏と揖斐川の上流に鮎簗を見る

揖斐川は鮎の名どころ揖斐人の大簗かけて秋の瀬に待つ

揖斐川の簗落つる水はたぎつ瀬ととどろに碎け川の瀬に落つ

十九日、大垣を立つ、雨

近江路の秋田はろかに見はるかす彦根が城に雲の脚垂れぬ

石山寺途上

蜆とる舟おもしろき勢多川のしづけき水に秋雨ぞふる

粟津

秋雨に粟津野くれば葦の穗に湖靜かなり遠山は見えず

逢阪を越えて山科村に入り、遂に山陵を拜す

秋雨の薄雲低く迫り來る木群がなかや中の大見すめら

十日、雨、法然院

ひややけく庭にもりたる白沙の松の落葉に秋雨ぞ降る

竹村は草も茗荷も黄葉してあかるき雨に鵯ぞ鳴くなる

白河村

女郎花つかれて淺てし白河の水さびしらに降る秋の雨

一乘寺村

秋雨のしくしくそそぐ竹垣にほうけて白き楤(たら)
の木の花

詩仙堂

落葉せるさくらがもとにい添ひたつ木槿の花
の白き秋雨

唐(から)鶸(ひは)の雨をさびしみ鳴く庭に十もとに足らぬ
黍垂れにけり

下鴨に詣づ、みたらしの上には樟の大樹
さし掩ひて秋雨のしづくひまもなし

糺の森かみのみたらし秋澄みて檜(ひ)皮(はだ)はひてぬ
神のみたらし

二十一日、伏見桃山

柿の木の林がもとはおしなべて立枝の獨活(うど)の
花さきにけり

みちのへに草も莠(はぐさ)も打ち茂る圃の桔梗は枯れ
ながらさく

愚庵和尚の遺蹟を訪ふ、庵室の椽の高きは遠望に佳ならむがためなり、戸は鎖したれど時久しからねば垣も未だあらたなり、清泉大石のもとを流る

梧桐の庭ゆく水の流れ去る垣も朽ちればいま
すかと思ふ

巨椋（おほくら）の池のつつみも遠山も淀曳く船も見ゆる
この庵

桃山の萱は葺きけむこの庵を秋雨漏らば誰か
掩はむ

二十二日、丹波路

何鹿（いかるか）の和知（わち）のみ溪の八十（やそ）村（むら）に名に負ふ栗山い
まだはやけむ

丹後舞鶴の港より船に乗りて宮津へ志す

眞白帆のはららに泛ける與謝の海や天の橋立
ゆほびかに見ゆ

二十三日、橋立途上

葦交り嫁菜花さく與謝の海の磯過ぎくれば霧うすらぎぬ

橋立

橋立の松原くれば朝潮に篠葉釣るひと腰なづみ釣る

成相山に登る

ここにして竪さに見ゆる橋立の松原通ふ人遠みかも

松原を長洲の磯とさし出の天のはしだて海も朗らに

弓の木村より杉峠にのぼる

とりよろふ天の橋立よこさまに見さくる山を
來る人は稀

岩瀧村より船にて宮津へ渡る

與謝の海なぎさの芒吹きなびく秋かぜ寒し旅
の衣に

宮津より栗田村に越ゆる坂路にたちて

鰺網を建て干す磯の夕なぎに天の橋立霧たな
びけり

干し蕨むしろにさらす山坂ゆかへり見遠き天
の橋立

栗田村より由良港にいたる、右は峻嶺笠
を壓して聳え、左は海濤脚下巖を嚙む

由良の嶺に栗田の子らが樵る柴は陸ゆはやらず蜑舟に漕ぐ

眞柴こり松こる子らが夕がへり疾きも遲きも磯に立ち待つ

二十四日、由良の港を立つ

由良川は霧飛びわたるあかときの山の峽より霧飛びわたる

曉の霧はあやしも秋の田の穂ぬれに飛ばず河の瀬に飛ぶ

由良川の霧飛ぶ岸の草むらに嫁菜が花はあざやかに見ゆ

四所村間道

からす鳴く霧深山の溪のへに群れて白きは男郎花ならし

諸木々の梢染めなば萱わけて栗ひろふべき山の谷かも

廿五日、攝州須磨寺

須磨寺の松の木の葉の散る庭に飼ふ鹿悲し聲ひそみ鳴く

須磨敦盛塚

松蔭の草の茂みに群れさきて埃に浴みしおしろいの花

舞子濱

落葉掻く松の木の間を立ち出でて淡路は近き秋の海かも

舞子の濱松に迫りてゆく船の白帆をたゆみいし漕ぐや人

明石人丸社

淡路のや松尾が崎に白帆捲く船おきらかに松の上に見ゆ

明石にやどる此夜大漁

沖さかる船人をらび陸どよみ明石の濱に夜網夜曳く

瀬戸の海きよる鰯は彌水(いやみづ)の潮の明石の潮なぎに曳く

鰯引く袋をおもみ引きかねて魚籃にすくふ磯の淺瀬に

いわし曳く網のこぼれはひりはむと渚の闇に群れにけるかも

明石潟あみ引くうへに天の川淡路になびき雲の穂に沒る

廿六日、垂水濱

茅渟の海うかぶ百船八十船の明石の瀬戸に眞帆向ひ來も

廿七日、南禪寺附近

葉雞頭もあかき垣内のそしろ田に引板の繩ひく其水車

廿八日、八瀬の里に竈風呂を見る、岩もて洞穴のやうにつくりたるものなり、朝に穴のうちに火を焚けばおくもり終日去らず、鹽俵をしきて内に入り口戸を閉ぢて打ち臥すなりとぞ、けふは冷えたる儘なり、家のさまに人を待つけしきにて庭には枝豆も作れり

面しろの八瀬の竈風呂いま焚かば庭なる芋も掘らせてむもの

大原

粽巻く笹のひろ葉を大原のふりにし郷は秋の
日に干す

寂光院途上

鴨跖草の花のみだれに押しつけてあまたも干
せる山の眞柴か

寂光院

あさなさな佛のために伐りにけむ紫苑は淋し
花なしにして

堅田浮御堂

さざ波のさやさや來よる葦村(あしむら)の花にもつかぬ
夕蜻蛉かも

廿九日、朝再び浮御堂に上る此あたりの
家々皆叺をつくるとて莚おり繩を綯ふ

長繩の薦ゆふ藁の藁砧とどときこえ來(く)これの
葦邊に

湖畔には榛の木疎らにならびたり

布雲に叢雲かかるあさまだき近江の湖をとよ
もすや鵙

比叡辻村來迎寺森可成墓

ひややかに木犀かをる朝庭の木蔭は闇き都(みやこ)の
落葉や

志賀の舊都の蹟は大津町北數町にして錦織といふ所に在り、即事

さゝ波の滋賀の縣の葱作り麁朶垣つくるあらき麁朶垣

澁柿の腐れて落つる青芝も畑も秋田もむかし志賀の宮

此舊都の蹟は洵に形勝の地なり、以て天智天皇の剛邁果敢の主なりしを想見すべし

いにしへの近江縣は湖濶く稻の秀國うつそみもよき

うつゆふのさき國大和すみ棄ててうべ知らし
けむ志賀の宮どころ

滋賀つのや秋田もゆたに湖隔つ田上山はあや
にうらぐはし

弘文天皇山陵

白妙のいさごもきよきみささぎは花木犀のか
をる瑞垣

志賀宮の舊蹟を見て此の山陵を拜すれ
ば一種の感慨なき能はず

世の中は成れば成らねばかにかくに成らねば
悲し此の大君ろ

卅日、嵯峨に遊びて福田靜處先生を訪ふ

一むらは乏しき花の白萩に柿のこずゑの赤きこの庵

導かれて近傍の名所を探る、野々宮

冷かに竹藪めぐる樫の木の木の間に青き秋の空かも

小倉山時雨の亭に至る、くさぐさの話のうちに茸狩りし跡の小さき穴に栗の一つ宛落ちたるは鳥のしわざなりなど語らるるをききて

繩吊りて茸山いまだはやければ鳥のもてる栗もひりはず

醍醐より宇多野に到る

小芒の淺山わたる秋かぜに楷吹きいたむ樹の木群かも

十月一日、栂尾

栂尾の槭(もみぢ)は青きあきかぜに清瀧川の瀬をさむみかも

二日、大津より彦根に渡る

葦の邊の魞(えり)おもしろき近江の湖鴨うく秋になりにけるかも

魞は水中に竹簀をたて圍みたるをいふ、魚とるためなり、彦根城廓内

鵯の晴を鳴く樹のさやさやに葛もすすきも秋の風吹く

天主閣にのぼる

名を知らぬうらがれ草の穗に茂き蕊のうへに秋の蟲鳴く

夕、彦根を去らむとして湖水をのぞむ

比良山の流らふ雲に落つる日の夕かがやきに葦の花白し

三日、伊勢に入る

宮路ゆく伊勢の白子は竹簾古りにしやどの秋蕎麥の花

一身田村途上

鵲豆を曳く人遠くむら雀稲の穂ふみて芋の葉に飛ぶ

四日、純澤、眞島二氏と安濃津に遊ぶ、岩田川の河口を贄崎といふ安濃津に集る船は此川口に入りて纜を繋ぐ

安濃の津をさしてまともにくる船の贄の岬に眞帆の綱解く

にへ崎の鮭の簗ゆふかげり阿漕が浦に寄するしき浪

五日

伊勢の野は秋蕎麥白き黄昏(たそがれ)に雨を含める伊賀の山近し

六日、能褒野に至る、山陵は小なれども神さびたるに、程近き宮はあたり淋しくして形ばかりに斎きたるさまなり

淺茅生のもみづる草にふる雨の宮もわびしも伊勢の能褒野(のぼの)は

秋雨のしげき能褒野の宮守はさ筵おほひ芋のから積む

四日市より横濱へ汽船に乗る、風浪烈しくして伊勢灣を出づる能はず、伊良胡崎の蔭に停泊す

潮ざゐの伊良湖が崎の巖群にいたふる浪は見れど飽かぬかも

夜半[illegible]ぐ、[illegible]霽れて星かがやけり

伊良湖崎なごろもたかき小夜ふけに揺りもてくれば心ともなし

七日、[illegible]に入る

しづかなる秋の入江に波のむた限りも知らに浮ける海月（くらげ）か

十三日、郷に入り鬼怒川を過ぐ

異郷（ことざと）もあまた見しかど鬼怒川の嫁菜が花はいや珍らしき

わせ刈ると稲の濡莖ならべ干す堤の草に赤き
茨の實

我がいへにかへりて

めづらしき蝦夷の唐茄子(たうなす)蔓ながらとらずとぞ
おきし母の我がため

たうなすはひろ葉もむなし雑草(あらくさ)の蚊帳釣草も
末枯にして

明治三十九年

氷塊一片

昨秋予の西遊を思ひ立つや、岡本倶伎羅氏を神戸の寓居に叩かむと約す、予が未發程せざるに先だち氏は養痾の爲め、播磨の家島に移りぬ、予又旅中家島を訪ふを果さずして歸る、近頃島中の生活養痾にかなへるを報じ、且つ短歌數首を寄せらる、心爲に動き卽思詠八首を以て之に答ふ(其六首を錄す)

津の國のはたてもよぎて往きし時播磨の海に
君を追ひがてき

淡路のや松尾が崎もふみ見れば飾磨の海の家島も見ず

飾磨の海よろふ群島つゝみある人にはよけむ君が家島

冬の田に落穂を求め鴛鴦の来て遊ぶちふ家島なつかし

家島はあやにこほしもわが郷は梢の鵙も人の獲るさと

今年行きて二たびゆかむ播磨路や家島見むはいつの日にあらむ

亂礁飛沫

一月十七日、常陸國鹿島郡の南端なる波崎といふ所の漁人の家に到りぬ、地は銚子港と相對して利根の河口を扼す、止まること數日、たまたま天曇りて海氣濛々たり、漁舟皆河口よりかへりぬ

ほこりかも吹きあげたると見るまでに沖邊は闇し磯は白波

眞白帆にいなさをうけて川尻や潮の膨れにしきかへる舟

いさりぶね眞帆かけ歸るさし潮の潮目搖る波
ゆりのぼる見ゆ

利根川の冬吐く水は冷たけれどかたへはぬる
し潮目搖る波

利根川は北風(かぜ)いなさの吹き替へにむれてくだ
る帆つぎてのぼる帆

滿潮河口に浸入すれば河水と相衝き小波
を揚げて明に一線を畫す、之を潮目といふ、
蓋し淡水と鹹水とを相分つの意なり、

廿一日の夜雪ふりて深さ五寸に及ぶ、此

の如きは此地稀に有る所なりといふ

松葉焚き煤火すすたく蜑が家に幾夜は寝ねつ
雪のふる夜も

波崎のや砂山がうれゆ吹き拂ふ雪のとばしり
打ちけぶる見ゆ

しら雪の吹雪く荒磯にうつ波の碎けの穂ぬれ
きらひ立つかも

吹きたまる雪が眞白き篠の群の椿が花はおも
しろきかも

波崎雑詠のうち

薦(こも)かけて桶の深きに入れおける蛸もこほらむ
寒きこの夜は

即景

鬼怒川の堤の茨咲くなべにかけりついばみ川
すずめ啼く

鬼怒川のかはらの雀かはすずめ桑刈るうへに
來飛びしき鳴く

六月短歌會

雨過ぎば青葉がうれゆみづうみに雫するらむ
二荒山の上

ゆゆしきや火口の跡をいめぐりて青葉深しち
ふ岩白根山

藤棚はふぢの青葉のしげきより蚊の潜むらむ
いたき藪蚊ら

梧桐の葉を打ち搖りて降る雨にそよろはひ疲
る青蛙一つ

葦村はいまだ繁らず榛の木の青葉がくれに葭切の鳴く

青草集

六月廿八日、常陸國平潟の港に到る、廿九日近傍の田を歩く、畑がある、麥を燒いて居る、處々火をつけるとめろめろ消えて穗先がぼろぼろ落ちる、青い畑が所々に瞭る、これは收納がはやいからするのだ相である

殼竿にとどと打つべき麥の穗を此の畑人は火に燒きてとる

長濱の搗布（かちめ）燒く女は五月雨の雨間の岡に麥の穗を燒く

穗をやきてさながら捨つる麥束に莢が花も青草も燒けぬ

七月五日、岩城の平の町赤井嶽に登る、山上の寺へとまる、六日下山

赤井嶽とざせる雲の深谷に相呼ぶらしき山どりのこゑ

七日、平の町より平潟の港へかへる途上磐城關田の濱を過ぎて

こませ曳く船が帆掛けて浮く浦のいくりに立つは何を釣る人

汐干潟磯のいくりに釣る人は波打ち來れば足揚て避けつゝ

平潟港即事

松魚船入江につどひ檣に綱延て干せり帆を張るが如し

九日、午後になりて雨霽る、平潟に來てはやゝに晴れたり

天氷のよりあひの外に雲收り拭へる海を來る松魚船

白帆干す入江の磯に松魚船いま漕ぎ歸る水夫の呼び聲

きららかに磯の松魚の入日さしかがやくなべに人立ち騒ぐ

十日、平潟日和山

むら鷗夕棲みさわぐ松の上にしら雲たなびく濱の高岡

濱田の濱

ここにして青草の岡に隠ろひし夕日はてれり沖の白帆に

波越せば巖に絲掛けて落つる水落ちもあへなくに復た越ゆる波

十一日、此日も關田の濱へ行く

松蔭に休らひ見れば著き日は浪の膨れのうねにきらめく

此日平潟より南へわたる、長濱といふ所の露岩の上に立ちて

わだかまる松の隙より見おろせば搖りよる波はなべて白泡

枝かはす松が眞下はしら波の泡嚙む巖に釣るみじか人

十二日、日立村へ行く、田越しに助川の濱の老松が見える

松越えて濱のからすの來てあさる靑田の畦に萱草赤し

十三日、朝來微雨、衣ひきかゝげて出づ、平潟より洞門なくぐれば直ちに關田の濱なり

日は見えてそぼふる雨に霧る濱の草に折り行く月見草の花

雀等よなにを求むと鹽濱のしほ漉す鹿朶の棚に啼くらむ

松蔭の沙にさきつづくみやこ草にほひさやけきほの明り雨

松蔭は熊手の跡もこぼれ葉も皆うすじめりみ
やこ草偃へり

十四日、磯原の濱を行く

青田行く水はながれて磯原の濱晝顔の磯に消
入りぬ

平潟の入江の松魚船が幾十艘となく泊
つて居るので陸へのぼつた水夫共が代
るがはる船に向つて怒鳴る、深更になつ
てもやまぬ

鴉等よ田螺のふたに懲りなくば蟹のはさみに
嘴断ちてやらむ

十九日、歸鄕の途次辻村にて

木欒樹の花散る陰に引き据ゑし馬が打ち振る
汗の鬣

余が起臥する一室の檐に合歡の木が一株ある。花の美しいのは論である、ちぢれ毛のやうなのが三時頃には餘つ程延び出して葉の眠る頃にはさき切る、それ故賑かなのは夕暮である、

蚊帳越しにあさあさうれし一枝は廂のしたに
そよぐ合歡の木

やはらかく茂り撓める合歡の木の枝に止りて
羽を干す燕

水掛けて青草燻ゆる蚊遣火のいぶせきさまに
萎む合歡の葉

赤絲の染分け房を髻華に挿す合歡のをとめは
常少女かも

さわやかに青帷子のたもとゆる合歡の處女の
藤の涼しさ

合歡の木は夕粧ひの向かしきに何を面なみし
をれて見ゆらむ

戯れに禿頭の人におくる

つやつやに少なき頭泣かむより糊つけ植ゑよ
唐黍の毛を

おもしろの髪は唐黍(たうきび)白髪の老い行く時に黒し
といふもの

たうきびの糊つけ髪に夕立の倚る樹もなくば
翳せ肱笠(ひぢかさ)

七月廿五日、昨日より「フツカケ」といふ雨
来る、降りては倏ちに晴れ、晴れては復た
降りきたる

著き日の降り掛け雨は南瓜の花にたまりてこ
ぼれざる程

八月八日、立秋

南瓜の茂りがなかに抽きいでし莠そよぎて秋立ちぬらし

九日、夜はじめて蛼なきく

垣に積む莠がなかのこほろぎは栗畑よりか引きもて来つらむ

十日、雨ありていか

目をつけて草に棄てたる芋の葉の埃しめりて露おける朝

假裝行列に加はりて余は小原女に扮す

小原女に代りて歌を作る

白河の藁屋さびしき菜の花を我が手と伐りし花束ぞこれ

菜の花に明け行く空の比枝山は見るにすがしも其山かづら

白河のながれに浸でし花束を箕に盛り居ればつぐみ鳴くなり

おもしろの春の小雨や花箕笠花はぬるれど我はぬれぬに

あさごとに戸の邊に立ちて喚ぶ人を花賣われは女し思ほゆ

浄土寺の松のさび花さびたれど石切る村の臼
河われは

明治四十年

蕨君病むと聞きて

睦岡の杉の茂山しげけれど冬にし病めば淋しくあるらし

冬の日の障子あかるくささむ時蒿雀(あをじ)も來鳴けなぐさもるべし

君が庭の庭木に植ゑしよそぞめのいやいつくしき丹の頬はや見む

命あれば齡はながし網繩のながきいのちをな憂ひ吾が背

早春の歌

天の戸ゆ立ち來る春は蒼雲に光どよもし浮き
ただよへり

春立つと天の日渡らふみむなみの國はるかなる
空ゆ來らしも

蒼雲のそぐへを見れば立ち渡る春はまどかに
いや遙かなり

おのづから滿ち來る春は野に出でて我が此の
立てる肩にもあるべし

おほどかに春はあれども搖り動く榛（はり）が花にも滿ち足らひたり

そこらくの冬を潛めて雪のこる山の高嶺は浮き遠ぞきぬ

いささかも春蒸す土のぬくもればゐさらひ輕み雲雀は立つらむ

麥の葉は天つひばりの聲ひびき一葉一葉に搖りもて延ぶらし

おろそかにい行き到れる春なれや青める草は水の邊に多し

左千夫に寄す

蒼雲を天のほがらにいただきて大き歌よまば
生ける験あり

大丈夫のおもひあがれる心ひらき句はす花は
容も掩はむ

春の野にもえ出る草を白銀の雨を降らして濕
ほすは誰ぞ

大丈夫は眠れる隙にあらなくに凝りとどこほ
る心は持たず

春のひかり到らぬ闇に住みなばかくぐもる心蓋し持つべし

大空は高く遙けく限りなくおほろかにして人に知れずけり

晩春雜詠

鶯鳥の春がたけぬと鳴く聲に森の樫の木脫ぎすてにけり

うそどりよ汝が鳴く時ゆ我が好む枇杷のはつかに青むうれしも

初秋の歌

小夜(さよ)深(ふ)けにさきて散るとふ稗草(くさ)のひそやかにして秋さりぬらむ

植草ののこぎり草の茂も葉のいやこまやかに渡る秋かも

目にも見えすわたらふ秋は栗の木のなりたる毬(いが)のつばらつばらに

秋といへば譬へば繁き松の葉の細く遍く立ちわたるめり

馬追虫(うまおひ)の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢ
て想ひ見るべし

外に立てば衣うるほふうべしこそ夜空は水の
滴(したた)るが如

おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は近く
相迫り見ゆ

からくして夜の涼しき秋なれば晝はくもゐに
浮きひそむらし

うみ苧なす長き短きけぢめあれば晝はまさり
て未だ著けむ

芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白
く凝りつつあらむ

青桐は秋かもややどす夜さればさはらさはらと
其葉さやげり

烏瓜の夕さく花は明け來れば秋をすくなみ萎
みけるかも

晩秋雜詠

即興十八首

芋がらを壁に吊せば秋の日のかげり又さしこ
　まやかに射(さ)す

秋の日に干すはくさぐさ小(こ)鍋(なべ)干す箒(はうき)ぐさ干す
　張物も干す

葉鷄頭(かまつか)に藁おしつけて干す庭は騒がしくして
　おもしろきかも

葉鷄頭は籾の筵(むしろ)を折りたたむゆふべゆふべに
　いやめづらしき

荒繩に南瓜吊れるうつばりをけぶりはこもる
　雨ふらむとや

はらはらと榴の實ふきこぼし庭の戸に慌しく
も秋の風鳴る

お！なべて折れば短くかゞまれる茶の木も秋
の花咲きにけり

茨の實の赤びあけびに草白おみぞの岸には稲
掛けにけり

黄昏の霧たちこむる秋の田のくらきが方へ鳴
鳴きわたる

こほろぎははかなき蟲か柊のはなが散りても
驚きぬべし

紅の二十日大根は綿のごとなかむなにして秋
行かむとす

咲きみてる黄菊が花は雨ふりて濕れる土に映
りよろしも

此頃は食稻もうまし秋茄子の味もけやけし足
らずしもなし

繩結ひて絲瓜を浸てし水際の落ち行くごとく
秋は行くめり

夜なべすと繩綯ふ人よ鍬掛の鍬の光はさやけ
かるかも

美しき籠の黄菊のへたとると夜なべしするを
我もするかも
夢(ゆめ)とればほけて亂るゝ筵の黄菊が花はとも
しかかげよ
障子張る紙つぎ居れば夕庭にいよいよ赤く葉
鷄頭は燃ゆ

巌橿堂に寄す

杉山のせまきはざまの晩稲(おく)刈ると夕をはやみ
冷たかるらむ

稲曳くに馬も持てりといはなくに妹が押す時車にか曳く

白菊は稲掛けたらばみだるべし樞の木陰は稲な掛けそね

米櫃の底が出でぬと米舂くに白くもあらじ倦むらむ時は

樞の實のいくばく落ちて日暮れよと蒿雀は鳴けど杵はのどかに

棕櫚の葉を裂きて吊るらむつり柹のゆりもゆるべき杵の響か

米搗くとかがる其下に何よけむ杉の樹脂とり
塗らばかよけむ
冬の日の乏しき庭の綿さねは其處はかげりぬ
此處とてや干す
己妻の縫ひし冬衣は着よけむにゆきが合はず
とたけが足らずと
ませ垣の黄菊白菊ならぶごとひなびたれども
其妹を背を

戲寄香取秀眞

秀眞氏の消息たえたること久し、人はいふ其職業に忙殺せられつつあるなりと、氏の工場は更紗干す庭を前にして水田のほとりにあり、乃ちあたりのさまなど思ひうかべて此歌を作る

更紗干す庭の釜はおのがじし鑄物師見むとてつどひ來らしき

へなつちのよごれ見まくと深田なる釜がともは蓋し來にけり

注連繩のすゞびし陰にいそはくと煤びたらずやあたらいもじを

おろそかに庭になでちそ山茶花の花さへ香と
いひて萎まむ
芋の葉の妹もいなまむ二たびは日にはな焼け
そさめけむものを
土芋もあらへば白し鑄物する人に戀ひむは浴
みして後　　　　　　　　（十月二十日）

潮音に寄す

揖斐川の簗落つる水のとどとして聞ゆる妻を
其人は告らず

はし妻を覓ぎきといはず云はずけど子を擧げ
たらば蓋し知らさむ
柿の木に掛けし梯子のけたの如いやつぎつぎ
に其子生まさむ
ここにして梯子のけたを子とはいふ其子の數
に如かむ子もがも
竹竿に掛干す柿のつぶらかにいやつらつらに
其子はあるらめ
年のはに子うみおもなみすべなけば盥の尻を
手もて叩かせ

東國にはしかぞ尻打つ盥打つ然かする時は子をうむは遠し

はたはたと盥打つ時めぐし子はたらひたらひと足らひたるべし

（十月二十八日）

手紙の歌

明治四十年八月、國雄氏子が書を寄れて或事のために奔走せられ、しばらくしてその事の成就すべきよし報じこされたれば手紙なかくとて其はしに

我が植ゑし庭の葉鶏頭(かまつか)くれなゐのかそけく見
えて未だ染めずも

九月にいりて消息なし、心もとなければ
書きておくる

天の川あめを流れて、限りなく遠くしあれど、桐
の木の梢に近し。其川の近く見えつつ、遠くして
音なきが如、我が待てるたより聞えず、夜に日に
待てども

はじめ事もし成らば我が鬼怒川の鮭を
おくらむと約しけるを、十月に入りて鮭
の季節も末にならむとするに、其事の空
しからむとするを憂へて、月の十九日手
紙いかばかりに書きておくりける

青笹に包みて鮭はおくらむとことしはやらず
欲しといふとも

鬼怒川の鮭を欲りすといふ人はいふべき時は
未だ來らず

白銀の鮭を小笹に包まひてやるべくあらば豈
憂へむや

鬼怒川を晝は淀に居夜さればば幾瀬の網も鮭は
越すといふ

いささかの事のさやりに成らなくば鮭にも人
は如かずといはむ

藁焼けば谷のまなかに立つ烟の成りも成らぬにけぬといふものか

秋雨の垣根の紫苑うちしなひ心がからに吾れなぐさまず

さびさびに心おもへばいちはやく辛夷(こぶし)の黄葉散りそめにけり

我が庭の芙蓉の菼のさやさやに心落ち居むは何時の日にかも

此日ごろ秋の落葉の散る庭は掃けばさやけし心はあらず

食稲つく日の底ひに打つ薬のなよなよしもよ
心ともなく

秋茄子の幹にも似るかこしかたは久々にして
絶ゆらくは今

秋風は心いたしもうらさびし檪がうれに騒が
しく吹く

我が心水づく稲の穂も出でずしどろになりて
秋ゆかむとす

明治四十一年

暮春の歌

五月のはじめ雨の日にあひてたまたま興を催してよめる

さびしらに母とふたりし見る庭の雨に向伏(むかぶ)す
やまぶきの花

山吹のはなの黄染(きぞめ)をそこらくに洗ひおとして
雨ぞしきふる

もろもろの庭の梢は雨そそぎうち搖るるまで
その葉茂れり

水づけば潤ぶるものと木の梢も雨しふれれば
いやふくよかに

雨ふりてさびしき庭も耬斗菜の一むらゆゑに
足らずしもなし

あらかじめ排てりし雨をことごとく土に返し
て春はゆくめり

菜の花の乏しき見れば春はまだかそけく土に
のこりてありけり

すがすがし樫がわか葉に天響き聲ひびかせて
鳴く蛙かも

車前草の花が咲かむと嬉しとてかはづは雨に
きほひてや鳴く

蛙らはみな塗り込めの畦越えて遠田こち田と
鳴きめぐるらし

やはらかに繁き林が梢よりほがらほがらと春
は去ぬらむ

雜歌

京都一力にて妓にあたふ

わが戀は鮨の山葵の鼻ひびき泣きも泣かぬに
なみだ流さむ

鴨川の大はしの上に牛鳴くを今朝聞きしかば
今宵逢ひにけり

嵐山に雨後の花を見て妓竹子に與ふ

時じくに散り來る花の笹の葉につきてはとれ
ぬ思ひぞわがする

六月、下鴨百穂に寄す

さみだれのふりのまにまにつややかに枇杷は
熟せり無花果はまだ
おほさはにならぬ枇杷の樹今年だに君來とい
はばなりにけむかも

濃霧の歌

明治四十一年九月十一日、上州松井田の宿より村閭の間を求めて榛名山を越ゆ、湖畔を傳ひて所謂榛原の平を過ぐるにたまたま濃霧の來り襲ふに逢ひければ乃ち此の歌を作る

群山の尾ぬれに秀でし相馬嶺ゆいつ湧きいでし天つ霧かも

ゆゆしくも見ゆる霧かも倒(さかさま)に相馬が嶽ゆ搖り
おろし來ぬ

はろばろに匂へる秋の草原を浪の偃(は)ふごと霧
せまり來も

ひさかたの天つ狹霧を吐き落す相馬が嶽は恐
ろしく見ゆ

おもしろき天つ霧かも東の間に山の尾ぬれを
大和田にせり

秋草のにほへる野邊をみなそこと天つ狹霧は
おり沈めたり

榛原は天つ狹霧の奥を深み和田つみそこに我はかづけり

うべしこそ海とも海と湛へ來る天つ霧には今日逢ひにけり

うつそみを掩ひしづもる霧の中に何の鳥ぞも聲立てて鳴く

しましくも狹霧なる間は遠長き世にある如く思ほゆるかも

ひさかたの天の沈霧(しづきり)おりしかばこころも疎し遠ぞける如

常に見る草といへども霧ながら目に入るものは皆珍しき

はり原の狭霧は雨にあらなくに衣はいたくぬれにけるかも

おぼほしく掩へる霧の怪しかも我があたり邊は明かに見ゆ

相馬嶺は已に吐きしかば天つ霧おり居へだたりふたたびも見ず

秋雜詠

葉鷄頭の八尺のあけの燃ゆる時庭の夕はいや
大なり

ひさ方の天を一樹に仰ぎ見る銀杏の實ぬらし
秋雨ぞふる

秋雨のいたくしふれば水の上に玉うきみだり
見つつともしも

こほろぎの籠れる穴は雨ふらば落葉の戸もて
とざせるらしき

鬼怒川は空をうつせば二ざまに秋の空見つつ
渡りけるかも

鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠くきこえて
秋たけにけり

稲刈りて淋しく晴るる秋の野に黄菊はあまた
眼をひらきたり

鵯のひびく樹の間ゆ横ざまに見れども青き秋
の空よろし

明治四十四年

乘鞍岳を憶ふ

落葉松の溪に鵙鳴く淺山ゆ見し乘鞍は天にはるかなりき

鵙のこゑ透りてひびく秋の空にとがりて白き乘鞍を見し

我が攀ぢし草の低山木を絶えて乘鞍岳をつばらかにせり

おほにして過ぎば過ぐべき遠山の乗鞍岳をか
しこみ我が見し

乗鞍と耳に聲響きかへり見て何ぞもいたく胸
さわぎせし

思はぬに天に我が見し乗鞍は然かと人いはば
あらぬ山も猶

くしびなる山は乗鞍かしこきろ山のすがたは
目にかにかくに

乗鞍をまことにいへばただ白く山の間に見し
峰をそを我れは

うるはしみ見し乗鞍は遠くして一目といへど
ながく矜(ほこ)らむ

乗鞍はさやけく白しにごりたるなべてが空に
只一つのみ

おろそかに仰げば低き蒼空をはるかにせむと
乗鞍は立てり

乗鞍は一目我が見て一つのみ目にある姿我が
目に我れ見つ

まなかひに俤(おもかげ)消たずたふときもの山に乗鞍人
にはたありや

284

乘鞍はひと目見しかばおごそかに年を深めて
ますます思ほゆ

明治四十五年

病中雜詠 其一

喉頭結核といふ恐しき病ひにかかりしに知らでありければ心にも止めざりしを打ち捨ておかば餘命は僅かに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたくうち騷がれて

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき

我が命惜しと悲しといはまくを恥ぢて思ひしはみな昔なり

往きかひのしげき街（ちまた）の人みなを冬木のごとも
さびしらに見つ

我がこころ萎えてあれや街行く人のひとりも
病めりともなし

知らなくてありなむものを一夜ゆゑ心はいま
は昨日にも似ず

かくのみに心はいたく思へれや目さめて見れ
ば汗あえにけり

しかといはば母嘆かむと思ひつつただにいひ
やりぬ母に知るべく

なにしかも命悲しといはまくに答ふることは
我は知らぬに

なうれひそと人はいへどもまたけくてあらば
かあらむ我愁ひざれや

人は我ははかなきものかひたすらに悲しとい
ふもわがためにのみ

病院の一室に年を迎へて

我が命としほぎ草のさち草の日陰(ひかげ)の蔓(かづら)ながく
とをのる

衰ふる我が顔さびしここにだにあけに映えよ
とあけの紙貼る

病中雑詠　其二

明治四十四年十二月廿四日、ふと出でありくことありて此の日ばかり夜に入りて病室に帰り来れば、むすびし儘に派手なる包紙いつつみ一つ電燈のもとにおかれたり、怪みて解きみれば我が爲に心づくしい品は出できにたるに、赤きインキもて書かれし手紙も添へられつ、四た

びまで立ち入りがてに病院の門を行き過して、けふ始めておとづれきといふに思ひ設けぬことなれば待たんやうもなく、今は悔ゆれども及ばずなりぬ、されどわれ生れて卅三年はじめて婦人の情味を解したるを覺えぬ、我は感謝の念に堪へず、其の人一たびは我と手を携ふべかりつるに惡性の病生じたれば我に引き止めむ力もなく、斯くて離れたるものの合ふべき機會は永久に失はれ果てぬ、其の夜はふくるまで思の限り長き手紙に筆執りて、生涯の願いま一たびおとづれ給ひてんやと書きつけけるを、夜もすがら思は擾亂れて、明くれば痛き頭を抑へつつ庭の寒き梢に目を放ちて

四十雀なにさはいそぐここにある松が枝には
しばしだに居よ

包紙の地はつゆ草の花いいろなるを、人は鬼怒川のみなかみに我とおなじ西岸に棲めれば、想を故郷の秋に馳するに、なよなよとせるつゆ草の馬の幾七たび過ぐれども根は絶えずなど俚言に聞きけることもいまはなかなかに懐しく

鬼怒川の篠に交れる鴨跖草(ゆくさ)は刈る人なしに老
ゆといはずやも
鬼怒川の岸のつゆ草打ち浸りささやくことは
我はきけども

鴨跖草を岸に復た見ば我が思ふ人のあたりゆ持てりとを見む

いまにして人はすべなし鴨跖草（つゆくさ）の夕さく花を求むるが如

つゆ草の花を思へばうなかぶし我には見えし其の人おもほゆ

からまるを否とたれかいふ鴨跖草の蔓（つる）だに絡め我はさびしゑ

病みてあればともしきものかつゆ草は馬がはめども枯れなくといふに

鴨跖草の種はあまたもこぼれども我がには生えずなににかはせむ

既に五十日にも餘りぬれば我が病院生活も半を過ぎたらむと思ふに、待つ人の遂に來らねば徒らにおもひを焦すに過ぎず、醫術の限を盡して後は病はいかに成り行くべきかと心もこころもとなくて、二月廿三日の夜いたく深くる程に筆とりて

我が病いえなばうれし癒えて去なばいづべの方にあが人を待たむ

あまたたび空しく門は過ぎきとふ人はかへし
ぬ我が思止まず

癒えぬべきたどきも知らず病みたれば悲しと
來しに我は逢はぬに

ここにして來なば來なむと待つ人のここにも
來ねばいつとてか見む

霜ばしら庭に立てれば石踏みて來とさへいひ
てやりける人を

いたづらに思ひためて人待つと氷は閉ぢて
解けにけらずや

さきはひを人は復た獲よさもあらばあれ我が
泣く心拭ひあへなくに

おほよそは心は嘗ていはなくに思ひ堪へねば
いひにけるかも

又庭にある山茶花のあはれにさきのこ
れるに僅に懐をやるとて

打ち萎えわれにも似たる山茶花の凍れる花は
見る人もなし

山茶花のわびしき花よ人われも生きの限りは
思ひ嘆かむ

山茶花は萎えていまは凍れども命なる間は豈
散らめやも

尙さまざまにおもひつづけて

我を思ふ母をおもへばいづべにかはぐくもる
べき人さへ思ほゆ

我病めば母は嘆きぬ我が母のなげきは人にあ
りこすなゆめ

生命あらば見るよしもあらむしかすがに人や
も母といはばすべなし

我がおもふ人はさきはへ世の中のなべての母
は皆嘆けども

おもかげに母おもひ見れば人遂に母たりなむと思ひ悲しも

我が母の肉のゆるびは嘆き故あを思ふゆゑにわれすべもなし

一月廿六日、彼の包袱ゆくりなく手にとることありしに、絲巻の型の染め抜かれたるが今更に目に映れば

とこしへに解かむすべなし苧環（をだまき）のあまたはあれど手にもとれねば

をだまきといへばすずろに懐しき故郷の庭なる耬斗菜のうへにも及びぬれば

あまたたび冬には逢へど枯れざりし庭の樸(を)斗(だ)栄(まき)かれなくてあれな

此の日、ひねもすに雨ふる、なにごとにも
母のおもひ出でられて

我さへにこのふる雨のわびしきにいかにかいます母は一人して

いささかのゆがめる障子引き立ててなに見ておはす母が目に見ゆ

張り換へむ障子もはらず來にければくらくぞあらむ母は目よわきに

ここにしてすすぎし障子懐へれば母よと我は
喚ぶべくなりぬ

楼斗菜を母と二人が見てし日は障子はいまだ
白かりしかど

病室の内に雨を聴き暮して明くればま
だきに彼の山茶花のもとに思ひ煩ひて

からくして低きが枝にのこれりし山茶花の花
散りにけるかも

山茶花のはかなき花は雨ゆゑに土には散りて
流されにけり

山茶花のあけの空しく散る花を血にかも散ると思ひ我が見る

山茶花はむなしくなりぬ我が病癒えむと告ぐる言も聞かなくに

仔細に見るに葉の間に半開の蕾只一つすがりたるがいとほしくて

山茶花よそをだに見むと思へるに散らなくあれな我が去ぬるまでに

二月廿日といふに漸く病院を出づ、七十八日の間我を慰めし花は只一株の山茶花に過ぎざりけるを、けふを限りと復た

更に其の傍に立ちて見るに、思はざる花の綻びたるがそれも彼方に一つ此方に一つと只二つのみに餘所にはふふめる枝もなし、此花遂に我が爲にのみさきつくしけるにこそとさへ思ひいでられて

我がおもふ人にあらなくに山茶花は一樹が枝に相隔りぬ

山茶花の聖なる花は枝ながら背きてさけり我は向けども

山茶花の花は見果てて去ぬらくに人は在處(ありど)も知るよしもなく

かくのごとありける花を世の中に一人ぞ思ふ
其の遙けきも

三月七日、暫しが程と郷にかへる、三日ばかりして歸りこんと出で行きて既に四月にもなりたれば、ふたりはさながら忘れ去りたるやうなるを一日二日とある程に

ゆくりなく拗切りてみつる蠶豆の青臭くして
懷しきかも

蠶豆はまだ短くして、たとへば土に落ちたる生石灰の石のやうなるがおのづから水分をふくみてほとびつゝあるが如

し、我も此れより遠く西國の旅に赴かむとすれば

そら豆の柱のごとき莖たたばいづべに我は人おもひ居らむ

病院より旅宿とありける夜具を干しくるる人もなかりけるを、一日母が手して竿に掛けさせければ日毎にかくしつつ

日に干せば日向臭しと母のいひし衾はうれし軟かにして

日に疎き庭は土質悪しければ、冬の程には箒もあて難きに杉の大木聳え立ちたれば落葉もいたく亂れにけるを

あまたあれば杉の落葉のいぶせきに梅の花白しそのいぶせきに

杉の葉の梅の木にして懸れるを見つつ佇むそのさゆらぐを

掃かざりし杉の落葉を熊手もて搔かしめしかば心すがしき

我がさとはかくしもありき庭にして落葉搔き集むつむ梅さへ散るに

三月十三日、朝のほど雨ふる

外に立てどいくだもぬれぬ春雨を棕櫚の葉に聞く外に立ちしかば

雨はやがて雪にかはりたれば寒さ身にしむに妹と相對して火桶に手を翳す

桑の根の炭はいぶせし火を吹くと皮がはねつる吹かなくてあらむ

大正三年

鍼の如く　其一

一

秋海棠の畫に

白埴(しらはに)の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

りんだうの畫に

曳き入れて栗毛(くりげ)繋(つな)げどわかぬまで櫟林(くぬぎばやし)はいろづきにけり

夜半ふとおどろきめざめて

無花果に干したる足袋や忘れけむと心もとなき雨あわただし

二

上州入山の山中にて

唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕さりにけり

歸路

うなかぶし獨し來ればまなかひに我が足袋白き冬の月かも

たもとほり榛が林に見し月をそびらに負ひて
かへり来われは

博多所見

しめやかに雨過ぎしかば市の灯はみながら涼
し枇杷うづたかし

肥後に入る

球摩川の淺瀬をのぼる薬船は燭奴の如き帆を
みなあげて

三

山吹は折ればやさしき枝毎に裂きてもをかし
草などの如

西瓜割れば赤きがうれしゆがまへず二つに割れば矜らくもうれし

菜豆はにほひかそけく膝にして白きが落つも莢をしむけば

そこらくに藜をつみて茹でしかば咽喉こそばゆく春はいにけり

おしなべて白膠木の木の實鹽ふけば土は凍りて霜ふりにけり

枳椇さびしき枝の葉は落ちて骨ばかりなる冬の霜かも

楢の木の嫩葉は白しやはらかに單衣(ひとへ)の肌に日
は透(とほ)りけり

芝栗の青きはあましかにかくに一つ二つは口
もてぞむく

松が枝にろりが竊(ひそか)に來て鳴くと庭しめやかに
春雨はふり

草臥(くたびれ)を母とかたれば肩に乘る子猫もおもき春
の宵かも

移し植うと折れたる枝の錢菊は挿すにこちた
し棄てまくも惜し

薬の火に胡麻を熬るに似て小雀の騒ぐ聲遠く
霧晴れむとす
洗ひ米かわきて白きさ筵にひそかに椶櫚の花
こぼれ居り
楢の木の枯木のなかに幹白き辛夷はなさき空
蒼く澗し

四

落栗は一つもうれし思はぬにあまたもあれば
尚更にうれし

秋の日は枝々洩りて牛草のまばらまばらは土
のへに射す

柿の樹に梯子掛けたれば藪越しに隣の庭の柚
子黄み見ゆ

雀鳴くあしたの霜の白きうへに靜かに落つる
山茶花の花

藁掛けし梢に照れる柚子の實のかたへは青く
冬さりにけり

倒れたる椎の木故に庭に射す冬の日廣くなり
にけるかも

あをぎりの幹の青きに涙なすしづくながれて
春さめぞふる

冬の日はつれなく入りぬさかさまに空の底ひ
に落ちつつかあらむ

桑の木の低きがうれに尾をゆりて鵙も鳴かね
ば冬さりにけり

五

病院生活も既に久しく成りける程に、四
月廿七日、夜おそく手紙つきぬ女の手な
り

春雨にぬれてとどけば見すまじき手紙の糊も
はげて居にけり

五月六日、立ふぢ、きんせん、ひめじをん、などくさぐさの花もて來てくれぬ、手紙の主なり、寂しき枕頭にとりもあへず

藥壜さがしもてれば行く春のしどろに草の花
活けにけり

草の花はやがて衰へゆけども、せめてはすき透りたる壜の水のあたらしきを欲すと

いささかも濁れる水をかへさせて冷たからむ
と手も觸れて見し

いつの間にか、立ふぢは捨てられきんせんはぞありとこぼれたるに、道の草なればにや矢車のみひとりいつまでも心強げに見ゆれば

朝ごとに一つ二つと減り行くになにが殘らむ矢ぐるまの花

俛首(うなだ)れてわびしき花の樓斗菜(をだまき)は萎みてあせぬ矢車のはな

風邪引きて厭ひし窓もあけたればすなはちゆるる矢車の花

快き夏來にけりといふがごとまともに向ける
矢車の花

五月十日、復た草の花もて來てくれぬ、鐵砲百合とスウヰトピーなり、さきのは皆捨てさせて心もすがすがしきに、いつのまにか大きなる百合の蕾ひそかに綻びたるに

こころぐき鐵砲百合か我が語るかたへに深く
耳開き居り

十一日の夜に入り始めて百合の薫りの高きを聞く、此夜物思ふとありけるに明日の疲れ恐ろしければ好まざれども睡眠剤を服す、入院以來之にて二度目なり

うつつなき眠り薬の利きごころ百合の薫りに
つつまれにけり

六

病牀にひとりつれ〲なる慰めむと柾と
いふ紙を求めて四方の壁を色どりしが

壁に貼りしいたづら書の赤き紙に埃も見えて
春行かむとす

貧しき人々の住む家なれば、椽にあまた
草生ひたれども嘗てとることもなきぞ
と見ゆるに

窓の外は甍ばかりのわびしきに苦菜ほうけて
春行かむとす

窓の硝子は朝ごとに拭へども、そともは手もとどかねばいささかの曇りなれども晴るることもなし、春暮れむとして空さだまらず

硝子戸の春の埃をあらはむと雨は頻りに打ちそそぎけり

窓を壓して梧桐の木わだかまれり、はじめのほどに

春雨になまめきわたる庭の内に愚かなりける梧桐の木か

とよみおきけるが今は梢のさやぎも著しく

窓掛はおほになびきそ梧桐の嫩葉の雨はしめやかに暮れぬ

菜園のかたへにあみたるに身を横たふることも餘りに日のかさなればその単調なるにたふべくもあらず、まして爽かなる夏の色に行きいたれ/\に

梧桐の葉をすかしみをりをりは畳の上にねまく欲りすも

熱少したかけれどもたまたま出でありくこともあり

あかしやの花さく陰の草むしろねなむと思ふ疲れごころに

鍼の如く　其二

一

五月二十二日夜こころに苦悩やみがたきこと起りて

小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ

おそろしき鏡の中のわが目などおもひうかべぬ眠られぬ夜は

よしといへば水には足はひたせどもいたづら
にして小夜ふけにけり

すべもなく髪をさすればさらさらと響きて耳
は冴えにけるかも

やはらかきくくり枕の蕎麦殻も耳にはきしむ
身じろぐたびに

ゆくりなく手もておもてを掩へればあな頬は
し我が手なれども

手紙のはしには必ず癒えよと人いいひ
こすことのしみじみとうれしけれど

ひたすらに病癒えなとおもへども悲しきとき
は飯減りにけり

窓外を行く人を見るに、既に夏の衣にか
へたるがおほし

咳き入れば苦しかりけり暫くは襲（かさ）ねて居らむ
單衣欲しけど

蒲團に身をいたはることも七十日に
あまりたれど、自ら幾何も快きを覺えず

頬の肉落ちぬと人の驚くに落ちけるかもとさ
すりても見し

いぶせきに明日は剃らなと思ひつつ髭の剃杭（そりくひ）
のびにけるかも

二

物質上の損失はおほくは同情者の手によりて容易に補給せらるべきも、精神上の缺陷は同情者の手によりて凡て直ちに解決せらるべきものなるべからず、如何に深厚の同情と雖も其效果は概ね甚だ僅少なるべきなり、然れども其效果の僅少なるが爲めに遂に人間至高の價値を沒却すべからず

いささかのことなりながら痒きとき身にしみて人の爪ぞうれしき

健康者は常に健康者の心を以て心とな

す。もとより然るべきなり、只羸弱の病者に澁む時といへどもいくばくも異る處なきが如きものあるを憾みとすることなきにあらず

すこやかにありける人は心强し病みつつあれば我は泣きけり

三

病院の一室にこもりける程は心に惱むことおほくいできてまなこの窪むばかりなればいまは只よそに紛らさむことを求むる外にせん術もなく、五月三十日

といふに雨いたく降りてわびしかりけれどもおして歸寮す

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

小さなる蚊帳こそよけれしめやかに雨を聽きつつやがて眠らむ

蚊帳の外に蚊の聲きかずなりし時けうとく我は眠りたるらむ

三十一日、こよひもはやくいねて

廚(くりや)なるながしのもとに二つ居て蛙鳴く夜を蚊帳釣りにけり

鬼灯を口にふくみて鳴らすごと蛙はなくも夏の淺夜を

なきかはす二つの蛙ひとつ止みひとつまた止みぬ我も眠くなりぬ

短夜の淺きがほどになく蛙ちからなくしてやみにけらしも

夜半月冴えて杉の梢にあり

小夜ふけて厠に立てばものうげに蛙は遠し水足りぬらむ

六月一日、あたりのもの凡ていまさらに日にめづらしければ出でありく

麦刈ればうね間うね間に打ちならび菽は生ひたり皆かゞまりて

幼きものゝ仕業なるべし

垣根なるうつ木の花は扱き集めてぞろりと土に棄てられにけり

夕近くして雨意おほし

雨蛙しきりに鳴きて遠方の茂りほの白く咽びたり見ゆ

いささかは花まだみゆる山吹の雨を含みて茂らひにけり

二日、雨戸あくるおとに目さむ

おろそかに蚊帳を透してみえねどもしづく懶く外は雨なりき

やがてしげくふりいづ

つくづくと夏の緑はこころよき杉をみあげて雨の脚ながし

泥のぬかり足駄の歯にわびしけれど心ゆくばかりのながめせんとてまたいでありく

鉈豆(なたまめ)のもののものしくも擡(もた)げたるふた葉ひらきて雨はふりつぐ

車前草(おほばこ)は畑のこみちに槍立てて雨のふる日は行きがてぬかも

庭の枇杷今年ばかりは珍らしく果多し

枇杷の木にみじかき梯子かかれどもとるとは
かゝげじいまだ青きに

雨をよろこぶこころを

蕗の葉の雨をよろしみ立ちぬれて聽かなとも
へど身をいたはりぬ

我が草菴を好むこと[illegible]度を知らず[illegible]まい
ひつへし、未だ甚だしく體力の衰へきり
し程は一度に五合にのぼらざれば胸の
炎かなるを覺えず、然かも日には幾たび
となくこれをくりかへして飽くことも
なかりき、さるをことしは家を離れて久

しくなりけるに市場に出でたるは嘗て手にだも觸れむとせざれば、日頃はさびしくおかしけるが、いまはうれしきは門の畑なり

たらちねは笊もていゆく草苺赤きをつむがおもしろきとて

いくたびか雨にもいでて苺つむ母がおよびは爪紅をせり

草いちご洗ひもてれば紅解けて皿の底には水たまりけり

三日微雨、人にあふこといできたれば車に幌かけて出づ、鬼怒川をわたる

みやこぐさ更紗を染めし草むしろかこかにぬれて霧雨ぞふる

口をもて霧吹くよりもこまかなる雨に薊(あざみ)の花はぬれけり

鬼怒川の土手の小草に交りたる木賊の上に雨晴れむとす

四日、晴れて俄に暑し、風邪引くことのおそろしくてためらひ居けるもいまはなかなかに心も落ちゐたれば單衣になる

とりいでて肌に冷たきたまゆらはひとへの衣つくづくとうれし

くつろぐと足を外に向けころぶせば裾より涼
し唯そよそよと

さやげども麥程帽子とばぬ程みむなみ吹きて
外はすがすがし

暑きころになればいつとても痩せゆく
が常ながら、ことしはまして胸のあたり
骨あらはなれど、單衣の袂かぜにふくら
みてけふは身の衰へをおぼえず、かかる
こといくばくもえつづくべきにあらざ
れど猶獨り心に快からずしもあらず

單衣きてこころほがらかになりにけり夏は必
ず我れ死なざらむ

鍼の如く　其三

六月九日、夜下關の港にて

うつらうつら髮を刈らせて眠り居る足をつれなく蚊の螫しにけり

鋏刀もつ髮刈人は蚊の居れどおのれ螫さえねば打たむともせず

四日間の旅を經て十日といふに博多につく、十一日朝・千代の松原をありく

夏帽の堅きが鍔に落ちふれて松葉は散りぬこのしづけきに

十二日

蟵の中に瞼とぢてこやれども蚊に螫され居し足もすべなく

蚊の螫しし足を足もてさすりつつあらぬことなど思ひつづけし

十四日

脱ぎすてて臀のあたりがふくだみしちぢみの單衣ひとり疊みぬ

此の夜いまさらに旅の疲れいできにけるかと覺えられて

あまたには蚤とり粉など賣りありく淺夜をは
やゝ蚊帳吊らせけり

低く吊る蚊帳のつり手の二隅は我がつりかへぬ
よひよひ毎に

十七日、日ごろ雨の中を病院へかよひゐけるが此の日は殊にはげしく降りつるに、四日間い汽車の窓より見て到るところおなじく雨後にし、田舍よろこはせしもの曠野しき茅花いみだりけるたなつかしく思ひいづることありて

稚松の群に交りてたはむれし茅花も雨にしを
れてあるらむ

はろばろに茅花おもほゆ水汲みて來にまけたる此の雨の中に

泣くとては瞼に當つる手のごとく茅花や撓むこのあめのふるに

病室みな塞りたれば入院もなり難く、久保博士の心づくし暫くは空しくて雨にぬれて通ふ

すみやけく人も癒えよと待つときに夾竹桃は綻びにけり

廿日、漸くいぶせき旅宿をいでて病院の一室に入る、二日三日の程にくさぐさ聞き知りて馴れ行く、病院の規模大なれば

白衣の看護婦おびただしく行きかふ、皆かひがひしく立ちはたらくところ服装のためなればか年齢の相違のごときも俄にはわかち難く、すべて男性的に化せられたるが如く見ゆれども

たまたまは絣のひとへ帯締めてをとめなりけるつつましさあはれ

廿四日夜、また不眠に陥る

いづべゆか雨洩りたゆく聞え來てふけしく夜は沈みけるかも

小松植ゑたる狭き庭をへだてて外科の病棟あり、痛し痛しと呻く聲きこゆ

夜もすがら訴(うた)へ泣く聲遠ぞきて明けづきぬらし雨衰へぬ

廿五日、べコニヤの花一枝を挿し換ふ、博士の手折りたるなり、白き一輪挿は同夫人のこれもべコニヤの赤きを活けてもてきてくれたるなり、廿六日の朝看護婦の蟵を外していにけるあとにおもはぬ花一つ散り居たり

悉く綻りて垂れしペコニヤは散りての花もうつぶしにけり

ちるべくも見えなき花のべコニヤは蟵の裾などふりにけらしも

ベコニャの白きが一つ落ちにけり上に流れて涼しき朝を・

寝臺の下のくらさを拂ふこともなく看護婦のよひごとに吊りければ蚊帳の中に蚊おほくなりて、此の夜もうつらうつらとしてありけるほどふけゆくまゝに一しきり襲ひきたれるに驚く

ひそやかに螫さむと止る蚊を打てば手の痺れ居る暫くは安し

聲掛けて耳のあたりにとまる蚊を血を吸ふ故に打ち殺しけり

七月一日、朝まだきにはじめて草履はきておりたつ、構内に稍ひろき松林あり、近く海をのぞむ

月見草萎まぬほどと蛙鳴くころをたづねて松の木の間を

柵の外には畑ありて南瓜つくることおほし、我酷だこの花を愛す

ただひとり南瓜(たうなす)畑(はた)の花みつつこころなく我は鼻ほりて居つ

前後に人もなければ心も潤き松の林に白き浴衣きたりけることの故はなくして唯矜りかにうれしく

朝まだきまだ水つかぬ浴衣だに涼しきおもひ
松の間を行く
ただ一つ松の木の間に白きものわれを涼しと
膝抱き居り
ころぶしてみれば梢は遙かなり松かさが動く
その雀等は
松かげの蚊帳釣草にころぶしていささか痒き
足のばしけり
かくのごと頬すりつけてうなづけば蚊帳釣草
も懐しきかも

窓外

ぽぷらあと夾竹桃とならびけり甍を越えてぽぷらあは高く

四日深更、月すさまじく冴えたり

硝子戸を透して蝸に月さしぬあはれといひて起きて見にけり

小夜ふけて窺に蚊帳にさす月をねむれる人は皆知らざらむ

さやさやに蝸のそよげばゆるやかに月の光はゆれて涼しも

目さめてさまざまのことを思ふ

かかるとき扁蒲畑に立ちなばとおもひてもみ
つ今は外に出でず

七日

よひよひに必ずゆがむ白蚊帳に心落ちゐて眠
るこのごろ

白蚊帳に夾竹桃をおもひ寄せ只こころよくそ
の夜ねむりき

厭はしきは蟵の中の蚊なり

はかなくもよひよひ毎に蚊の居らぬ蟵なれか
しとおもひ乞ひのむ

鍼の如く　其四

一

七月十七日、構内の松林を徜徉す、煤煙のためなればか、梢のいたく枯燥せるが如きをみる

油蟬乏しく松に鳴く聲も暑きが故に嗄れにけらしも

いづれの病棟にもみな看護婦どもの其詰所といふものの窓の北陰にささやかなる箱庭の如きをつくりてくさぐさの

草の花など植ゑおけるが、夕毎に三四人づつおりたちて砂なれば爪こきかなる熊手もて掃き清めなどす、十九日のことなり

水打てば青鬼灯(あをほほづき)の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

かかる時女どもなればみなみなさざめきあへるが、ひとり我がために撫子の手折りたるなくれたれば

牛の乳をのみてほしたる壜ならで挿すものもなき撫子の花

此のをみなすべてのものの中に野にあるなでしこを第一に好めるよしいひければ

なでしこの交れる草は悉くやさしからむと我がおもひみし

壜に活けたるままにして

なでしこの花はみながらさきかへて幾日へぬらむ水減りにけり

撫子はいまに果敢なき花なれど捨つと言にいへばいたましきかも

二十日の夜ひとつには暑きたへがたくして夜もすがら眠らず、明方にいたりて蛙の聲を聞く

快くめざめて聽けと鳴く蛙ねられぬ夜のあけにのみきく

さわやかに鳴くなる蛙たとふれば豆を戸板に轉ばすがごと

朝のうち必ず一しきりはげしく吠出づることもありて苦しむ

曉の水にひたりて鳴く蛙すゞしからむとおもひ汗拭く

二

蚊帳釣草を折りて

暑き日はこちたき草をいとはしみ蚊帳釣草を活けてみにけり

こころよく汗の肌にすすふけば蚊帳釣草の髭そよぎけり

夜になれば我がためにのみは必す看護婦の來て蠅をつりてくるゝが例なり

蠅釣るとかやつり草を外に置くが務めなりける我は痩せにき

燬くが如き日てりつづけばすべての病

室のつきそひの女ども唯洗濯にいそがはし

粥(かゆ)汁(しる)を袋に入れて糊とると絞るがごとく汗はにじめり

おもひ待てども蟬の聲なきかず

板のごと糊つけ衣夕まけて松に乾けど蟬も鳴かぬかも

庭の松の陰に午後に成れば朝顏の鉢をおくものあり他の病室の患者の慰めなりといへどもひとの枕のほとり心づかざれば未だみしともなく

朝まだき涼しき程の朝顔は藍など濃くてあれ
なとぞおもふ

僅に凌ぎよきは朝まだきのみなり

蚤くひの趾（あと）などみつつ水をもて肌拭（ふ）くほどは
涼しかりけり

夕に汗を流さんと一杯の水を被りて

糊つけし浴衣はうれし蚤くひのこちたき趾（あと）も
洗はれにけり

涼味漸く加はる

松の木の疎（まば）らこぼるる暑き日に草みな硬（かた）く秋
づきにけり

三

二十二日久保博士の令妹より一叢の桔梗をおくらる花のはより叢に簇生せるがごとし

ささやけきかぞの白紙爪折りて桔梗の花は包まれにけり

桔梗の花の紫紙はぬれにけり冷たき水のしたたれるごと

桶などに活けてありける桔梗をもたせりしかば紙はぬれけむ

目をつぶりてみれば秋既に近し

白埴の瓶に桔梗を活けしかば冴えたる秋は既
にふふめり

しらはにの瓶にさやけき水吸ひて桔梗の花は
引き締りみゆ

桔梗を活けたる水を換へまくは肌は涼しき曉(あけ)
にしあるべし

我は氷を嚙むことを好まざれど

暑き日は氷を口にふくみつつ桔梗は活けてみ
るべかるらし

氷入れしつめたき水に汗拭きて桔梗の花を涼
しとぞみし

すべもなく汗は衣を透せどもきぎやうの花はみるにすがしき

廿四日の夕、偶々柵をいでて濱邊に行く、群れ居る人々と草履ぬぎて淺き波に渉る、空の際には暗紫色の霧の如きが棚引きたるに大なる日落ち懸れり、凝視すれども瞼かゝらず、近くは雨をみざる兆なり

抱かばやと没日のあけのゆゆしきに手圓ささげ立ちにけるかも

渚を遠く北にあたりて葎茂りて草もおひたれば行きて探りみんと思へどこのあたり嘗て撫子をみずといひにければ

おしなべて撫子欲しとみえもせぬ顔は憂へず
皆たそがれぬ

構内にレールを敷きたるは濱へゆくみ
ちなり雑草あまた茂りて月見草ところ
どころにむらがれり一夜蟋蟀をきく

石炭の屑捨つるみちの草むらに秋はまだきの
きりぎりすなく
きりぎりすきかまく暫し臀据ゑて暮れきとば
かり草もぬくめり
きりぎりすきこゆる夜の月見草おぼつかなく
も只ほのかなり

白銀の鍼打つごとききりぎりす幾夜はへなば
涼しかるらむ

月見草けぶるが如くにほへれば松の木の間に
月缺けて低し

八月一日、病棟の陰なる朝顔三日ばかり
このかた漸くに一つ二つとさきいづ

嗽(うが)ひしてすなはちみれば朝顔の藍また殖えて
涼しかりけり

三日夕、整形外科の教室の陰に手をたて
ておびただしく絡ませたるをはじめて
知る、餘りに日に疎ければ

朝顔の赤は萎まずむき捨てし瓜の皮など乾く
夕日に

四日

あさがほの藍のうすきが唯一つ縋りてさびし
小雨さへふり

彼の垣根のもとに草履はきておりたつ

朝顔のかきねに立てばひそやかに睫(まつげ)にほそき
雨かかりけり

六日

かつかつかつも士を偃(は)へたる朝顔のさきぬといへ
ば只白ばかり

鍼の如く　其五

一

八月十四日、退院

あさがほは蔓もて假へれおもはぬに榊の枝に
赤き花一つ

十六日朝、博多を立つ、日まだ高きに人吉に下車し林い温泉といふにやどる、暑さのはげしくなりてより身はいたく疲れにたりけるを僅かに長途にのぼりたる

ことなれば只管に熱の出でんことをのみ恐れて

手を當てて心もとなき腋草(わきくさ)に冷たき汗はにじみ居にけり

十八日、日向の小林より乘合馬車に身をすぼめてまだ夜のほどに宮崎へ志す

草深き垣根にけぶる烏瓜(たまづさ)にいささか眠き夜は明けにけり

霧島は馬の蹄(ひづめ)にたててゆく埃(ほこり)のなかに遠ぞきにけり

十九日、宮崎より南の方折生迫といふに

いたゞき、青島目睫の間に横はりてゐるは
しければ、此の日より醫者いたりてやか
この頃日の時化に變りたれば、心持ち居る
暇もなきに漁村のならひ、食料の蓄も
なければ

かくしつつ我は痩せむと茶を掛けて硬き飯はむ豈うまからず

酢をかけて咽喉こそにはのめ芋殻の乏しき皿に箸つけにけり

二十五日に入りて、雨は更に戸を打つこと劇しくして止むべきけしきもなし

痺れたる手枕解きて外をみれば雨打ち亂し潮の霧飛ぶ

嚙(か)みさ嚙(が)み疾風(はやち)は潮をいぶく處(ど)に衣も疊もぬれにけるかも

二十六日、漸くにして晴る、宿は松林のほとりに獨離れて建てられたるが、道も庭も松葉散り敷きてあたりは狼藉たり

木に絡む絲瓜の花も此の朝は萎えてさきぬ痛みたるらむ

おなじく松林のほとり、少し隔てて壁くづれ落ちてかつかつも住みなしたるあり、けさは殊に凄じきさまに

しめりたる松葉を竈に焚くけぶり絲瓜の花に
まつはりてけぬ

二十七日、宮崎にのがる、明くれば大淀川
のほとりを徜徉ふ

朝まだきすずしくわたる橋の上に霧島ひくく
沈みたり見ゆ

三十一日、内海の港より船に乗りて吹毛
井といふところにつく、其の日は朝の程
に鵜戸の窟にまうでて其の日ひと日は
樓上にいねてやすらふ

手枕に疊のあとのこちたきに幾ときわれは眠
りたるらむ

懶き身をおこしてやがて呆然として遠く目を放つ

うるはしき鵜戸の入江の懐にかへる舟かも沖に帆は滿つ

渚にちかく檜を掩ひて一樹の松そばだちたるが、枕のほとりいつしか落葉のこぼれたるをみる

松の葉を吹き込むかぜの涼しきに咽びてわれはさめにけらしも

二日、油津の港へつきて更に飫肥にいたる、枕流亭にやどる、禰のもと僅に芋をつくりたるあり心を惹く

ころぶせば枕にひびく淺川に竿洗ふ子もが月白くうけり

四日、油津の港より乘りて外の浦といふところへわたる、漸くにして探しあてたるはわびしき宿なれども靜かなる入江もみえたれば、もとより戸は立てしめず、閾の際に枕したれば月はまどかにして蚊帳のうちをうかがふ

蟵越しに雨のしぶきの冷たきに二たびめざめ明けにけるかも

六日、波荒き海上を折生迫の漁村にもどる。此の夜おもひつづくることありてふ

くるまで眠らず

草に棄てし西瓜の種が隱りなく松蟲きこゆ海の鳴る夜に

八日、陰晴定めなき季節のならはし、雨をりをりはげしく障子を打つ

横しぶく雨のしげきに戸を立てて今宵は蟲はきこえざるらむ

九日、再び時化になりたればまた宮崎にのがる、人のもとにて梨瓜といふを皿に盛りてすすめらる、此の地方西瓜を産することおびただし

瓜むくと幼き時ゆせしがごと竪(たた)さに割かば倘
うまからむ

十三日、漸く折生迫にもどれば同人の手
紙などとどきて居たるを一つ一つと披
きみてはくりかへしつつ

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のを
らぶ夜は憂し
むらぎもの心はもとな遮莫(さもあらばあれ)をとめのことは
暫し語らず

夜は苦しき眠りに落つるまで蟲の聲々
あはれに懐しく

こほろぎのしめらに鳴けば鬼灯の庭のくまみをおもひつつ聽く

こほろぎはひたすら物に怖れどもおのれ健かに草に居て鳴く

十四日

蝕ばみてほほづき赤き草むらに朝は嗽ひの水すてにけり

午に近くたまたま海岸をさまよふ

草村にさける南瓜の花共に疲れてたゆきこほろぎの聲

海もくまなく晴れたれば、あたりは、只一

時に日なひらきたるがごとし

鯛とると舟が帆掛けて亂れれば沖は俄かに濶くなりにけり

豐後國へわたる船を待たむと此の日内海にいたりてやどる

此の宵はこほろぎ近し廚なる菜の菜などに居てか鳴くらむ

十八日、昨日別府の港につきてけふは大分の郊外に石佛を探り汗流して歸れるに、夕近くなりて慌しく肌衣とりいだす

こころよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり

二

二十二日、博多なる千代の松原にもどりて、また日ごとに病院にかよふ

此のごろは淺蜊(あさり)淺蜊(あさり)と呼ぶ聲もすずしく朝の嗽ひせりけり

三十日、雨つめたし、百穗氏の秋海棠を描きたる葉書とりいだしてみる。庭にはじめてさけりとあり

うなだれし秋海棠にふる雨はいたくはふらず只白くあれな

いささかは肌はひゆとも單衣きて秋海棠はみるべかるらし

ゆくりなくも宿のせまき庭なる朝顔の垣をのぞきみて

秋雨のひねもすふりて夕されば朝顔の花しばまざりけり

十月一日、庭のあさがほけさは一つも花をつけず

朝顔の垣はむなしき秋雨をわびつつけふもまたいねてあらむ

病院の門を入りて懐しきは、只雞頭の花のみなり

雞頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも

十日、再び秋草のたよりいたる、萎えたるこころしばらくは慰む

苅萱と秋海棠とまじりぬと未だはみねどかなひたるべし

わびしくも痩せたる草の苅萱は秋海棠の雨ながらみむ

日ごろは熱たかければ、日ねもす蒲團引き被りてのみ苦しみける程に、もとより入浴することもなかりけるが、たまたま十八日の朝まだき、まださくやらむと朝

顔のあはれに小さくふふみたる裏戸な
あけていでゆく

浴(ゆあ)みして手拭(てぬぐ)ひゆる朝寒みまだつぼみなりそ
のあさがほは

小さき蚊帳のうちに獨りさびしく身を
横たふるは常のならはしにもこゝた我
が好むところなるにましてここは藪蚊
のおほきところなれば只いつまでも吊
らせてありけるが

幾夜さを蚊帳に別れてながき夜のほのかに愁
し雨のふる夜は

古蚊帳のひさしく吊りし綻びもなかなかいま
は懐しみこそ

三

吸入室の窓のもとに、一坪ばかり庭の砂
掻きよせて苗を挿してありけるが、夏の
日にも枯れず、秋もたけて漸く一尺餘り
になりたればいまは日ごとに目につく
やうになりけるを、十一月十一日、折から
時雨の空掻きくもりて騒がしきに

はらはらと松葉吹きこぼす狹庭には皆白菊の
花さきにけり

次の日、庭は熊手もてくまもなく掻きはらはれたれど

白菊のまばらまばらはおもしろくこぼれ松葉を砂のへに敷く

十四日、夜にいりて雨やまざれど俄に思ひ立つことありて久保博士をおとなふ

しめやかに雨の淺夜を籠ながら山茶花のはなこぼれ居にけり

俄に九度近くのぼりたる熱さむることもなく、三十日ばかりの間は只引きこもりてありければ、常に季節に疎しともおもはざりける身の山茶花の花をみるこ

とはじめてなればいま更のごとく驚かれぬるに

吸物にいさゝか泛けし柚子の皮の黄に染みたるも久しかりけり

幾時なるらむ、めざめて雨のはげしきおとをきく

松の葉は復たこぼるらし小夜ふけて廂に雨の當るをきけば

十五日、ふと彼十坪に足らぬ裏の庭を見下すに、そこにも若き木の一本はありて

ひそやかに下枝ばかりにひらきたる山茶花白くこぼれたり見ゆ

山茶花はさけばすなはちこぼれつつ幾ばく久にあらむとすらむ

十六日、このごろ熱低くなりたれば、始めて人をたづねていづ、空晴れて快し

不知火の國のさかひにうるはしき背振の山は暖かに見ゆ

ひとの垣に添うてゆく

山茶花はあまたも散れば土にして白きをみむに垣内(かきつ)には立つ

雀の好む木なればか必ずさへづりかはすをみる

山茶花に雀はすだくときにだに姿うつくしく
あれなとぞおもふ

わかき女のさげもてゆくものな

手に持てる茶の木の枝に括られて黄に凝りた
る草の花何

十九日、復たいでありく、朱欒の青きがそ
こここの店に置かれてまだ一つ二つは
殘りたらむとおもふに、梢に垂れたるは
皆既にいろづきたるにおどろく

竿に釣りて朱欒のうへの白足袋は乾きたるら
し動きつつみゆ

二十二日、觀世音寺にまうでんと宰府よ

り間道をつたふ

稲扱くとすてたる藁に霜ふりて梢の柿は赤くなりにけり

彼の蒼然たる古鐘をあふぐ、ことしはまだはじめてなり

手を當てて鐘はたふとき冷たさに爪叩き聽く其のかそけきを

住持は知れる人なり、かりのすまひにひとしき庫裏なれども猶ほ且かの緣のひろきを憾む

朱欒植ゑて庭暖き冬の日の障子に足らずいまは傾きぬ

二十五日、氣候激變してけさもはげしき北吹きてやます、ささやかなる店に蔬菜のうれのこりたるも哀れなり

うるほへば只うつくしき人參の肌さへ寒くかわきけるかも

二十六日、百穗氏の來狀に接す、寒雲低く垂れて庭に落葉を焚くなどあり

幾ばくの落葉にかあらむ掃きよせて竈には焚かず庭にして焚く

落葉焚きて寒き一夜の曉は灰に霜置かむ庭の土白く

二十九日、筑後國なる松崎といふところに人をたづぬることありてつとめて立つ、おもはぬ霜ふかくおけたるに此の如きは冬にいりてはじめてなりといふ

芒の穂ほけたれば白しおしなべて霜は小笹に
いたくふりにけり

此の日或る禪寺の庭にたちて

枳椇（けんぽなし）ともしく庭に落ちたるをひらひてあれど
咎めても聞かず
たまたまは椢の楔（くさび）をうちこみて樅（もみ）の板挽く人
もかへりみず

十二月七日、程ちかく槭をおほく植ゑたるあり、けふは塀の外に散り敷ける落葉を掃きて、松葉のまじりたるままに火をつけて燒く

そこらくにこぼれ松葉のかかりゐる枯枝も寒し落葉焚く日は

いささかの落葉が燒くるいぶり火に烟は白くひろごりにけり

夜にいりて空俄に凄じくなりたれば戸ははやく立てさせて

時雨れ來るけはひ遙かなり焚き棄てし落葉の灰はかたまりぬべし

八日

松の葉を縄に括りて賣りありく聲さへ寒く雨はふりいでぬ

朝まだき車ながらにぬれて行く菜は皆白き莖さむく見ゆ

四

大正三年六月八日、山崎をすぎて雨おほいに到る

天霧らふ吹田茨木雨しぶき津の國遠く暮れにけるかも

九日、三たび播州を過ぐ

播磨野は朝すがしき淺霧の松のうへなる白鷺の城

同二年四月十五日夕、空には朝來の雨なごりもなく、汽車はこころよく伯耆の海岸に添うて走る

そがひには伯耆嶺白く晴れたればはららに泛ける隱岐の國見ゆ

十七日、出雲の杵築にいたり大社に賽す、其の本殿の構造、簡易にして素朴なれどもしかもこれを仰ぐに彼の大國主の天

の瓊矛を杖いて草昧の民の上に君臨せ
る佛を只今目前にみるのおもひあり

八方の天が下には言絶えて嘆きたふとび誰か
あふがざらむ

十九日、よべはおそく香住といふところ
にやどりて、應擧の大作をみむとつとめ
て大乘寺を訪ふ

菜の花をそびらに立てる低山は櫟がしたに雪
はだらなり

補遺

歌會の歌

庭の隅に蒔きたる桃の芽をふきて三とせになりて乏しき咲きぬ（四月例會席上四首）

夜になれば星あらはれて晝になれば星消え去りて月日うつり行く

もののけの三つ目一つ目さはにありと聞けどもいまだ見し事のなき

木の枝にとまれる鳥のとまり居て逃ぐる事もなし鳴く事もなし（剝製鳥）

木の實はみ木の根とりくひいきながら空に昇りて神とならむかも（六月例會席上二首）

こち村とさき村のあはひしみ立てる森に祭れるうぶすなの神

日の本のますらたけをのをたけびに仇の砦は逃げて人もなし（七月例會席上三首）

躬恒等の歌をよろこぶ歌人は蛙となりて土にはらばへ

うじたかれしこめき國にわく蠅の群をみだして風に飛び散る

みほとけにささげまつりし蓮の葉も瓜も茄子も川に流しぬ（七日第二會席上）――明治三十三年――

兼題の歌

をかしといふ猿の芝居を見に行けば顔に手をあて猿が泣きけり（芝居二首）

むしろ掛けし芝居の小屋は雨漏りて雨のふる日は芝居やすみぬ

川口のゆるき流れにかけわたす橋長うして海
見えわたる（橋二首）

山川の早き流れにそば立てる大岩かけて二橋
わたす

ほととぎす竹やぶ多き里過ぎて麥のはたけの
月に鳴くなり（時鳥）

窓の外にうかがふ鬼のかくるるとかしら隠し
て角を隠さず（鬼二首）

なにをかもいたく恐れか赤鬼のおもてか青に
うちふるひ居り

國原はやみの夜空におほはれて星あきらかに
天の川流る（星三首）

山かげの桃のはやしに星落ちてくはし少女は
生れけむかも

ぬば玉の闇の夜空に尾をひきて遠つ海原ほし
とびわたる

――明治三十三年――

卽景

畑の中を庵へかよふ道のへの桑のめぐりに芋
を植ゑたり

畑の上を風の渡れば芋の葉のゆらゆらゆれて
いそがしきかも

樫の木の並立つひまに畑見えて畑のつゞきに
小松原見ゆ

垣の外になめて植ゑたる柹の木のうまし木の
實のともしきろかも

もろこしの高穂ゆるがし畑をすぎ庭の木草に
風ふきわたる

——明治三十三年——

朝顔

或日人の家にて朝顔を見てよめる

松をうゑ茄子(なすび)をつくるかたはらに朝顔はひて
垣にからめり

あさがほと葡萄の棚とあひならび葡萄の蔓に
朝顔からむ

もとあらの棚に這はせしあさ顔のいや長蔓の
しげりはびこる

この庭の朝顔きりてつなげらばさき村ゆきて
木にからむべし
棚にしてからむ朝顔その蔓のたれしところに
蕾ふくれつ
――明治三十三年――

萩

萩のはなぬける白玉ともしけど露にしあれば
とりがてにすも
ひまあらの垣にしげれる白萩のしらしら見え
て夕月のぼる

萩の上にすずめ止りて枝ゆれて花はらはらと
石にこぼるる　——明治三十三年——

松島

松島に遊び大高森にのぼりて

美しき夕なぎ見れば五百年も此海ばかり揺ら
なくおもほゆ　——明治三十九年——

姫桃

まくらがの古河の姫桃ふふめるをいまだ見ね
どもわれ戀ひにけり　——明治四十一年?——

竈山

宵に焚きてあけのまだきの灰寒きまかまど山は石白く見ゆ

——大正三年——

霰

はやり夫の太刀の悲丸鞘を離れ霰は庭の石打ちて寒し

——大正三年——

長歌

明治三十四年

橋

大王のとほのみ門と、しきます越の國内に、山はしもさはにあれども、名ぐはしその立山を、いめぐらふかたかひ河は、征箭なす水のはやければ、架けわたす橋もあらねば、郷人のいよりつどひて、かにかくに計らひけるに、その中の人の言へらく、山祇の神の命に、こひのみねぎ申して、うつそみの人の命を、そこにしも沈めてあらば、とこしへに橋はあら

むと。苟且に言ひけることを、その人の命沈めと、神よさしよさせりければ、悔ゆれどもせんすべ知らに、ひとり子とめでし少女を、手ひかひてなげき告ぐらく、命をし永く欲りせば、徒らにものな言ひそと、秩の實の父の命の、いましめと告げけることを。山吹のにほへる妹が、吾背子と相見しのちも、繭ごもり息づきわたり、背をだにも呼ぶことなけば、妹名根をかひなきものと、ふるさとに背子がおくりて、立山の山の麓の、橋のへに到りし時に。獵人の筒とり持ちて、分け入りし山の

雉子の、柴中に鳴きける聞きて、年久に言はざる妹が、言はまくの默もありせば、水底に父ありけめや、嬬戀(つまごひ)に汝が鳴かずば、さつ人に知られけめやと、打なげき叫び言ひける、科坂在古思(しなさかろこし)の少女の、古(いにしへ)にありけることを、いひつがひかたりつがひて、うつそみの今のをつつに、聞けば悲しも

ちちのみの父を悲しみもだもありし越(こし)の少女のいにしへ思ほゆ

灯

こゝろも手の常陸の海、夏麻引く海上潟と、こちごちの波の來よらふ、犬吠の埼の上に、天しぬぎ立てる臺に、常夜にてれるともし灯、曇る夜の風の吹く夜は、往きなれて通ひし船も、しれなしにえ行かぬ念へば、あやにたふとき

浮巣

五月雨のいやしきふれば、うらさびてさぶしき沼の、水配りの水の門のへより、榜ぎさかり蘆原ゆけば、邊にしづき沖になづさふ、に

ほとりの水草咋ひ持ち、搔きあつめむすぶうき栖の、風吹けば風にゆられ、波立てば波にゆられて、しまらくも安からなくに、そこにして卵子（かひこ）は生（な）りぬ、あはれその栖を水に住むものにあるから鳰どりの水草が中にその栖（す）つくらく

わすれ草といふ草の根を正岡先生のもとへ贈るとてよみける歌並短歌

久方の雨のさみだれ、おぼほしくいや日に降れば、常臥（とこふし）にやまひこやせる、君が身にいたもさやれか、つねには似てもあらずと、玉鉾（たまほこ）

の知らせのきたれ、葉垣のみだれて思へど、なぐるさの遠くしあれば、せむ術もそこに有らねど、はしきやし君が心の、慰もることもあらむと、吾がおくるこれの球根は、春邊はしげき諸葉の、跡もなく枯れてはあれども、鑛は鎔くる夏にし、くれなゐの花の蕾の、一日に一尺に生ひ、二日に二尺に延び、時じくに匂ひぞ出づる、忘れ居しごと

短歌

病をし忘れて君が思はむとこの忘草にほふべらなり

大洗の岬なる水戸侯の別莊を見てよめる歌

ころも手の常陸の國は、大海に直に向へば、見がほしきいづこはあれど、大汝少彦名の、いしづまる神の三埼は、磯みれど沖べを見れど、ならびなきはしき岬と、玉蔓たゆることなく、あともひて人もつぎ來れ、こゝにしもいほりし居らば、命も長くあらむと、大王の暇たまへば、族をこゝに聚ひて、立居て見れどよろしみ、ころ臥して見れど宜しみ、日も

足らずそこに念はし、年のごとありける公が、
行水の行きて去にきと、狂言か人の云へるに、
をと年も去年もことしも、潮ざゐの有磯の上
に、い立たせることもあらねば、玉松のしげ
きが下に、素のごと家はあれども、さぶしき
ろかも
畏きや神の三埼にうつせ貝むなしき家を見れ
ばさぶしも

蚯蚓鳴く

あらがねの土の下にて、己が世の住みかもと

むと、たまさかに凝りてむすべば、さ百合は
なそこに開くと、古ゆ今に言ひつぎ、世の中
に怪しきものと、尻のへもかしらも分かず、
はひもとほり生ける蚯蚓の、竹籰（たかわく）を手にくる
絲の、ほそぼそに鳴くなる宵の、績苧（うみを）なす長
き夜すらは、いねがてに常する吾も、やすい
するかも

鑛毒地被害民の慘狀を詠ずる歌一首竝
反歌

下つ毛の足尾の山は、まがつみのうしはく山

か。その山に金掘るなべに、かなけ水谷に漲り。をちこちの落合ふ川の、大舟の渡瀬川に、時分かず流れ注げば。その川の潴す極み。あら金の土浸みとほり。八つ子持つ芋も子持たず、蠶飼ふ桑も芽ぐまず、水田には蘆生ひしげり、くが田には萱し靡けば、安らけく住みにし民も、過ぎへなむたときを知らに、父母は阿子に離れて、壯丁はも妹に別れて、うき雲のさ迷ひ行けば。たまり水止まるものも、ありへにし家にも居かねて、煙だに下に咽べば、世の中にまさしき人の、同胞の嘆くを見

れば、いかで吾仇にはあらめやと、益良雄の鋭心起し、家わすれ身もたな知らず、國統ぶる司の門に、つばらかに聞えあぐれど。大君の任のまにまに、きくといふ司人やも、正耳はしひにけらしも、もも足らず八十たび申せど、かへり見ることもあらねば、飯に飢て恨み泣けども、すべもあらぬかも

反歌

いかならむ年の日にかも毛の國の民の嘆きの止む時あらむ

庭にある楓の木のいろ付きたるを見て
よめる

水不足（みづたらぬ）あか田くぼ田に、もとほらひすじつま
呼ぶ、蛙手（かへるで）の木々の木ぬれは、秋さればもみ
づとを言へ、みな月のけふのでる日に、ここ
に匂へる

靈藥之歌並短歌

八十綱（やそつな）をもそろに懸けし、神代にかい引き寄
せけむ、伊豆の海の沖邊はろかに、七つまで
なみ居る島の、中つ邊に宜しみ立てる、にひ

島に住みてある人の、痛付ける妹をあともひ、
船泊つる下田の浦に、しくしくに打ち寄る浪
の、おとに聞く藥師たづねて、京都邊に上り
にしかど、すべなみと告らえにければ、いく
ばくも生けらぬ命、同じくは家に死なむと、
うつせ貝容しき行きを、しづく玉おもひ沈み
て、なげきのみありし間に、いさり火の仄に
だにも、人言に聞きにけるかも、まがなしき
妹がためには、しましくもためらひ居れやと、
釣船に白帆はあげて、ただ渉り波路ちわきて、
うむ麻の總の國邊の、樹隱りの我家に來り、

藥えて歸りにしかば、しなへのみありける妹が、七日まで日にも經なくに、斧とりて分け入る山の、杉の木の皮剝ぐ如く、枕つく小衾去りて、忽ちに病は癒えぬ、かくのごとはやきしるしの、世の中にまたもあらめや、天(あめ)の隈(くま)とほつ祖(おや)より、うつそみの人の命を、救へりしかずは知らえぬ、しか故に年のは每に、かぶら菜はここだも作る、世の人おもひて

短歌

人のすることにはあれどもこきだくに蕪(かぶら)作るも世の人のため

余が家祕法を以て糵を製す、蕪菁を作りて之が料に充つ故に末節之に及ぶなり

ひしこ漬

足引の山を近みと、木隱りに家居しせれば、世のことしけ疎くあれど、雁がねの刈田さわたり、秋風の寒けき頃の、照る月の明き夜頃は、鰯引く浦にぎはふと、辟竹の籃にみてなめ、ここまでにひしこも來れ、鶉啼く畑のしげふの、しだり穂の粟とり交へ、八鹽折の酢

につけまくと、京(みやこ)さびここに吾せる、珍らしみとぞ
秋風の寒く吹くなべ竹籠にひしこ持ちて來(く)と
ほき濱びゆ

髮

十月の末母の命によりて成田山にまうで毛綱を見て作れる歌竝短歌

母刀自(ははとじ)の依(よさ)しのまにまに、鳥じもの朝立ち出で
て、下埴生(しもはぶ)の成田の寺に、夕さりにい行き到
れば、人あまたそこには滿ちて、靈(あや)しくも八(や)

棟立ちなみ、珍らしき物さはなれど、玉の輪と捲ける太綱は、いた惱む吾背がためと、眞悲しきめづ兒がためと、をみな兒の思ひしなえて、丈長のその黑髮を、利鎌もて萱刈るごとく、ふさたちて供へまつれば、千五百房八千五百房と、山のごとつもれる髮を、堅よりによりて結びて、この岡の岡の上ろに、棟引くと掛けし毛綱ぞ、下埴生にいます佛は、上つ代ゆ今のをつつに、たふとみと人の來寄れば、この綱のいやながながに、太綱のたゆることなく、後の世もしかぞあるべき、みほと

けの寺

短歌

をみな子のその丈長の黒髮を斷ちて結びし太綱ぞこれ

冬の夜

いちしばの林がうれに、風のいたくし吹けば、まげいほの廬のめぐりは、黍の稈しじにゆへども、すべもなく寒くしあるを、ぬばたまの夜さりくれば、焚木だに折りては焚かず、ともし灯を中に圍(かく)みて、新藁を繩に綯ひつぎ、

白絲を䚷(むく)に手くると、暇もなくいそしむ人の、ふけ行けば簀子が上に、うす衾引きかかぶりて、さぬらくの安しとかもよ、憂けくは知らに

登筑波山詠歌竝短歌

天地の開けし時に、瓊(ぬ)矛(ほこ)もて國探らせる、二柱神の命(みこと)の、い立たしし筑波の山は、しみさぶるまぐはし山と、常に見る山にはあれど、秋の日のよけくを聞けば、巖が根の路をなづみて、落葉吹く峯(を)の上(へ)に立てば、そがひには

山もめぐれど、眞日向ふ南の方は、品川の人江の沖も、陽炎のほのに見えつつ、をしね刈る裾曲の田居ゆ、いや遠に開けけるかも、男の神のときて干させる、白紐と河は流れぬ、女の神のいとりなでさす、み鏡と湖は湛へぬ、うべしこそ筑波の山は、時なくと人は來れども、秋の日のけふの青日に、豈如かめやも

短歌

秋の日し見まくよけむと筑波嶺の岩本小菅引き攀ぢて來ぬ

冬十二月水戸に赴く、途に佛頂山を望みて作歌並反歌

石(いし)工(たくみ)槌(つち)とりもちて、刻みける佛の山は、楯(た)なはる山の穂の上に、いなだきの秀でたる山ぞ。その山の山もとにして、諸木々の木末しぬぎて、そそり立つうちの矛杉、大枝の五百枝ひろごり、あたりには茅も生ひせず、しげりける樹にはありしを、まがつみのおすひしものか、なる神の轟くはしに、久方の天の火下り、ただ裂きに太幹裂きて、その幹のうつろも焼けば、いつしかも枯れてはありけれ、天が下

にいくらもあらじを、杣人の斧うちふりて、
太綱かけ伐りきといへば、見まく欲り思ひて
行くとも、再びもそこに見らめや、そこもへ
ば佛の山を、枯山にいま我見つる、ここだ淋
しも

反歌

とこしへに山は立てども生けるもの杉にしあ
れば枯れにけるかも

明治三十五年

鬼怒川の歌（課題春の川）

こもり江の蒲のさ穂なす、散り亂りひた降りしける、雪自物天の眞綿を、荒山の狹沼うしはく、御衣織女鬼怒沼比賣が、五百籰をかけの手繰りに、巖が根にい引きまつはし、玉の緒たいより垂らして、とどろ踏む機足とどろに、織り出づる二十尋布を、春の野の大野の極み、きぬ河の礫が上に、岸廣にはえたる見れば、あやに奇しも

二月二十五日筑波山に登りて夫婦餅な
詠ずる歌並反歌

狹衣の小筑波嶺ろは、八十尾ろに根張り足引き、峻しけくこごしき山の、山うらの山毛欅の木根踏み、巖陰の雪消になつみ、陰は欲り足なよなよに、登り立つ日子遲の峰と、さし向ふひがしの峰の、中つへを設けの宜しみ、茅がや葺く四柱いほに、煤火たき榾たきあふる、串餅をうましもちひと、ここだはたりぬ

反歌

筑波嶺に後來む人も吾が如くここだ欲るべき
串もちひこれ

三月のはじめ下總神崎の雙生の岡より
筑波山を望みて詠する歌竝反歌

十握稻ふさ刈る鎌の、燒鎌の利根の大川、川岐に八十洲を包む、丘阡枝槻千葉の大野の、
ならび居の雙生が岡に、ただ向ふ筑波の山は、登り立ち見れどよろしみ、下り居立ち見れど宜しみ、よろしみとよろぼひ立てる、くはし山見が欲し山の、筑波嶺吾は

反歌

千葉の野ゆ筑波を見れば眉長の足長山と霞たなびく

おちつばき

○

刈(かり)杙(くひ)の杙の燒生の、蘆かびにせくや水泡(みなわ)の、足白の手白の子ら、繭むすぶ絲の永日を、いそばひに蓬は摘むと、よもぎ苗あかず摘ますと、小鍬とり打つやあら墟の、さくろにな日には照らえそ、蓬摘む子ら

○

しらしらし白けたる夜の、李ちる朧月夜を、穴こもるたはれ狐か、荆づらすくすくと出て、うまいする兄彦が家の、廚なる鍋とり持ち來、柹の木の枝にそを掛け、そねの木の枝にそを掛け、よひよひにたはれすらくを、小竹撓めて罠かけ待てど、さやらねば兄彦思ほえ、その狐手捕にせむと、荆分け鋤とりい行き、腰悩むおどろが下に、くたれ木の木の根掘り來つ、狐え捕らず

○

小墾田をかへでの枝の、赤芽吹く春日のどけみ、いめのわたうつらうつらに、肱付きにまろ寢をすれば、爪引くや弓絃のひびき、ひびくなす諸羽振らばひ、虻の飛ぶかも

三月二十四日風雪を冒して遠く多珂郡に行く、乃ちよめる歌並短歌

物部の眞弓の山の、尾の上には人さはに据ゑ、谷邊には人さはに据ゑ、巖根裂く音のみ聞き

し、諏訪村の梅咲きけりと、とほ人の吾に告らせば、燃ゆる火の焔なす心、包めども包みもかねて、をとつ日の雨降る日の、きその日の雪降る日の、今日までにけならべ降れど、時經なば散りか過ぎむと、行き惱み吾はぞ追へる、とほき多賀路を

短歌

雪降りて寒くはあれど梅の花散らまく惜しみ出でて來にけり

多賀路はもいや遠にあれば行かまくのただには行かず時經ぬるかも

白帆

かぎろひの夕さりくれば、鹽つまる和田の宮居の、玉かざす少女が作は、足引の大山つみの、山彦に合ひし合はまく、青薦の麥野をよぎて、榛の木の小枝が垂穂を、あさみどり柳が絲を、春風のいさゆらさゆらに、裾引にいゆりわたれば、こちごちの谷付く水の、川しりの八十つ船女が、うはなりのねたみ思ひて、をとめらにい及しきあはむと、曳綱の曳かくを遲み、さす棹のささくを遲み、尾羽張に白帆は揚げて、日もおちず夕さりごとに、こりせ

ずとひた追ひすもよ、い及きあはなくに

いまいましさのたへがたきことありて

丈夫の腋挾み持つ、桑の弓梓の弓、弓こそは
さはにあれども、吾持つや手握細、細小竹の
へろへろ矢、天とぶ雁にさやらず、槻が枝の
鶺鴒とらむと、鶺鴒はや木ぬれはうつす、い
たづらに吾とる弓の、へろへろ矢あはれ

睡猫を見てよめる歌（課題檐）

すしたるやわぎへの檐の、丸垂木日さしが上

に、さ蕨の背くくまりつつ、いをしなすはしき二つ毛、春の夜の心うかれに、夜もすがら背を寛ぎかねて、思ひねにさぬとふものか、あはれあはれ汝が人にあらば、味酒の丹頰に笑まひ、藍染の衣きよそひ、ほとほとに戸は叩かむを、夜もすがら背を寛ぎかねて、ここにしもさぬとふものか、二毛猫汝はも

詠蛤歌

うまし子をうみ那須山の、羅蒸すやゆづ岩村に、あり立たす石人男、波の穂ににひづま寛

ぐと、告るなべに潮沫別きて、うむぎ比賣きさかひ比賣と、ならび立ちみ合ひし時の、弟媛の心ねぢけに、堅繩の日細綱に、兄媛をし二十巻き沈け、埴染の衣にほはし、獨のみ山踏む時に、その山の底ひ搖らびて、天遙に火立ち騰らひ、巖根木根ひた燒きしかば、うまし彦石人男、弟媛と共にみ失せぬ、うむぎ比賣和田つ水底に、背を念ふ心は止まず、凝り鹽の辛くのがれて、沾衣あぶりもあへず、燒山にた走り到り、ひた土にこひ伏しまろび、訴へ泣き叫び悲しみ、弟媛が焦がへし灰に、

裳の裾の垂鹽注ぎ、搔き抱き塗らひにければ、えをとことよみ歸らせる、吾背子と手たづさはりて、そこをしも住み憂の山と、八つ峰越えそがひの山の、鹽谷にしすみかま探り、蛤はも堅石なして、堅石はうむぎの如も、化り化りていや長に、こもりいますはや（鹽原の山中蛤の化石を産す故に結末之に及ぶ）

渡舟

下ふさ利根川のほとりなる今村の引渡しといふをわたりてよめる

さき岸にい杭を立て、こち岸にい杭を打ち、い杭に繩とりかけ、つなげる舟の、おもしろのあな舟はや、繩引けばここにより來、繩引けばそこによらくと、吾引きわたる伊麻村の穿江(ほりえ)、

茂り

木兎もて鳥とることをよめる歌

垂乳根の母が桑つみ、蠶飼(こが)ひすとつくれるかごの、さき竹のしじにさし交ふ、五百枝槻もとべをぐらく、繁らへる森のはたてに、鳥網

はり木兎据ゑ待てば、木ぬれ行く鳥のむれ、さへづるや鶺鴒のむれと、目叩く木兎あなづらひ、おのが尾をさやるを知らに、おのが羽をさやるを知らに、枝うつりいより亂らひ、とよもせるかも

自像に題す

梁戸といふところの土をとりて自ら吾型をつくる

いくみ竹梁戸の坂の、埴とりてつくれる型、
目しりはゐにしだの木の、垂れたるや吾目ら

かも、口もとは騰波(とは)の湖の、眞菰なすまばら
の髭、その髭はやなき

鳥居

浪逆の浦より息栖を過ぎてよめる歌竝
短歌

ひたちなる浪逆(なさか)の浦は、荒海なす浪のさわげ
ば、薦槌(こもづち)の往き交ふ舟の、舟人のまもりのた
めと、うなじりの小門(をど)にまつれる、八咫鳥息
栖の宮は、みなそこゆ八尋の柱、太知れる鳥
居が下を、忍穂井の水と喚ばひて、さす潮の

さして引けども、ひく潮の引きてさせども、わく水の淡くたたへて、石上(いそのかみ)ふるのむかしゆ、ありさりし甕のへみれば、女の瓶は深くこもらひ、男の瓶はおほにしあれば、つばらかに見むと思ひて、掻き鳴すやこをろこをろに、竿とりに探り見るべく、かしこきろかも

短歌

小鹽井の鹽井の水にあり立てる息栖のとり居みるがたふとさ

茄子

かねてより土かへおきたる十坪ばかりのところへ瓜茄子などを作りて

瓜つくり茄子つくりすと、瓜の葉は蟲はむ故、竈なる灰とりかけ、茄子の葉は日にしぼむ故、楢が枝を折りて翳せば、くく立ちに茄子はさかえ、下ばひに瓜はひろごる、ひろごるや蘗床の上に、枕なす瓜もよけども、いとはやもなれる茄子の、尻太に照れるを見るが、めづらしきかも

人の子をあげたるをよろこびてよめる歌

鍬持つ手土につくまで、耘(くさぎ)るや畠の殖蒜、殖蒜のうらべにむすぶ、その玉の似てをあれし子、平らけく安くありこせ、父母のため

あまだれ物語抄

いまは昔からたちのかなひことなむ呼べるしれ人ありけり、くさぐさのことにかかづらひければ知り人あまた出できにけり、いつのころにかありけむ、法師ひとりゐてきにけるが、またなきひじりにて在しければ、よろづのこ

とわきまへあきらめずといふことなし、さみだれの雨ふりつづきて、いとつれづれしきに、この法師かひなうちさすり脛かきなでなど、ことごとしうしてありけるが、いかで人みなのために吾ひめ力こころみてむなど、きこえくるほどに、鎌とり鍬うちふりて、いばらづらさくさくにきりひらき、林つくりなむとさまざまの木などおほしけるを、ありがたきひじりの行ひかなといやまひかしこみけるに、なべての木ことごとく木末を下にしてぞさしたまひける、心えがたく思ふものから、人々ただもだしてのみぞありける、ここにおなじ縣の片ほとりに住みけるなにがしの小さ人といふものありけり、心おろかなりければ、法師のこと

どもさらさらに知らずてのみありき、かやまのまなかひまろといふ人いやとほになりけるが、はろッばろにきこえければ、小さ人ききおどろきて心あわただしうさぐり見て、小さ人がよめりける

あがたちよ吾住むあがた、いばらづらい刈りひらき、ほふしのなすや手わざを、上行くとあせこえい行き、からからに蛙はなき、下行くと穴穿りいゆき、ころころに螻蛄ははやす、けらだにもしかこそはやせ、蛙だにかくこそなけ、吾はもや小さ人、吾耳はかけ樋の小筒、そこなしにたまらぬかも、人言はとまらぬか

も、しかれこそ知らずありけめ、小林に入りて見まくと、入り見まくよりしよらめや、逆生(さかなり)のをはやし

茸狩をよめる歌竝短歌

筑波嶺は面八つあれど、的面(まとも)は杉深み谷、背面(そとも)は笹深み谷、東(ひむがし)は巖立つ峰と、峰の上は攀ぢても見ず、谷のへは探りても見ず、酒寄の青嶺が下を、和阪の吉阪と別れて、つどひくる少女をとこの、立ちならし小松が根ろに、茸狩るといそばひすもよ、秋の日をよみ

少女子の小松が根ろに茸狩ると巖坂根坂踏みならすらし

八月廿九日、筑波のふもとへ行く、落栗のいや珍らしきをよろこびてよめる

たたなづく青垣よろふ、筑波嶺の裾曲の田居は、廿稲の十握に實る、八十村の中の吉村は、なぐるさの遠くしあれば、足毛には玉ちるまでに、汗あえて吾きて見れば、思はぬにみあへつしろと、めづらしき栗にもあるかも、小林の木ぬれになるは、青刺のまだしきものと、

とりとみぬ秋のまだきに、ここにたふべぬ
あしびきの山裾村に秋きぬと栗子姉子はかね
付けにけり

八月三十日、夕、きぬ川のほとりを歸る
に幼子どものむれ遊べるを見てよめる

青鉢の葱を折り、袋なす水を滿て、うらべに
は穴をあけ、その穴ゆさばしる水を、おもし
ろといそばひすもよ、白栲のきぬの川べに、
夕さりにつどへる子らが、いそばひすもよ

壬寅の秋、歌の上に聊か所見を異にし、
左千夫とあげつらひせるころ左千夫に
おくれる歌

みづみづし粟の垂穂の、しだり穂を切るや小畠の、生ひ杉菜根の深けく、おもほゆる心もあらねど、吾はもや相爭ひき、しかれども棕櫚の毛をよる、繩のはしきかり居りとも。またあはざめや

山菅のそがひに向かば劍太刀身はへだてねど言は遠けむ

上總行二首

九月五日、埴谷の杉山見に行きて

赤阪は鎌わたらず、小芒のおどろもゆらに、蛇ぞさわたる、蛇わたる山の赤阪、行きがてぬかも

六日、八街原を歸りくるに波の音きこえければ

から籾をすり臼にひき、とどろにきこゆるものは、とほどほし矢刺の浦の、波にしあらし

狂體十首

萬葉集は壯大なる作者もさまざまに、形體もさまざまなるものから、仔細に觀むことは容易いことに非ざれども、一言にして之を掩へば、句法の緻密にして音調の莊重なるはその特色なり、少くとも佳作と稱すべきものは大抵これなり、

記、紀の歌は萬葉の素をなしたるものなれば相似たるは固よりなれども、その間自ら異りたるものありて存す、句法の如き萬葉の緊りたるに比すれば寬かに、音調の如き萬葉の重

きに比すれば朗かなりといふの當れるを思ふ。而して共に措辭の巧妙にして曲折あるは規を一にす、之を譬ふるに萬葉の歌は壯夫の弓箭を手挾みて立てるが如く、記紀の歌は將帥の從容として坐せるが如けむ、神樂、催馬樂はこの二つのものに比するに、分量に於て、價値に於て、同日の談に非ざれども、遙に悠長にして、遙に卑近なる所、記、紀、萬葉の以外に長所の存するところにして亦一體なり、要するに萬葉の歌を眞面目なりとすれば、記、紀の歌は溫顏なるが如く、神樂、催馬樂は卽ちおどけたるが如し、

神樂、催馬樂には折り返し疊み返したる句多し、これ曲に合せて謡ふものなりといへばな

らむ、調子のゆるやかなる所以なり、その調ふや必ず雅撰にして超世の思ひあるべしと信ずれども、實際にしては未だこれを知らず、單に普通の歌として見るに過ぎざれども、小研究に値すべきものなからず、五言七言の句以外に三言四言六言八言九言も自由なるべく、漢語俗語を用ゐるもよく、調和すべきが如き、また奇警なる語句を挾むところあるが如き、他の類に見るべからざるものなり、只そのこれをいふものなきは、注目するものの少きに因るならむ、

狂體十首は普通の歌として視たる神樂、催馬樂の體を參酌して試みに作りたるものなり、研究の足らざるや、その體の完全なるものと雖

も成ること難からむ、ましてこの體の果して發達生長せしむべきものなりや否や疑はしきものなれば失敗に歸したるは勿論のみ、されど予はその成るべきか、成らざるべきか自ら悟らざるまでは折々に作りて見むと思ふ、晦澁卑俗なるの故を以て斥けられざれば幸なり、

その一

穭田(ひつぢだ)におり居の鴫、しぎつき人(と)つき網もち、とほめぐりいや近めぐり、めぐれども羽叩もせず、鴫はをらずや、鴫は居れどかくれて居りと、おのれ見ゆらくを知らに、稲莖に嘴を

さしいれ、さし入れてかくれて居りと。網でとられきや

その二

おほ寺の榎がうれに、このみをばとりてはまむと、網かけてのぼりけむや、梯かけてのぼりけむや、はしもかけずつなもかけずて、なにをしてかよぢけむぞ子や、おりこやと母が喚べど、このみはみおりてもこぬや、父がよばばおりや

その三

水づくや稲の朽田に、ひれふりてあそべる鮒を、筌(うべ)おきてとらばよけむや、叉手(さで)さしてすくひてとらむ、しかれども叉手をさせば、田をこえてにげて行くや、畔放(あはな)ちてたれかおきけむ、吾田の畔を

その四

殖栩くにぎがしたに、芒刈るをとめ、なが刈らせこそ、春野の雉子、あすからはかくれて逢はむや、あはむやきぎす

その五

葱つくりは灰こそよき、藁灰や粟がらの灰、
黍稈の灰もこそよき、しかれども竹の灰は、
まことぞも葱は枯らす、竹やくなゆめ

その六

芋の子の子芋こそ、九つも十もよけれ、とし
ごとに子もたるをみな、子はもたせこそ盥の
そこを、一つうち二つうち、三つ四つや五つ
六つうち、七つうたばとしの七とせ、へだて

てぞ子はもつらむや、八つうたば八とせや

その七

葦邊には羽をあらうて、羽あらうてわたる棹雁、棹もちてここにおちこ、吾田のや刈束稻、馬に積み車に積み、そのあまりは扐にかけて、もて行かむに扐もがも、その棹もちこ

その八

法林寺の佛の首は、雨もりておつればつぐ、鷲のくび木兎のくびも、かたみ換へ接がばつ

ぎうるや、そのつぐは生麩わらび粉、そくい
ひつのまたいせのりもあれどえつがずや、に
べにかはこそ付けばとれぬもの、その膠はこ
とひの牛の、さ涎のこりてなるちふ、まこと
しかなりや

その九

篠原やしぬをためおしためて罠をつくり、
しりからは籾はくはえず、さきから籾をくは
むと蒿雀ひよどりや、ひたきも取れてあらむ
と、こはや足をはさまれて、はさまれて居る

鼠や、をばやし小溝の鼠、みづ田くが田の鼠は、みしねくひ麥くふ、きやう鼠はつか鼠、いへなる鼠は戸も柱もくひやぶれど、ひるは梁にかくる、大宮の老鼠、わなにもかからずて、よるはかくれてひるいづる、老鼠や

その十

いなだきをなからに剃り、そりいなみいたも泣く子や、洟（はな）ひるや木でのごはむや、竹で拭はむや、さらさらに利鎌に刈りて、萱でのごはむ

『馬醉木』に題する歌竝短歌

うちなびく春の野もせに、とりよろふしどみの木と、馬醉木（あしび）とをありとあらずと、非ずとは人はいへども、ありと思ふしどみが花は、いつしばの落葉がしたに、ふし芝のかれふがなかに、馬の蹄ふりはふりとも、利鎌もて刈りは刈りとも、しかすがにしじににほひて、うらもなく吾めづる木の、まぐはしみ吾みる木ぞ、しどみの木あはれ

短歌

春の野にさかりににほふしどみの木あしびと否と我はおやじと

春の野にい行かむ人しいつくしきしどみの花は翳してを見らめ

雉子なく春野のしどみ刺しどみおほになな觸りそその刺しどみ

わが知れる三浦氏は眞宗の僧なるが、五月の初に男子をうみければ喜びによみて送りし歌

栗山や佛の寺の、小垣外に麥をまき、土かふ

や麥の穗の、いちじふくほにいでまくの、はしきかもその子

蕨眞が女の子を生みけるとおぼしくて左千夫が歌をよみけるを見てよみける歌一首

いもの子が蠶室をたて、壁に塗る埴谷の山の、松がさ小がさ、はしきやし小松がうれに、なりなりてつらになるちふ、まつ笠小笠、

まつかさ集　四首

七月廿六日、左千夫君百穂君と共に雨を冒して筑波山に向ふ、越えて廿八日予之を予が家に招く、途に騰波の湖を渉り大木より下妻といふ所を過ぐるに鉢植のうつくしきをおきたる家あり、さし覗きて見れば針の師匠の住む家にて少女どもあまたならび居たれば戯れに作りたる歌

槻の木の大木の岡の、ひた岡に小豆をまき、
小豆なす赤ら小女を、立ち返りよくも見なく
に、けだしくも心あるごと、人見けらずや

予が家に盗人の入りたる穴をもとの如くふたがずありしを左千夫君の見とがめければよみける歌一首

はしきやし騰波の淡海の、水くまりの穿江があすれば、葦邊にや穴をつくり、蟹こそこにはひそめ、ひそめども手をさし入れて、搔き探りとるとふものを、盗人のきたち窺ひ、かくのごと壁はゑりしか、すむやけく去にけるものの故、とりがてにあたらしきかも、穴はもあれども

二十九日、けふは歸らむといふ左千夫君をおくりて椚林の中をさかゐといふ所へ行く、ひた急ぐ程に左千夫君おくれがちに喘ぐさまなれば、戯れてよめる歌

赤駒の沓掛過ぎて、楢の木の生子を行けば、萱村に鳴くやよしきり、よしきりの止まず口叩き、足惱むとひこずる君を、見るがわぶしさ

左千夫君予より重きこと七八貫目、予が先立ちて行くごとにいつも我は七八

貫目の荷を負ひたるが如し、君にそれ程の荷を負はゞ、めなばいくばくもえ行じと、左千夫君の旅行くとだにいへば日にいくたびとなく、いひ戯るるをききてよめる歌

赤駒の荷をときさけて、七秤八秤もちて、おひ持ちて我をば行けと、ひた走せに走せても行かむを、から臼なすふとしき君が、ほほたぶら秤にかけ、しりたぶら秤にかけ、七はかり八はかりかけ、切りそけて我に負はしめ、負はしめもいざ

佛の山を過ぎてよめる歌並短歌

佛の山は常毛二州に跨る、阪路險惡、近時僅に車馬を通ず、往昔の世山麓に浪士あり、四郎左衛門と稱す、人を殺し財を掠むること算なし、一女あり母を失ふ、四郎左愛撫措かず、女長じて容姿溫雅、擧止節有り、竊かに父の爲す所を憂ひ、しばしば泣いて諫むれども聽かず、一日秋雨蕭々黄昏に至りてやまず、女乃ち決然として起ちて裝を旅客に變じて過ぐ、四郎左悟らず、遙かに射て之を斃す、其走つて嚢中を檢せんとするに及び哀痛悲慟禁ずること能はず、剃髮して佛門に歸し、あまねく海內の名刹を周遊し、還りて石佛を路傍に建つ、

大さ丈許、今に存せり、後四郎左天命を全うして佛の山に歿す、而して涙嚢つひに乾くに至らざりきと云ふ、

よねをしね石田刈り干す、片庭の山裾村ゆ、下つ毛にこゆるみ阪の、たむけぢの佛の山に、いにしへにありけることと、耳たえず我聞くことの、麓べに住みける人の、弓箭もち日にけに行けど、ほろろ啼く雉子も射ず、萱わくる猪も射ずして、人くやと潛めるみちに、秩のみの父が待つ子も、柞葉の母が待つ子も、たひらけく命全けく、こえ果つることもあら

ぬを、藁蓆しけこき小屋に、櫨の實の獨りもり居る、をとめ子の藍染衣の、染絲のさめはつるまでに、うち嘆き訴へいへども、かへりみる心もあらねば、眞悲しみ思ひ定めて、世の人のなげかふことを、我だにも死にてありせば、留むべきこともあらむと、父が行く佛の山を、草枕旅行くごとく、たどり行き臥(こ)やせる時に、盗人に在りける父や、黄金にも玉にもまして、惜みける己が眞奈子を、かからむと思ひもかけねば、叫びをらび心も空に、負征矢の碎くるまでに、櫨(はじ)弓(ゆみ)の弦たつまでに、

搔きなげく思ひついりに、後つひに心おこして、建てにける佛の石の、朽ち果てぬためしの如く、うつそみのいまの世にして、この山を過ぎ行く人い、うれたみと聞きつぎゆけば、天地のながく久しく、かたり嗣きめやも

短歌

劍太刀しが心より痛矢串おのが眞名子の胸に立てつる

郷に歸る歌

草枕旅のけにして、こがらしのはやも吹けれ

ば、おももちを返り見はすと、たましきの京を出でて、天さかる夷(ひな)の長路を、ひた行けど夕かたまけて、うす衾寒くながる、鬼怒川に我行き立てば、なみ立てる桑のしげふは、岸のへになべても散りぬ、鮭捕りの舟のともしは、みなかみに乏しく照りぬ、たち喚ばひあまたもしつつ、しばらくにわたりは超えて、麥おほす野の邊をくれば、皂莢(さいかち)のさやかにてれる、よひ月の明りのまにま、家つくとうれしきかもよ、森の見ゆらく

反歌

太刀の尻さやに押してるよひ月の明りにくれ
ば寒しこの夜は

明治三十七年

戯れに萬葉崇拜者に與ふる歌竝短歌

筑波嶺の裾曲の田居も、葭分になづみ漕ぎけむ、いにしへに在りけることと、あらずとは我は知らず、おそ人の物へい往くと、獨行かば迷ひすの、二人しては往きの礙(さは)らひ、妻の子が心盡して、籾の殼そこにしければ、踏みわたる溝のへにして、春風の吹きの拂ひに、籾の殼水に泛きしを、そこをだに超えてすすむと、我妹子が木綿花つみて、織りにける衣

も濡れて、泥にさへいたく塗れて、泣く泣く
に歸らひにける、おそ人とこを聞く人の、豈
嗤はざれや

短歌

萬葉は道の直道しかれども心して行けおほに
あらずして

萬葉は兒の手柏の二面に三面四面に八面に見
よ

藍染の衣きる人は藍の如ひいでむとこそ心は
あるらめ

筍のひでもひでずも萬葉の關を超えて外に出

でざめや

明治三十七年一月三十一日長妹とし子一女を擧ぐ、長歌一篇を賦しておくろ、篇中の地はとし子が居住に接せり、歌に曰く

朝月の敏鎌つらなめ、馬草刈りきはふ處女の、朱の緒の笠緒の原の、したもえの春さりあへず、やすらけくあれし女の子は、垂乳根の母の乳房を、時なくと含む脣、脣のつつめる奥に、飯粒なす白歯かそけく、足手振り笑むらむさまを、家こぞり待つらむものぞ、はや大

にあれ

反歌

小夜泣きに兒泣くすなはち垂乳根の母が乳房の凝るとかもいふ

くさぐさの歌

滿洲

落葉松と樅とをわかず。はひ毛蟲林もむなに、喫み竭し枯らさむときに、鵲はい群れて行きぬ、海渉りゆきぬ

馬賊

馬賊は魯の仇敵なり劉單子はその統帥にしていま長白山中に匿るといふ

白橿の落葉散り、散り亂れど掃く人なみ、我たち掃く劉單子々々々、箒伐り木を伐り持ちこ、掻き掃きて川に流さむ、流さむを見に來

旅順

をおなきや嚢の鼠、ふくろこそ嚙みてもやれめ、そびらには矛迫め來、おもてには潮沫湧く、穴ごもり隱らむすべも、術なしにあはれ

栲衾新羅の埼の、あまり埼、いひき持ち來、
悉に引かざりしかば、常にたえずさへぐ韓國、
ことなぎむいま

儁太

阿部比羅夫誓つきなめ、犧ひゆきしからふと、
鰭つ物いむれておれど、我獲ねば人とりき、
いまよりは海の眞幸も、我欲りのまま

變調三首

一

狹田の、稻の穗、北にむき、みなみに向く、
なにしかもむく、秋風のふきて

二

粘土を、臼に搗く、から臼に、とどとつく、
すり臼に、籾すると、すり臼を、造らむと、
土をつく、とどとつく

三

黍の穗は、足で揉んで、蓆に干す、胡麻のか
らは、藁につかねて、竿に干す、さぼすや、
秋の日や、一しきり、二しきり、むくどりの、
騷だち飛んで、傾くや、短き日や

海底問答

二月八日の眞夜中より、九日にかけて旅順の沖に、砲火熾に交れば、千五百雷鳴り轟き、八千五百蛟(みづち)哮え猛び、世界は眼前に崩壞すべく思ふばかり凄しかりき。碧を湛へし海水に、快げに、游泳せる鱗(いろくづ)は、鰭の運動も忙しく、あてどもなく彷徨ひぬ。昆布鹿角菜のゆるやかに、搖れつつあるも、喫驚と、恐怖のさまを表明せり。かかりしかば海の底に、うち臥し居たる骸骨ども、齊しくかうべを擡げなが

ら、うつろの耳を峙てしが、ばらばらに散亂せる白骨を綴り合せむと、遽しく手の骨を探すもの、脚の骨を探すもの、頭蓋骨を奪ひあふもの、混亂の狀を呈せし後、ゆるやかに動搖する水のまにま、ふらふらとして立ちあがり、物待ちげのさまなり。偵察に出でし骸骨は、昆布の根をば力草に、骨と骨との離るるまで、ゆき戻りきつ怪しきものの、落ち來りたるを報告せり。導かるる儘に骸骨は、ふらふらとして隨ひ行けば、そこにあたらしき死屍ありて、顏もわかぬまで焦げ煤けし、肉破れ骨の

あらはなる、腥きばかりならびたり。骸骨は、うち寄りて肩を抑へつつ、『白皙なる容貌に、棕櫚の毛を、植ゑしが如き鬚もてる、君はいづこより來りしぞ。この騷擾に關係あらむ、語れ』と促しかけたれど、應へもなきをもどかしげに、『さらば我まづ語らむ』と、言ひ放ちて、顎の骨の、歪みたるをおし直し、『我等はもと旅順にありて、只管天險の比なきを恃み、黄海の水あせぬとも、この戍陷るべからずと、心竊に驕りしに、料らず背面の攻擊にあひ、遁ぐべき路を失ひて、悉く海に溺れ果

てぬ。そをいまの事に思ひしに　はや十年の月日は經ぬ。まこと海底にすまひすれば、寒暑はさらに辨へざりき』かくいひてとりおとせる肋骨を拾ひ揚げながら、『波打際に浮き寄りしは、想ふに土中に葬られむ、我等はすなはち海の底に、白骨となりぬ。然れども、我が安心を人は知らず。骸骨は命死なず。骸骨は飢うることなく、睡眠を欲せず。病を知らず。未來永劫にかくの如く、敵の迫害にあふこともなし。樂しからずや骸骨は』いひさして骸骨はまた、『いづこより來しぞ、語れ、君、

昨夜よりの騒擾を、はやかたれ』と搖り動すに、死屍は口を開かむとすれば、海水忽ち入り塞きて、苦しげなるを、骸骨は、『陸上に在りしと海中とは、すべて自ら異れり、されば しづかに物いふべし。唯骸骨は自在なり。骸骨の構造は海にありて、すべての運動に適したり』死屍はすなはち徐ろに、『我は露西亜の水兵なり。昨夜旅順の港外にて、恢復の見込なきまでに、我が軍艦は擊ち破られ、我等も見るが如くなりぬ。談話の苦しきこと限りなし、その他はすべて想像せられよ』やうやく

これをいひ畢れば、『狀況はほぼ知悉せり。されど露西亞は强國なるに脆からずや』と訝り問へば、『我等が國を强國といへど、恫喝を以て誇るのみ、世界の人怯懦にして、我が暴戾を制せむとせず。義憤にあへばかくの如し』骸骨は首肯きて、『我等も嘗て世界を欺き、眠れる獅子といひ觸ししが、假面はつひに剝がれたり。弱きものと弱きもの、君等と我等と睦び居らむ。我もむかしは孔雀の尾を、飾りし軍帽嚴しく、尖のひらきたる劍を握り、進むには必ずしりへに立ち、退くにはさきに立

ちたりしが、かく骸骨となりたれば、孰れを孰れと分き難し。まこと貴賤も貧富もなき、自由平等の樂天地は、はじめて茲に發見すべし」死屍は聞きて嬉しげに、『好誼ある君達かな、さらば我も語るべし、稍物いふに馴れしごとし。我が艦隊の長官は、白銀の如く輝きたる、二尾の髯を胸に垂れ、風采すぐれし老將なれど、昨夜夫人の誕辰に會ひ、部下を率ゐて市街に上り、觀劇に耽りしその隙に、あはれ突撃を蒙りぬ。我等もさまで弱きにあらねど、敵の勁きこと比なきなり」骸骨は珍ら

しき物語を聞き、『君語れ、またさらに語れ、我等はもと酒煽り、婦女子を捉へ辱めしが、いま無欲なる骸骨となりては、徒にそを悔い居るなり』死屍は意を得しさまに、『我等が好みもかくのごとし。強姦奪掠憚らねば、市街の商人は武裝して、我が暴行を防がむとす、されど君責むる勿れ、我等が一ケ月の給料は好める露酒の一瓶を、傾け盡すにも足らざるを』骸骨は話頭を轉じ、『たまたま潮の滿干により、陸地近く行きみれば、旅順の砲臺は露西亞の手に、經營されし如くなれど、防備は

寸隙もあらざるや』『我が恫喝の特性は、ここにもよく顯れたり。兵糧の運輸乏しきに、兵勇もさまでおほからず』骸骨は小首を傾け、『憐むべし、陸上の兵はまた、我が運命の如くならむ』骸骨のいひも竭きざるに、死屍は脣なほ青褪め、『さらばわれ守備の兵にはやく告げて去らしめむ』と鹹水なればかろがろと死屍は泛びあがりしが、少時にしてまたもどりぬ。骸骨はみな齊しく、『水に沈みし者時をふれば、一たび必ず浮べども、死屍は再び人間に還ること叶はぬなり。人間の死を恐るるは、

骸骨の慰安を知らねばこそ。我が腦髓は空虛なれば、思慮も考察も公平なり』死屍は未だ骸骨の言を了解しえぬさまなれど。感謝の意を以て握手せしが、俄に眉をうち顰め、『いかに痛きものぞ。君が手は、』骸骨は思はず失笑し、『柔かき手もて握れる故、我等が手は痛からむ。されば君記憶せよ。一日過ぎなば君が手は、ふとしくならむ、その時は、骸骨はなほ痛からむ。二日過ぎ三日過ぎなば、さらにふとしく、更にまた、痛かるべし。それよりは、體軀はますます糜爛して、癩病の如く見

ゆるならむ。魚族は爭ひてつつきはじめむ。かくて唯白骨とならば、君が衣服をつけしさまは、いかに不思議に見ゆべけむ。その時よりぞ骸骨の、眞味を解しはじむべき』うち語りて骸骨は『陸上の兵遠からずあと追ひこむ。それまではこころしづかに待ち居らむ。骸骨は世に拘らず』といひ畢りて素のごとく、死屍横はる傍に、ばらばらになり打ち臥しぬ。

變體の歌

一

炭竈を、庭に築き、二つ築き、たえず燒く、
廐戸の枇杷がもと、搔き掃きて炭を出す、雨
降れど、雪降れど、菰きせて、濡らしもせず、
眞垣なる、棕櫚がもと、眞木を積む、粗朶を
積む、柏の木、櫟の木、そね、どろぶの木、
くさぐさの、雜木も積むと、いちじくの、冬

木の枝は、押し撓めて見えず

二

炭出すや、匍匐ひ入る、闇き炭がま、鼻のうれ、膝がしら、えたへず、熱き竈は、布子きて入る、布子きて入る、熱きかま、いや熱きは、汗も出でず、稍熱きかまぞ、汗は流る、眼にも口にも、拭へども、汗ながる汗ながる

三

萱刈りて、篠刈りて、編むで作る、炭俵、炭

をつめて、繩もて括る、眞木ゆひし、繩を解
きて、一括り、二括り、三括りに括る、大き
俵、小さ俵、左から見、右から見、置いて見
つ、積むで見つ、よろしき炭、また燒いて、
また燒き燒く

四

炭がまに、立つけぶり、陶物の、管をつなぎ、
干菜つる、竹村に、をちかたに、導けば、を
ちかたに、烟立つ、夜見れば、ふとく立ち、
日に見れば、うすく立ち、白烟、止まず立て

は、竹の葉は枯れぬ

五

眞木伐りて、炭は燒く、炭燒くは、櫟こそよき、梔を、つゝき破りて、染汁に、染めけむごと、伐り口の、色ばみ行く、眞木こそよき、櫟こそよき

六

疱瘡やみ、鼻がつまれば、枳椇、實を採り來、ひだりの、孔にさし、みぎりの、孔にさし、

忽ちに、息は通へど、炭竈の、烟噴き孔、土崩えて、塞がりてありしを、知らずと燒きし、かかり炭、いぶり炭、へつひには、火が足らず、火鉢には、烟立つ、いぶり炭、かかり炭

鬼怒沼の歌

上

脚にカルサン肩に斧
樵夫分け入る鬼怒沼山

藤の黄葉に瑠璃啼きて
露冷けき樹の間を出で
薄に交る楉の栗
上枝の毬に胸を擦る

黄苑はたかく咲きほこり
せむのうい花朱を流す
たをりの草に朗かに
白銅磨く湖の水
山の秀ゆるく四方に遶り
まどかに覆ふ秋の天

桔梗短くさき浸る
汀に寄らす天少女
玉松が枝に領巾(ひれ)解き掛け
湖水に絲をさらし練る

燃ゆるが如き絲引けば
紅うつくしく澄める水
白絲練れば忽ちに
たたへし水は白銀の如
青絲解きて打ち浸せば

瑯玕にほふ床の石

七彩絲と管に卷く
小籰の絲を引き延へて
十二の筬に機足踏む
十二の櫛の目潜き

諸手の貝梭の往きかひに
衣手輕くさゆらぐや
譬へば霧のさやさやと
山の梢を渡るごと

妙(たへ)なる機(はた)の聲を慕ひ
擔(にな)ひし斧を杖づきて
我を忘れて聽く樵夫
風鐸(ふうたく)遠く野にひびき
落葉が下に水咽ぶ

八十(やそ)尋(ひろ)錦(にしき)巻き抱き
迎ふる雲の穂に乘りて
振りかへりみる鬼怒山媛
はじめて仰ぐ天女の面わ

御衣も御髪も悉く
黄金の光眼を射る

黄雲ながく尾を引きて
黄金の激漪湖に搖り
金線繫りぬ玉松の葉
掌大の花咲き滿ちて
花悉く金覆輪

花瓣重く傾きて
甘露の水の滴るを

啜りて醒めぬ悲しき樵夫
ふとしき樫の柄も朽ちて
大地に斧は錆びつきぬ
身を沒したる雜草に
穗向の風の騷立ちて
我を駭く湖畔の夕

下

秋の朝雲あさ燒くる
眞日の光の奇異しくも

あめつちなべて黄變して
草もゆるがぬ日を一日

暴風来りぬゆゆしきかも
大樹を摧き石を飛ばし
八つ峰嶮しき鬼怒沼山
争ひかねて嘯かむとす

山ふところに吹き付くる
雲のちぎれの雨に凝り
沛然として降る三日

土洗はれて山瘦する
どうどうとして石相搏(う)ち
底鳴り震ふ水の勢(きほひ)
相交はれる山の尾も
押し諸(もろ)向(む)けて激(たぎ)ち去る

剩雲いまは收るや
見る目悲しきふところに
うつしく殘る家一村
恐怖に籠る樵夫が伴

竊にいたむ人の身の上

萱の茂りを刈り燒きて
すなはち作る稗の穗を
七たび伐りぬ山の秋
落葉に拾ふ橡の實を
碓にくだきて澤にひて
七たび造りぬ橡の味噌

鬼怒沼山に斧とりに
ゆきて聞えぬ人を悼み

秋さり毎に物を供へ
まつり營む人のまこと

蔓の黄葉を眞探りて
おどろがさ枝(え)に薯蕷(いも)を掘る
霜に赤らむ梢の柿
澁きを榾の火に燒きて
人のまことは物を供へ
まつりいとなむ淋しき夕

蓬髪ながく肩に埀れ

垢つく衣朽ちたるに
窶れしかひな杖つきて
柄もなき斧の錆びたるを
葡萄の蔓に拔き負ひて
よろぼひ渡る藤の棧橋
あやしむ人をあやしみつつ
樵夫はいまぞ還り來れる

明治三十九年

女あり幼にして母を失ひ外戚の老婦の家に成長せり、生れて十七、丹脣常に微笑を湛へて嘗て憂を知らざるに似たり、之を見るに一種の感なき能はず、乃ち爲に短篇一首を賦す、

母があらば、裁て着すべき、鬼怒川の待宵草、
庭ならば垣がもと、雜草もまじへずあらんを、
淺川や礫がなかに、葉も花も見るにさびしゑ、
眞少女よ笑みかたまけて、虚心たぬしくあら
めと、母なしに汝が淋しゑ、見る心から

麥踏む農婦を見て詠める歌

箒もて打たば捉るべき、蜻蜓なす數なきものに、己さへ思ひてある、貧しきは暇をなみ、冬墾りと麥のうねうね、鍬もて背子が打てば、をみな子の乳子を抱かひ、家に置かば守る人なみ、筐床と卵つぎがしたに、獨り置かば凍えすべなみ、暖き肌に背負ひて、七たびも踏むべき麥と、腿立ちの踏みの搖すりに、こころよく乳子は眠りぬ、往還り實にし踏めば、薄衣まとへどぬくく、粟も稗も饑ゑばうまけむ、あきつなす數なきものの、自らも思ひあ

れば、世をうけく思はずあらめと、人の身を
吾はいたみぬ、見るたびことに

利根の河口に亂礁常に波荒て舟行甚だ沮む、唯晴礁あかべ鹿根の二島の間僅に平靜なり、大小の船舶皆之より出入す、故に風威一たび加はれば復た近づくべからず、此邊一帶の濱漁人の命を損するもの年に幾十を以て數ふといふ、一月二日寒風凜烈一船底を破りきと傳ふものありければ、

利根川や八十(やそ)河(かは)こめて、遙々(はるぐ)に濶(ひろ)きながれの、
川じりゆ吐き出づる水を、逆(さか)むけて打ち寄る

波は、和のよき日にも搖れども、おも揖はあかゞが島と、下總のつめの守部、とり揖は鹿島根が巖と、常陸のはての守部に、波ごもりたゞふ二島、二島のひまのなごみに、眞白帆を掛けのつらなめ、鮪舟あさ行きしかど、かへり來る灘のあらびの、速吸の潮のまにまに、過ちて巖に觸りけむ、そこすぎば安けむものを。速吸の潮のまにまに、其舟をあはれ

吾が家に蛹の生きたるを見てよめる歌

天地の未だ別れず、油なすありけむ時に、濁

れるは重く沈みて、おのもおのも成りけるなかに、なりざまの少し足らざる、蛸といふは姿のをかしく、動作のおもしろきものと、漁人の沖に沈みし、蛸壺に籠りてある時、疣白物曳けども取れぬを、蛸壺の底に穿てる、其孔ゆ息もて吹けば、駭きて出づといふ蛸の、ここにして桶の底ひに、もそろもそろ蠢きてあれば、ほとほとに頭叩き、おもしろと我打てば、うつろあたま堅くそばたち、忽ちに赤に酔ひたるは、蓋しくも憤るならし、眼もちもおもしろ、蛸といふものは

お伽噺に擬して作れる歌

犬蕨しぬにおしなべ、雲積める山のなだれに、杉の葉をくひつつある、兎等に猿のいへらく、なにしかも汝が目は赤き、汝が耳は恐れのしるし、渓をだに出でがてにするを、枝渡り容行くことの、我が儕はしかぞかしこき。斯くいへば兎いへらく、山媛の我をめぐしと、石楠の花をつまみ、豆梨の花をつまみ、豆梨を口に吸ひ、石楠を口に吸ひ、我が目らに塗らせりしかば、美しくしかぞ成りしと、いへる

時山毛欅のうつろに、潜み居し小兎いはく、
誇らひて汝はあれども、蛸とるとありける時、
鱶の來て臀くひければ、室の樹の枝に縋りて
七日まで泣きてありしゆ、汝が族臀は赤く、
汝が族木傳ひ渡り、汝が族しかぞ喧し、然か
も尙ほこらひ居りやと、小兎のいへりしかば、
憤り猿跳り來、爪立てにつかみかかれば、枝
攀づる業は知らざる、愚かしき兎が伴は、眞
白毛や雪深谷に、まがひけるかも

幼少の折に聞きけることを思ひ出でて

粗朶の、あら垣や、外に立つ、すぐなる柿の木、植竹の、梢ゆれども、さやらぬや、垂れたる枝、梯もてど、屆かぬ枝、其枝に、塵吊りて、剝ぎたりと、老ぞいふ、其老が、皮はぎし、總角に、ありし時、抱かえし、眉白髪櫓掛け、猪も打ちきと、いへりきと、老ぞいふ、すぐなる、澁柿の木、澁柿は、つれになれど、小林は、陸穗つくると、蕎麥まけど、荒もせず、あら垣や、粗朶がもと、たまたまも、聞過ぐと、紅の、芥子散りぬ、箒草、こ

ぼれがなかへ、はらはらと、芥子散りぬ

雲雀の歌

春の野に群るる神の子、
黄金の毛を束ねたる、
小さなる締もて、
手に手に立ち掃きしかば、
縁しく麥の畑に、
黄金の菜種の花は、
眞四角に浮きてさき出ぬ。

白玉のつどひの如き、
神の子は戯れせむと、
其花の筵の上を、
ふわふわと飛びめぐれば、
柔かく濕める土に、
ほろほろと止まず花散る。
其時に神の子一人、
硝子(びいどろ)の管(くだ)をつけたる、
白銀(しろがね)の長き瓶より、
噴き出づる瓦斯を滿たしめ、
風船玉空に放てば、

そを追ふと神の子あまた。
碧なる空のなかからに。
其の玉を捉へ打ち乗り、
あちこちと浮きめぐりつつ、
括りたる白絲解きて、
其玉の縮まる時に、
ふわふわとおりもて来ると、
風船玉やまず放てば。
飛びあがり飛びあがりつつ、
餘念なく戯れ遊ぶ、
斯る時神の子一人、

蟲あさる雲雀みいでて、
こそばゆき麥の莖に、
掻きさぐり一つ捉り來て。
小さなる嘴をあけ、
白銀の瓶の瓦斯を、
其腹に滿て膨らまし。
すらすらと空にあがりて、
小さなる其嘴より、
少しづつ吐かしむる時に、
囀りの喉の響は。
針の如つきとほし來ぬ。

菜の花の薹に立て、
めづらしむ神の子なべて、
おのがじし異當とると、
追ひめぐり羽打ち振れば、
麥の穂に白光立ちて。
さゝへさきへ波は移りぬ。
かくしつゝ神の子どもは、
悉くまひのぼれば。
うららかに懶(ものう)き空に、
滿ちわたる輕き空氣は、
左右縱に横に、

こまやかに振動しつつ。
畑打の耳擦りて、
響は止まず。

獨

一

ととととと喚べば馳せ來て、
麥糠にふすまを交せし、
餌箱に嘴を聚め、
忙しく鷄は啄む、

そを見つゝ庭に立てば、
家のうち人もなし。
母は今外に在り、
父共に外に在り。
芋植うる畠の日行きて、
芋植ゑて既に久し、
二人なる家族(かぞく)なれば。
唯一人我は殘れり、
掛梯子昇り行き。
藁の巣に卵うみて、
牝鶏(めんどり)の騷ぐ時、

寂しさは纔（わづか）に破る、
つれづれと永き晝、
遠蛙ほのかなり、
濕りたる庭のうち、
はららかに辛夷（こぶし）散り、
手桶なる茹菜（ゆでな）の中に、
菜の花の匂へる見れば、
世の中は春たけぬらし、
我は只一人居り、
つつみある身をいたはりて、
我が母は外に在り、

すこやかに今なりて、
歸らむと思へば嬉し、
口髭は常剃りしかど、
剃らざれば延びにけり

二

垣隣人をよびて、
口髭を剃らしむれば、
松葉もてつつくが如し、
芥子坊主剃り殘されて、
只泣きに泣きし此の方、

斯くばかり疼きことなし、
こそばゆき顎をさすり、
春日さす縁に立てば、
ぱらぱらとジョン馳せ來つ。
午餐する茶を沸すと、
草取りに畑に行きし、
下婢は今かへり來らし、
縁側に足を掛け、
我を見るはしき犬、
煎餅をもて行けば。
前足を胸に屈め、

後足に立ちながら、
ワンといへばワンと吠ゆ、
板の間の猫の皿を、
ことことと雛のつつくに、
ししといひて我が立てば、
忽ちに雛追ひ立て、
竹藪に追め騒がし、
尾を振りて我が許に來る、
桑畑へ鎌もて行く、
草取りと野に行けば、
桑の木の枝移り鳴く、

頰白に吠えながら
先へ先へ駈けめぐると、
人ならば草臥れむ、
砥を立てて鎌を研ぎ、
草取の復た行くを見て。
ぱらぱらと馳せ行くを、
煎餅もて喚べば戻り、
煎餅の竭きし時、
ジョンジョンといへど還らず、
木瓜の葉は花を包みて。
山吹も今は盛りに、

静かなる眞晝の庭、
はらはらと雀下りて、
其處此處とあさりめぐる、
明日は又雨なるべし

俳句

白菜や間引き〳〵て暮るる秋

七年の約を果すや暮の秋

散りぬべき柳の秋の毛蟲かな

花煙草葉を掻く人のあからさま

藁灰に筵掛けたり秋の雨

豆引いて莠（はぐさ）はのこる秋の風

わかさぎの霞が浦や秋の風

佐渡について母への状や秋の風

蓼の穂に四五日降つて秋の水

此村に高音の目白捉へけり

鳴きもせで百舌の尾動く梢かな

柿くふや安達が原の百姓家

柿赤き梢を蛇のわたりけり

芝栗の落ちたるを拾ひ枝を折る

雛栗(ひよひよぐり)やここに二つを珍らしむ

芭蕉ある寺に一樹の柚子黄なり

一うねは桐の木蔭の黄菊かな

わせ刈つて鶴の伏す田となりにけり

狼把草(たうこぎ)の花さく頃や稲日和

掛稲の下や茶の木の花白し

飛彈人の木を流す谷の紅葉かな

蟲ばみし櫻なりしが紅葉かな

松間やほがらかにして櫨紅葉

胡麻干すや寶勝になりし木芙蓉

茸狩や櫨の紅葉に來鳴く鳥

足もとに光る茸や夜山越え

木瓜の子（み）や葉は皆落ちて秋の霜

稻を扱く藁の亂れや赤蜻蛉

南禪寺所見

亂れ伏す小萩がしたや鉋屑

霞が浦

白帆遥にわかきき船や蘆の花

　　倚堂除隊

營を出てさやかに秋の瀬戸の海

　　秋水は韓せり

我喚ぶを後も向かず秋の人

―明治卅七年―

增補

潮

三月二十六日常陸多賀郡水木濱にあそびて

大甕の水木の濱に潮滿つといたぶる浪に搗布(からめ)さはとる

潮さゐの水木の濱に爪木(つまき)たく蜑人さわぎかちめとるかも

水木の濱そなれの椿しげけれど潮風寒み咲きのともしも

濱風のなごけの椿小枝枯れ見のさびしもよ花は咲けども

おなじく二十七日水木より久慈郡に越ゆる途上

もののふの眞弓の山は春雨のなかに越ゆれど潮の音聞ゆ

あられふり鹿島の浦の松原にあなさゐさゐし鳴潮の音

白檀弓(しらまゆみ)矢刺の浦に人居滿ち潮のなごみに網引(あびき)する見ゆ

——以上明治三十五年——

再補遺

初期の歌

長塚氏の同窓の友であつた瀧口述氏から小布施順次郎氏を經て長塚氏直筆の歌稿一綴を送られた。歌稿は改良半紙八枚一綴で歌數が七十五首ある。字體は草體で一寸見ると女が書いたのではないかと思はれる程纖細である、而してよく見ると其のうちに矢張り晩年の書體の面影を認める事が出來る、瀧口氏の說に據ると是等の歌は明治二十九年あたりのもので、長塚氏がまだ中學校に居た時分だと云ふことである（大正四年齋藤茂吉記）

葉（四月廿三日）此日東京に赴く

ひとよ寢しあしたの風は音せねど霜にしをるる花菫かな

清水谷公園にて(五月五日)

風ふけばそれかと人の影みせて心まどはす青柳のいと

亀戸にものして

朽ちはてし去年の落葉の下に萌えてひとり花咲くつぼ菫かな

卯花浮水(題詠五月三十一日)

さと川や馬ひき入れしあとならし浮ぶうつぎの花のたえまは

折にふれたる(五月十七日)

人訪はぬ小篠が原を分け行けばただ露のみぞ散りまどひける

近郊遠足に出でゝ澁谷を過ぐ(五月九日)

竹伏して水も見分かぬ澁谷川音せぬ風の來ては行くかな

岸に藤あり(同日)

岸のべの折れ伏す竹にまどひつつ澁谷の川に寄する藤波

深夜夏月(題詠五月十二日)

瑞枝さす青葉が上に澄めれども更け行く月は

見る人もなし

野撫子(題詠五月十二日)

心なき野守が宿の蓬生に苅り殘されし撫子のはな

宿雨(五月三十一日)

かやぶきの軒の雫のひまをなみ開けぬとぼそに日も暮るるかな

山上觀望(五月三十一日)

まぐさ刈る麓の原は木がくれて思はぬ方に立つ烟かな

梅花浮水

里の子が遊びしあとも著くして小川の岸に梅ぞ散り浮く

枯野

打わたす木々の下草すすき原野べは色なくなりにけるかな

春雨

あわ立ちて今朝は流るる里川の柳つのぐみ春雨のふる

早春野色

賤の男も稀には見ゆる麥はたに專ら雲雀のあさる頃かな

夕烟（四月廿五日）

一もとの帆柱見えて川添の蘆原のぼる夕烟かな

伏木といふを過ぐ（六月下旬東京途上）

四手網引くや翁が手すさびに水せきとめし里のささ川

江戸川所見

岸のべの水のよどみに柱立てさしぬる庵や漁師(いさりを)が宿

帰途汽車をかりて松戸附近を過ぐ

おしあくる車の窓をふきすぎて小田の榛原わ

たる夕風

六月中旬汽船にてかへる

夜をこめて舟うつ波の音高みまろ寝の夢のえこそ結ばね

夜明く

あまぐもはさながら深くとざしゐて侘しき空を夜は明にけり

沿岸矚目

住み棄てし堤の庵は傾けど道ゆく人の雨や避くらむ

うなゐの子を先立てて行く夕暮の野べの末より立つ烟かな

遠山雲

朝まだき西の群山雲おほひぬやがても風の吹かんとすらん

萍(五月十二日)

寄せかへす波に任せて浮草は憂きこと知らに生ひ茂るかな

筑波山に登りて(十二月廿八日)

筑波ねは身にしむ風も吹かねども集めてぞ見る雪の山々

樹蔭に入る(三月八日)

人訪はぬを暗きなかに一人ゐて哀れ木の間の月を見るかな

仙湖小波(三月八日)

月かげをおぼろながらに碎きつつ小波ぞ立つせはの湖

小佛嶺の麓千木良な過ぐ(六月十二日)

里の名にかけてぞ我もちぎらばや山坂道をまたも越ゆべく

六月十一日甲州に行く途上高雄山に登る

高雄山峰の木立は深くして杉のうつほに鳥が

音ぞ啼く

（アララギ第八卷第六號より）

青木嶽兒氏よりうへ六甫の来歴知せ来れるに

返せるはがきの末に記せる歌（編者記）

まかがやく金色姫がなりしとふくはし桑子の

神ものがたり

（明治卅四年四月十五日はがき）

つゆ霜

あくる日の次の日は筑波にのぼりたまふよしきこえ侍りしかども、雨のかつふればそれもおぼつかなくおぼゆるに

つくばねに明日のつぎの日い行かむと明日の日ふらば行かぬものかも

おぼろげにはあれども、山のみえわたりたれば

つくばねは雨のふる日はみえななといへどももとな見ゆらくも怪し

こよひいたくふらばはれぬべくおもへば

秋雨のはれの朝明のきよやけく山は見えむとけふ降るらしも

ついたちにと行しまは、八日にぞ行くにや、山の色づきたらむさまは少しおくれたらむできらにまかるべき

筑波根の櫟の木の間にいちじろくもみぢすらくは七日より後

ことし六月にのぼりける程は、いただきの芭まだ二尺ばかりなりしも、今は秋も末になりたれば

つくばねのたをりの芭とまに葺きこもらばいかに雨はふりとも

つくばねのたをりの芒しかじかに招けばかも
やおもひやまざらむ

ひとりのみしてのぼらむはいつにても心のまゝなるべし、少女どもあまた倶していゆかむこそまたなく興あるものなるべけれ

ひとり行きつつみれどもあかぬ秋山を少女が
ともとゆくがたぬしさ

つゆ霜のおける木ぬれををとめ子のあけの丹
の頬にたぐひてを見む

以上八首のうた、みそかといふ日に雨のふりて
つれづれなるまゝのすさびによみいでたるも
のにはべるを、おぼつかなしや。（編文女學校主三

浦義晃師の許にて（山鳥の渡し」より）

一日ふもとの甲より筑波へ行くとて、霜のふりたるを見てよめる歌のうち一首

つくばねのしづくの田居に立つ霧の夜凝りに
こりておける霜かも
（明治三十七年一月十日岡麓へはがき）

きのふみし葉書のかへしきのふ書きけふも書
きつつ待ち遠みかも

わすれ草わすれて春はもえなくに來といひし
ことはな忘れそね
（明治四十年四月十日横瀬夜雨へ端書）（「山鳥の渡し」より）

横瀨夜雨へ消息して來訪を待つよし記せる後に

我庭の辛夷の雨にそぼぬれて松雀(まつめ)も鳴けど待つに來なかず

靑桐のすぐなる幹に涙なすしづくながれて春雨ぞふる

(明治四十年四月十日)(「山鳥の渡し」より)

明治四十二年春廣丘村へ單身移り住みし柿の村人に手紙の代りに贈れる歌二首(編者記す)

家にあらば妹が干すらむ洗ひ衣(ぎぬ)わが手と干すか森の木のまに

蠶豆(そらまめ)の花おしわけてひよこらの遊ぶを見れば
家思ふらむか

わが里は櫟林にたゆたへる春うながして鶯(うぐひす)
の鳴く

(故人所有ボール紙に切れを張りたるカバン様
のものの裏に書きつけし二首の中一首)(一首は
長塚節歌集にあり)(長塚順次郎氏藏)

明治四十五年五月二日依田秋圃へ消息の端に

もろ共によしとめたしと語らへる樅の若葉は
庭にもえたり

「鍼の如く其五」の原稿

八月十四日退院(大正三年)

朝顔は蔓もてはひれおもはぬに榊の枝に赤き
花一つ

十六日、朝博多を立つ、日まだ高きに人吉に下車し林といふ温泉にやどる、暑さのきびしくなりてより身はいたく疲れたりけるが俄に長途にのぼりければ只管におそるゝところは發熱の伴はんことなり

手を當てて心もとなき腋草に冷たき汗はにじ
み居にけり

十八日宮崎につく、十九日折生迫にいたる、青島目睫の間に横はりてうるはしけれど此日より驟雨いたりやがて連日の時化なれば心落ち居ざれば出ありくことも成り難きに漁村なれば食料の蓄もなく

すべもなくまなこつぶりて箸（筍を）取るに我は瘠せんと茶を掛けてはむ

酢をかけて咽喉こそばゆき芋殻の乏しき皿に箸つけにけり

二十五日に入りて雨やむことなく戸を打つことはげし

捩れたる手枕解きて外をみれば雨打ち亂し潮

の霧とぶ

嚙みさ嚙み疾風は潮をいぶく處に衣も體もぬれにけるかも

二十六日漸くにして晴る、宿は松林の中にひとり離れて建てられたるが、道も庭も松葉散り敷きこあたりは漁舍たり

垣根なる糸瓜の花も此朝は小さくなりぬ痛みたるらむ
（とぼしくさきぬ）

おなじ松林のほとりに少し隔てゝ壁やぶれてかゝくも住みなしたる家あるに、けさは殊にすざましくみえたり

とぼしくも松葉を竈に焚くけぶり糸瓜の花に

淡くしてきえぬ

二十七日、宮崎に來りあくれば快きまゝに跣足になりてまだきに大淀川のあたりそゞろありきす

朝まだき涼しく渡る橋の上に霧島を低く沈みたり見に．

ゆくりなく霧島山に攀ぢみんとすべなかりける身をかへりみつ

九月一日、鵜戸の宿にまうでんと內海といふ處より船に乘る、おくれば一日樓上に午睡を貪る

手枕に疊のあとのこちたきに幾時われは眠り

たるらむ

身をはしてしばし休らはむ

うるはしき鶴戸の入江の懐にかへる舟かも沖に帆は浦へ

渚に近く岸をおほふて一樹の松そばだちたるが、枕のうへに葉の散り込みたれば

松の葉を吹きこむかぜの涼しきに咽びてねがはさめにけらしも

二日、油津の港より飫肥にいたる、花の亭といふにやどる、鯛のもとにわづかに芋などくりたるを見る

ころぶせば枕に響く淺川に芋洗ふ子もが月白

くうけり

四日、油津の港より船に乘りて外の浦といふところへ行く、漸くに探しあてゝわびしき宿なれども、靜かなる入江も見えてうれしきに、もとより戸は立てしめず、閾の際に枕したれば、目をひらけば滿月明らかに蟵のうちをのぞく

蚊帳越しに雨のしぶきの冷たきに二たびめざめ明けにけるかも

六日、波あらき海上を折生迫の漁村にもどる、此夜ふくるまで眠らず、かすかなる蟲の聲に耳をすます

547 草に捨てし西瓜の種がこもり鳴く松蟲きこゆ

海の鳴る夜に

八日、陰晴定めなき季節のならはし、雨なりなり
はげしく障子を打つ

横しぶく雨のしげきに戸を立ててこよひは虫
は聞えざるらむ

九日、再びしけになりたれば食料の不足おそろ
しくて宮崎へ行く、十三日、折生迫にもどれば同
人の手紙などとどきて居けるを拔きなども腕(？)
て行くにひとり窃におもひ煩ふことなきにも
あらず

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のを
らぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとな遮莫をとめのことは暫し語らず

日向にいりて西瓜と、梨瓜とて胡瓜の如き白き瓜のおほきが目につきたるに、宮崎につきて殊におびたゞしきをみる、人をおとづれて梨瓜を求むるに、輪切りといふものにして皿にもられけるを

をさなきゆしかせりしかば瓜むくと竪さに割かばなほうまからむ

十四日、けさは快く晴れたれば、心もしづかに起きいでゝ沖の方を見る

蝕みて鬼灯赤き草むらに朝は嗽ぎの水すてに
けり

籬に赤き鬼灯に

草むらに咲ける南瓜の花共に疲れてたゆきこ
ほろぎの聲

午に近きに傾き身を起してさゞろふみけさす

漁り舟はこゝらに近けば海原は俄にひろくみえ
わたるかも

沖もやうやゝ和ぎたり.

鯛とると舟が帆かけて亂ればば海は俄に濶く
なりにけり

沖に

蟖に別れて淺き夜のほのかに愁し（第一、五句未成？）

夜は眠りに落つるまで虫の聲なつかしく

こほろぎの夜ふけて鳴けば鬼灯の庭のくまみをおもひつつ聽く

こほろぎはひたすら物に怖れどもおのれ健かに草に居て鳴く

別府の港へわたる船を待たむと、此の日内海といふところ（に脫？）ゆきてやどる

このよひはこほろぎ近し厨なる笊の菜などに居てか鳴くらむ

十八日、豐後國別府の港にやどりてありけるが、

俄に乳衣とりいだして貰ひぬ

こころよき刺身の皿の紫蘇の身に秋は夕は冷（俄に秋は）えいでにけり

このごろは蜩々とよぶ聲にすゞしき朝の嗽せりけり

三十日、博多にもどりてありける程此日雨つめたし、百穗畫伯の庭にはじめてさきけりとておこされたる秋海棠の葉書など手にして、其花いまはありやなしやな(ど脫?)思ひまどひつゝ

うなたれし秋海棠にふる雨はいたくは降らず只白くあれな

いささかは肌は冷ゆとも單衣きて秋海棠は見るべかるらし

ゆくりなくやどのせまき庭をのぞきて

秋雨のひねもすふりて夕されば朝顔の花萎まざりけり

十月一日、庭の朝顏けふは一つも花をつけず

朝顏の垣はむなしき秋雨をわびつつけふも復いねてあらむ

日ごとに病院へかよふ、門を入りてうれしきは鷄頭の花なり

鷄頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも

（一字睦ッ?日、ふたゝび秋草のたよりいたる

苅萱と秋海棠をまじ□（一字不明）らば未だはみねどなら（ともまじりなば）
べたるべし（らむ）

わびしくも痩せたる草の苅萱は秋海棠の雨な
がらみむ（二十六日夜）

熱たかければ日ねもす蒲団ひきかつぎて苦し
み居るに、入浴することも稀なるが、十八日の朝
たま〳〵裏戸をあけて行く

かつかつも小さき花の朝顔はまだきは咲かず
あはれとぞ見る

浴みして朝こころよき冷たさに苔まだ堅し其
朝顔は

（すがしき朝の　朝顔は苔まだ堅し其つめたき）
（朝顔の花いまだひらかず）

蔓ながらくたれて萎えしあさがほの枯葉はむ
なし（五句未成）

幾夜さは蚊帳に別れて淺き夜のほのかに愁し
雨のふる夜は

（淺き夜を蚊帳に別れてほのかにも愁しくなりぬ）

われは小さき蚊帳を好めるに、籔蚊のおほきと
ころなればいつまでもつらせてありしを

古蚊帳のひさしく釣りし綻びも別れていまは

懐しきかも

吸入室いまどのもとに一坪ばかり庭の砂かきよせて苗などしてありけるが、ながらくも夏の日に枯るゝことなくてありけるを心にも掛けざりしが、秋もたけていまは一尺餘りに成りて、病院にかよふ日は必ず目につき、ありけるが、十一月十一日折から時雨いと強く降りて騒がしかりければ

はらはらと松葉吹きこぼす狭庭には皆白菊の
花さきにけり

次の日は庭は熊手もて掃かれたれど、窓のもとに日を放てば

白菊のまばらまばらはおもしろくこぼれ松葉を砂のへに敷く

十四日、夜に入りて雨いたく降るにふとおもひいでゝ

松の葉は夜たこぼるらし小夜ふけて廂に雨のあたるをきけば

此の夜やみがたきことありて雨を衝いて久保博士を訪ふ

しめやかに淺き雨夜を籠ながら山茶花の花こぼれ居にけり

三十日ばかりの間俄に九度近く昇りたる熱さむることなく、病院へかよふ外は只蒲團引きか

ぶり苦しみければ、常は季節に疎しともおもはざりける身の、山茶花の花を見ても俄におどろかれぬるにおもひいづれば

吸物にいささか泛けし柚子の皮の黄に染みけるも久しかりけり

十五日、客い絶えたりければふと一室よりかの十坪に足らぬ裏の庭を見おろしけるに、わか木なれどもこゝにも

ひそやかに下枝ばかりにひらきたる山茶花白くこぼれたり見ゆ

其幹あまりに小さなれば

山茶花はさけばすなはちこぼれつつ久しくあ（いくばく久）
らし霜はまだ淺し（にあらむとすらむ）

十一月十六日、しばらく熱低くなりたるに人を
たづぬることありて出で行く、快きことかぎり
なし

不知火の國をかぎれる背振山たひらかにして（のさかひに遙かなる背振の山は）（のうるはしき）
煖かに見ゆ（二十六日夜）

山茶花はあまたも散れば白き花を土にみむも（土にして白きを見るに垣内）
の垣内には立つ（には立つ）

雀のこのむ木なればか鳴りかはしてかしまし
きに

山茶花に雀はすだく時にだに姿うつくしくあ
れなとぞおもふ(二十五日夜)

女の茶の花をさげてゆくを

手に持てる茶の木の枝に括られして凝りて黄なる草の花何(二十七日夜)
黄に凝りたる

十九日、快晴なれば出でありく、朱欒の青きがそ
こゝの店に置かれてまだ一つ二つは残りた
りとおもふに、梢に垂れたるは皆既にいろづき
たるにおどろく

竿につりて朱欒の上の白足袋は乾きたるらし
動きつつ見ゆ

二十二日、捷路をたどりて觀世音寺に詣づ、こと
しはじめてなり

稻扱くとすてたる藁に霜ふりて梢の柿は映え
れば柿は赤くもなりに
にけらしも
けるかも

二十二日、太宰府の觀世音寺にまうづ、此行こと
しはじめてなり、先づ彼蒼然たる古鐘を仰ぐ

手を當てて鐘は冷たし爪叩き目をとぢてきく
其のかそけさを
手を當てて鐘はたふとき冷たさの爪叩きみつ

其のかそけさを(二十七日夜)

朱欒植ゑて庭暖き冬の日の障子に足らずいまは傾きぬ

二十二日、空低く垂れて氣候激變す、さゝやか(な脱?)る店に蔬菜のうれいこりたるをあはれと見る

うるほへば只うつくしき人參の肌かはきて寒き朝かも

二十六日、百穗畫伯の來狀に接す、寒雲低く垂れ込めて庭に落葉を焚くなど見ゆ、これ三日以前のことなればこゝにも俄に衣を襲ねたることあれども氣候に相違あるをみとむべし

幾ばくの落葉にかあらむ掃きよせて竈には焚かず庭にして焚く（二十六日）

落葉焚きて寒き一夜の曉は灰に霜置かむ庭の土白く

二十九日、筑後の國に人をおとづるゝことありて朝まだきに立つ。おもはぬ霜なり、此の如きは冬にいりてはじめてなりといふ

芒の穂ほけたれば白しおしなべて霜は小笹にいたくふりにけり

或る山寺の庭に立ちて

枳椇庭に落ちたればめづらしみひらひてあれ

乏(?)しく庭に落ちたるを

ど咎めても聞かず

明治四十五年七月□日、中津にかへる、耶馬溪に入りてより九日目なり、宿は柱も朽ちかけたるに老夫妻ばかりすまひなり

ほのかなる夾竹桃のたそがれに白粥をしぬ我は疲れたり

大正三年六月□日夕、山崎をすぎて大雨いたる

天霧らふ吹田茨木雨しぶき遠の津の國暮れにけるかも

九日、三たび播州を過ぐ

宵にふり朝すがしき播磨野の松の上なる白鷺の城

十七日、出雲の杵築にいたり大社に宴す、其の本殿の構造簡易にして古樸なれども之をあふげば雄大にして森嚴、彼の八千矛の神大國主の草昧の民の上に君臨せる俤を只今目前に瞻るのおもひあり

八方の天が下には言絶えて歎きたふとび誰か仰がざらむ

八日、朝

松の葉を繩に括りて賣りありく聲さへ寒く雨もふりいでぬ

十二月二十三日、日ねもす北吹きやまず

明るけど障子は楮の紙うすみ透りて寒し霰ふ

る日は（二十四日作）

我は巷のうちにありて朝はおそくまで起きいづることもなきに、けさは霜のいたくおりけりなど人のいふをきくごとに、いまは離れて久しき林間のこみち憶ひいづることしば／＼なり

枯芒やがて刈るべき鎌打ちに遠くへやりぬ夜は歸り來ん

日がさせばはらはらと楢の葉は落ちにけり

はやり夫の太刀の痣丸鞘を離れ霰は庭の石打ちて寒し（十二月十八日夜）

落葉焚き□さりたるあとに栗のいが獨り燻び

（一字不明）

て朝の霜寒し

黄に染みし朱欒の枝に二つ(雨ごもり)居て雀は鳴かず寒き日は悲し(十二月二十二日)

厨なる廂の下の大根の葉みな黄に成りて寒き此頃

繩引きて牛が草はむこみちには茨花咲き土假ひて白し

草はむと牛がたづなを引きづれるみちの茨は土假ひて白し

爽かに萩はなべに茂れれば此の□□(二字不明)島を軟かにおもほゆ

二十三日夜

痛矢串白きが鹿の胸に立てし峰の杉むら霧吹き止まず

矢を負ひて斃れし鹿の白き毛にいたましき血はながれけるかも

夜もすがら鹿はとよめて朝霧にたふとく白く立ちにけるかも

深谷の鹿の血しほの滴りをかなしき雨はあらひすぎにけり

長塚節歌集終

卷末記　其の一

一、再補遺は雜誌書束等に現れた長塚節氏の歌で、長塚節歌集中に見えぬものを輯錄した。年代の明かなものはその順序に從ひ、然らざるものは、推定によつて順序を定めた。

一、最終「鍼の如く（其五）」は、大型手帳中に記してあるものであつて、アララギに現れる前のものである。故人は、歌の推敲は勿論、歌の前書き文章にも非常に苦心をなした。兩者を對照することは後人の爲めになるかと思ふゆゑ、そのまゝ輯錄した。

大正十四年十一月十八日　　島木赤彦

巻末記　其の二

一、この歌集は、大正六年に古泉千樫氏が主に編輯校合した、「長塚節歌集」に、若干の増補をなして、長塚節全集の中の一編と成したものである。増補は全く島木赤彦氏がなした。

一、大正六年發行の長塚節歌集には次の如き、古泉千樫氏の文章がある

本書には明治卅三年以降の長塚節氏の作歌全部を收むることにした。長塚氏はもと謹嚴自重して、歌集などもなかなか出さうとしなかつた。晩年吾々アララギ同人の勸めによつて、漸く歌集の原稿を作りか

けた。むろん未定稿ではあるが、それには明治四十五年「病中雜詠」以前の作は纔に二百首ばかりしか採つてない。非常に嚴選するつもりであつたらしい。今かうして作歌全部を收錄することは、長塚氏の本意ではないであらう。しかし、吾々はこの方が却て直ちに長塚氏を知る上に於て貴いと思つたので敢て取捨選擇を加へなかつた。

本書中新聞雜誌に發表當時の作と往々字句を異にするもののあるのは、歌集草稿及び茂吉千樫等所持の雜誌に長塚氏自身が筆を入れられたものに依つて訂正したのである。

一、長塚節年譜は、橋詰孝一郎氏の「長塚節年譜略」に本づ

いて古泉千樫氏の作つたものを、更に島木赤彦氏が幾分增補したものである

一、本書の口繪には四葉を選擇した。その中、「長塚節肖像」は大正二年の夏、伊藤左千夫先生の歿後間もなく、無一塵庵に於て平福百穗畫伯の寫生されたものである

「短册三葉」のうち一葉は、長歌を書いた珍らしいもので、寺田憲氏の所藏に係るものである。短歌を書いた一葉は私の所藏で、私の家の燒跡から掘出したものである。

「秋海棠畫賛」は百穗畫伯の秋海棠圖に讃されたもので、久保より江夫人の所藏に係つてゐる。このたび

全集を發行するに際して、久保博士夫人は態々この珍藏の袱紗を寫眞に撮つて送られたのであつた。「歌稿」(乘鞍嶽を憶ふ)は原稿紙に萬年筆で書いたものであつて、胡桃澤勘内氏の所藏に係つてゐる。

一、「長塚節全集」の裝幀は平福百穗畫伯苦心のたまものであり、扉の題簽は岡麓氏に御願した。

一、本書の校正は、山口茂吉氏と私とがした。

一、本書發行の一切の世話は島木赤彦氏がする筈であつたが、悲むらくは本書の校正刷をも見ずして逝かれた。そこで私は不敏を顧ずに亡友の志を繼いで少しく世話をなした。島木赤彦氏は、「卷末記其の一」だけにとどめて置くつもりであつたのであるが、なほ數言

附記の必要を感じたので、如是の卷末記を作つた。

大正十五年五月吉日　齋藤茂吉識

大正十五年六月十日印刷
大正十五年六月十三日發行

長塚節全集第三卷
非賣品

著作者檢印

著作者　長塚節

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　共同印刷株式會社

東京市日本橋通四丁目五番地
發行所　春陽堂
電話大手五一・四二一〇
振替口座東京一六一七

頁	行	誤	正
二九九	一〇	間我を	間[illegible]に手を
三〇二	五	ける、、夜具	ける間は夜具
三七八	八	枳楧、	枳椇
四二七	一	い、杭	ゐ杭
四二七	二	い、杭	ゐ杭
四四五	三	筌（う、）	筌（うへ）
四八四	八	枳楧、	枳椇
四五三	一一	小、女	少女

【附言】右正誤表は、全集第五巻（書簡集上）配本に際して、附錄とした、長塚節歌集正誤表の增補である。この增補は、雜誌アララギ、大正六年十月號所載の正誤表をも參照した。正誤表のうちには、長塚氏自身がはじめ誤字を書いたのを直したのもあり、長塚氏自身で後に、訂正した文句もあるのである。なほ、五〇〇頁、二行から三行に亘る、『鹿島根が嚴』は『鹿根が嚴』の誤かともおもふが未だ調中である。以上、正誤表第一、第二以外に誤植の見付かつた場合には、どうぞ私まで知らせて頂きたい。（齋藤茂吉謹識）

一七四	九	濱から布	濱かち布
一八〇	九	批杷	枇杷
二〇六	三	十日	二十日
二三五	八	疲る	渡る
三〇九	五	ゐり	るり
三一二	八	病院生活	病院の生活
三六二	一	竿洗ふ	芋洗ふ
三六二	三	浦といふころ	浦といふところ
四一一	一	觸（なく）	艫（わく）
四四〇	六	綿密	緊密
五〇二	二	雲積める	雪つめる
五一〇	一	立て	立ちて
五二三	五	搗布（からめ）	搗布（かちめ）
五二四	一	濱風	潮風
五四七	五	立てしめす	立てしめず

【附記】活字の悪いために、印刷不鮮明のところはここには書きませぬから、どうぞ御推讀のほど願あげます。（齋藤茂吉謹識）

長塚節歌集正誤表

（長塚節全集第一回配本の分）

頁	行	誤	正
一一	四	三十一日	三十日
七	一	ぬば玉の口の	ぬば玉の夜の
二七	三	心悶そて	心悶えて
二八	三	枇把	枇杷
三八	九	綾絹(あやぎぬ)	綾絹(あやぎぬ)
四六	八	鳥賊	烏賊
六三	八	菩提の歌	菩提樹の歌
六八	一	蘗(ひこほひ)	蘗(ひこばえ)
八六	八	潮の	湖の
八七	四	湖の	潮の
九七	七	多藝(たき)	多藝(たぎ)
一一五	七	神官寶物	神宮寶物
一五一	一〇	石蕗(つくざき)	石蕗(つはぶき)
一五四	三	汙	汗

薄りに見える夕日の中にうら悲しかりけりみれば雪
つめる山。

丘の畠にとだく酔れたる村人等にまじり集へる童子等も見ゆ。

午后の日の光あまねき丘の辺の畑の中の草三本も見ゆ。

ほのかに香る麦の香きこゆ断続えてわれは吹くも
おりかへりつも

しなへ竹かぶさりかゝる暗がりを極しづかに
さやりつゝゆく。

[illegible]夜の醫師は駕に乗りにけれ塗色はげし
この駕かなし。

麥畑の丘のうねりに日あまねく光の中のひと
動きゐる。

百姓の男ふたりが夢からうつもと兄に立ちてはすりに立つも。

一

造り花蓮荷の花は赤いろの花傘のごとつくられいけり。

造り花蓮荷の花は竹ざおにさげりしいれば散りにけるかも。

此の左翁と連れ立ちてこの土をふみしが、今はすでに亡し。
（感慨無量、三月二十日）

〃 〃

竹藪の蔭にのこれるはだら雪いたおる寂したへがてぬかも。

たまたまに鐘をならしけるはおー竹林の林にかかりけるかも。